

入研協

大学入試研究 の動向

第31号

特集1 「入試における評価尺度の多元化を考える」

平成25年度入研協大会（第8回）「企画討論会」

特集2 「受験対策学習ばかりを助長しない入試改革や教育改革について」

平成25年度入研協大会（第8回）「公開討論会」

特集3 「人口減少期のセンター試験と受験出願動向の実相」

平成25年度入研協大会（第8回）大会関連行事

「大学入試センターセミナー」

平成26年3月

全国大学入学者選抜研究連絡協議会

独立行政法人大学入試センター

目 次

はじめに	・・・・・・・・ 全国大学入学者選抜研究連絡協議会
	企画委員会委員長 川嶋 太津夫

○ 特集 1

「入試における評価尺度の多元化を考える」	・・・・・・・・ 5
平成25年度入研協大会（第8回）『企画討論会』	
日 時	：平成25年6月6日（木） 10：10～12：40
会 場	：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 大ホール
司 会	：沖 清 豪（早稲田大学文学学術院教授 入学センター副センター長）
	山 村 滋（大学入試センター研究開発部教授）
パネリスト及びサブテーマ	
白 川 友 紀	（筑波大学教授 アドミッションセンター/システム情報系）
「先導的研究者資質の評価」	
中 津 将 樹	（国際教養大学入試室長）
「『求める学生像』に合致する学生を確保するための選抜」	
本 郷 真 紹	（学校法人立命館総長特別補佐 立命館大学文学部教授）
「私立大学におけるAO入試の現状と課題」	

○ 特集 2

「受験対策学習ばかりを助長しない入試改革や教育改革について」	・・・・・・・・ 65
平成25年度入研協大会（第8回）『公開討論会』	
日 時	：平成25年6月6日（木） 14：00～17：00
会 場	：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 大ホール
司 会	：松 浦 克 美（首都大学東京教授）
パネリスト及びサブテーマ：	
淡 路 敏 之	（京都大学理事）
「京都大学の入試改革と研究型総合大学（RU12）における入試改革に関する検討について」	
河 合 久	（中央大学商学部長）
「中央大学商学部における特別入試制度の成果と教育システムのあり方について」	
小 林 洋 司	（全国高等学校長協会 大学入試対策委員長・
	東京都立桜修館中等教育学校校長）
「高大の円滑な接続を推進する大学入試の在り方」	
山 下 仁 司	（(株)ベネッセコーポレーション Benesse 教育研究開発
	センター 高等教育研究所主任研究員）
「主体的な学びにつながる入学者選抜について」	

○ 特 集 3

「人口減少期のセンター試験と受験出願動向の実相」…………… 133

平成25年度入研協大会（第8回）大会関連行事『大学入試センターセミナー』

日 時：平成25年6月5日（水） 15：00～17：00

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 大ホール

企画・司会：大 津 起 夫（大学入試センター研究開発部教授）

パネリスト及びサブテーマ：

内 田 照 久（大学入試センター研究開発部准教授）

「センター試験の受験出願状況の地域特性と年次推移」

鈴 木 規 夫（大学入試センター研究開発部准教授）

「センター試験による私立大学への出願動向」

コメンテーター：

村 上 隆（中京大学現代社会学部教授 元国立大学入学者選抜研究
連絡協議会会長）

は じ め に

「大学入試研究の動向」第31号をお届けします。

独立行政法人大学入試センターは、平成18年4月から、それまでの国立大学に加えて、公立大学、私立大学に参加を呼びかけ、大学の入学者の選抜方法の改善に関する調査及び研究に関し、研究交流の一層の推進に資するために、大学入試センターの重要な事業の一つとして国公立を含めて我が国の大学入試の改善に資するために全国大学入学者選抜研究連絡協議会（入研協）を開催してきました。

入研協では、毎年5月から6月にかけて大会を開催し、研究会、公開討論会、テーマ指定討論会（企画討論会）を開くとともに、「大学入試研究ジャーナル」、「大学入試研究の動向」の刊行物の編集・刊行等の活動も行ってきました。

平成25年度大会（第8回）は、首都大学東京と共催で入研協大会及び関連行事を平成25年6月5日（水）～7日（金）の3日間、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）にて開催しました。今回は、昨年の第7回大会に比べ参加大学は若干減りましたが、昨年同様「企画討論会」を公開するとともに、入試における評価尺度の多元化をテーマとして活発な議論を行いました。

また「公開討論会」においては京都

大学や中央大学等の入試改革の検討状況の説明後に今後の大学入試改革の方向性を議論するテーマにしたことにより、高校関係者など約45名の一般参加を含めて、参加人数全体は496名にのびりました。

共催大学である首都大学東京には、公開討論会をはじめ、大会の企画・運営に多大なご尽力をいただきました。同大学のご協力に感謝いたします。

本号の刊行に当たり、公開討論会および大学入試センターセミナーでパネリストや司会を担当され、テープ起こしの校正等に御協力いただいた皆様、大学入試センター事務局等の方々に、改めて心から御礼を申し上げます。

なお、平成26年度の入研協大会（第9回）は平成26年5月29日（木）～30日（金）の2日間、岩手大学との共催で、岩手県の『アイーナいわて県民情報交流センター』で開催する予定です。また、大会前日の5月28日（水）には同所にて大学入試センターによるセミナーも予定されております。

多数の皆様方の参加をお待ちしております。

全国大学入学者選抜研究連絡協議会
企画委員会委員長

川 嶋 太津夫

（大阪大学未来戦略機構 教授）

特集 1

平成 25 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 8 回）企画討論会

「入試における評価尺度の多元化を考える」

日 時：平成 25 年 6 月 6 日（木） 10:10～12:40

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 大ホール

司 会：沖 清 豪（早稲田大学文学学術院教授 入学センター副センター長）
山 村 滋（大学入試センター研究開発部教授）

パネリスト及びサブテーマ

白 川 友 紀（筑波大学教授 アドミッションセンター/システム情報系）

「先導的研究者資質の評価」

中 津 将 樹（国際教養大学入試室長）

「『求める学生像』に合致する学生を確保するための選抜」

本 郷 真 紹（学校法人立命館総長特別補佐 立命館大学文学部教授）

「私立大学における AO 入試の現状と課題」

司 会（山村 滋

大学入試センター 研究開発部教授）

皆様、おはようございます。

朝早くからご苦労さまです。

それでは、早速ですが、平成25年度の全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会、企画討論会を開始させていただきます。ここのテーマですが、前に掲げてありますように、「入試における評価尺度の多元化を考える」ということで、3人の方々にご報告していただきます。

まず、1人目ですが、筑波大学アドミッションセンター、システム情報系の教授でいらっしゃいます白川先生です。お2人目が国際教養大学の中津入試室長です。3人目が、立命館大学総長特別補佐、文学部の本郷教授です。申しおくれましたが、司会は、私、大学入試センターの山村です。

司 会（沖 清豪

早稲田大学文学学術院教授 入学センター副センター長）

早稲田大学入学センター副センター長の沖が務めます。よろしく願いいたします。

司 会（山村）

では、簡単に今回の企画の意図についてご説明申し上げたいと思います。

周知のように、我が国においては大学入試の多様化政策がとられております。例えば、今年度の大学入学者選抜実施要項の

「基本方針」には、「各大学・学部は、当該大学・学部の教育理念、教育内容等に応じた入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を明確にするとともに、これに基づき、入学後の教育との関連を十分に踏まえた上で、入試方法の多様化、評価尺度の多元化に努める」、このようにされております。

確かに我が国では、これは、もう皆様、ご承知のとおりかと思いますが、多様な入試が行われています。しかしながら、では果たして中身を見たときに、評価尺度の多元化ということが内実を伴って実現されてきているのでしょうか。

きのうのセミナーでもありましたが、2018年以降、18歳人口が減少していきます。そういう中で、多くの大学では、基礎学力に加えて、みずから勉学する意欲とか能力を持った学生は、たとえ手間暇かけても、より精度高く判別する方法は模索せざるを得ない状況にあると考えられます。その際、従来から重視されてきた基礎学力ということに加えて、意欲とか思考力、行動力等、多様な能力をはかることが必要とされているのではないのでしょうか。

こういうような今日の状況下で、入学者の選考においてユニークな方法を取り入れている大学、今回は筑波大学と国際教養大学と立命館大学ですが、こういった大学に、以下の諸点について留意しながら報告

していただくことにいたしました。

各大学のユニークな取り組みの中身とか、それが発案されてきた背景や経緯、アドミッション・ポリシーとの関係、入試における当該学生の評価と大学に入ってから成果との関係、取り組みを実現するための条件、課題等です。こういった点に留意しながら、3人の先生方にご報告していただきたいと思います。大体20分程度、報告していただきまして、その後、休憩をとりまして、その間に、皆様のお手元に質問用紙があるかと思います。それに書いていただいて、回収する者がおりますので、そちらの者に渡していただければと思います。

それでは、早速ですが、白川先生の「先導的研究者資質の評価」ということで、ご報告をお願いしたいと思います。

では、白川先生、よろしくお願いいたします。

白川 友紀（筑波大学教授 アドミッションセンター/システム情報系）

皆さん、こんにちは。

筑波大学アドミッションセンターの白川でございます。本日は、たくさんの方が来られていて、私、こういうところで余り話をするのではないので、緊張しておりますので、何か間違っって変なことを話してしまうかもしれませんが、どうぞご容赦をお願いいたします。

本日は、国立大学と公立大学と私立大学

ということで、私のほうが最初になっているのですが、やはり国立大学というのは、国策でいろいろなことを行いますので、こういう入試をやったかどうかという話が先に来るとい、そういう感じがございます。

本来は、こういう教育目標だからこういう内容の教育をするというディプロマポリシーがあつて、そのためにはどういう入学者を採るのがいいかということで、アドミッション・ポリシーが決まるという話なのですが、私のように工学系の者は、技術者を養成するというので、数学とか英語とか物理学とか、そういう理科の学力があればいいというふうに、大体は思っているわけでございます、学部のほうの立場からすると、そうですね。JABEE（日本技術者教育認定機構）認定というのがございまして、技術者倫理とか文系のこともちゃんと勉強しなければいけないわけですが、それに対しても、入試の時点では、そこそこ読み書きができればいいだろうと思っているわけです。そういうところから、一般的には、一般入試でセンター試験、それから、個別で学力テスト、そういうものをやれば大体いいだろうと思っているわけですが、またそれとは違った学生を探ろうということでいろいろな入試が出てくるということでございます。

まず、筑波大学の場合は、開学以来、推

薦入学をやっております。それは、ペーパーテストだけでは測れないいろいろな人物、人物という言い方は問題があるかもしれないんですけども、高校での学力とか、あるいは生徒会活動であるとか部活であるとか、いろいろな活動も評価していくというようなことで行っています。

実際、追跡調査の結果から、なるほど、推薦の学生は成績がいいな、大人しいし、真面目だし、よく頑張っておるなというようなことで、じゃあ続けようかというようなことが起こってくる、大体そういうような歴史をたどってきていまして、入試をやってみて、追跡調査して、よかったらそれが続いていくというような、そういう導入の仕方が来ているというようなことがあります。

ですから、こういう学生が採りたいから、こういう入試をやりたいと考えて始めるのですけれども、そのとおりの学生が来ているかどうかというのはわからないわけです、実際やってみないと。そういうところがあります。例えば、入試と入学後の学生の統計で、一番よく見られるのは、当然、入学後の成績なんですけれども、例えば入試と進路というようなものを調べてみる。そうすると、23年度、去年の例では、教員になった人が、推薦の学生は337名中14名、一般の学生が1174名中26名、その他3名となっています。そのほか、就活中とか、い

ろいろあります。公務員に採用が決まった人数なども出てくるわけです。それで、割合を見ると、どうも推薦で入った学生さんは、教員になる割合が多いみたいだなというようなことがわかるわけです。これは、別に筑波大学で教員を養成したいから、教員になる人、そういう就職する人を採るために、推薦入試をやっているというわけではなく。結果として、そうなっているということです。

大学院に進学する人数はもうちょっと多いですね。割合が大きい。「その他」の入試の学生は、他の入試の学生より進学者の割合が多くなっていますが、これは、主に編入学の学生が大学院に進学する割合が多いことによって、こんな感じになっています。

そういうことで、今回、研究会で発表する予定でございました筑波大学入試と理数学生応援プロジェクトというものの関係についてお話しします。今ここでしゃべってしまうと、研究会のときに話すことがなくなってしまうので困るんですけども、でも我々の研究者の癖として、とにかく最新のデータを皆さんに見せなければいけないという、そういう癖がありまして、これはここでしゃべってしまいます、あしたどうしようかということになるんですが。

さて、大学に入ってきた学生は、大学に入ったら研究ができると思っていた、あ

るいは、高校でも最近ですと課題研究ですとかスーパーサイエンスハイスクールとか、いろいろな研究をやってきたのに、大学に入ったら座学ばかりでどうもおもしろくないというようなことがあります。我々のほうも、将来、研究者になりたい学生はぜひ育てたいと思うところがございます。

通常の講義で基礎学力をつけるのですが、けれども、そればかりやっていたのでは、探求力とかコミュニケーション力とか表現力とかうまく身につけていけないかもしれない。そこで筑波大学の理数学生応援プロジェクトでは、1年生の間から、「研究者入門」という授業を行ったり、「先導的研究者体験プログラム（ARE）」というようなプログラムも参加させたりしまして、実際に研究者になったつもりで研究をしてみようということをやっております。簡単に言えば「研究者ごっこをやろう」ということです。研究をした事はないが研究に興味がある、卒研まで待たずにすぐに研究を始めたい、あるいは大学入学前に行っていた研究を続けたい、というような学生に参加してほしいと広報しています。

学生の募集については、要するに科学研究費補助金のまねをしています。何にせよ「何とかごっこ」は、なるべく本物そっくりのほうが楽しいので、研究者ごっこも本物そっくりのようにするために科研費のまねをしています。S、A、B、Cという

種目を作りまして、申請上限額をそれぞれ、100万、30万、15万、5万として、採択基準として、一応、論文発表、学会発表が2件ぐらいないとだめとか、採択するときに減額することもありますけれども、予算の都合もありますので、かなり厳しい採択基準を言って、種目S、Aに申請が多く来ないようにやっております。

実際やってみると、立派な研究をする学生がおりました。去年の第1回のサイエンス・インカレには、AREに参加していた学生も含めて、11人ぐらいがチャレンジしたのですが、結局4人が7つ賞をとりまして、卒業研究に関係しない分野というところで、4件のファイナリストのうち2人がファイナリストになりました。2人とも2年生でして、自分で何か高校時代から研究していた学生です。その研究を発展させた研究や、あるいは高校時代とはまた違う研究をやって発表したというのがございます。発表もうまいし、中身もかなりのことをやっておりました。

それが昨年のごとでございます。なかなか大活躍してくれたと思って、私どもも喜んでいるんですけども、2人もそういう研究での問題解決力をアピールして自己推薦で入ってきました。つまり、アドミッションセンター入試といっていますけれども、いわゆるAO入試、それで入ってきた学生でございます。

それで、ことはどうなったか。第2回のサイエンス・インカレがありまして、2人がファイナリストに入ったのですが、卒業研究に関係する分野で4人のファイナリストのうちの2人に入りました。2人とも4年生で、一般入試です。この学生達は、大学に入る前から研究していたかどうかはわかりませんが、入試としては一般入試で入ってきて、1人は3年生のときに、こちらのほうは、先ほどの先導的研究者体験プログラムに参加して研究していて、そして4年での卒業研究と合わせて2年間やっていた研究成果をサイエンス・インカレに出したということでございます。もう1人も、ある程度先に研究をやっていたような感じはありますが、卒業研究の内容をサイエンス・インカレに出しました。2人とも入試は一般入試です。

第1回のサイエンス・インカレでも、卒業研究に関する分野でポスター発表での受賞者1人と、それからファイナリスト1人が出ています。この2人は一般入試です。

では、第2回には、3年以下の学生は活躍しなかったのかというと、この3月2日という日は、実はその次の日から私どもの大学の学年末試験が始まりまして、さすがにこの日に行くと成績が危ないということで、学生さんもあまり出ませんでした。ただ、第1回にファイナリスになった学生の1人が3年生になって第2回にも挑戦し

ました。

そんなことで、研究者になりたいという意識はみんなあるんだということで、別にアドミッションセンター試験で入ってきた人だけが研究者志向であるとは言えないのですけれども、そういうところを見ていくということで調べてみました。

先導的研究者体験プログラムは、2009年から4年間これをやってきまして、途中でステップアップして研究費を上げることにもできるようにしたりしていました。3年間続けて参加した学生もいます。2010年に1年生で種目Cで参加した学生が、2011年には種目Aで、2012年には種目Sで参加したという例があります。また、学生表彰という制度がありまして、学生が外で活躍して、例えばオリンピックに出たとか、そういう業績があると、学長がその学生を表彰してくれます。この制度で、サイエンス・インカレなどで活躍した学生が表彰されました。そういう表彰を以前は体育の学生がよく受けていて、ほかの部門ではなかなか受けられなかったのですが、サイエンス・インカレができましたおかげで、理工系の学生もいろいろ表彰してもらえるチャンスができたと喜んでおります。

2009年に3年生は11人がAREに参加しました。その学生は、2010年には4年生になり、されに大学院にいつてしまうので。この年だけしかAREには参加できなかったの

ですが、その後、ドクターコースに進んだ人が6人いまして、そのうち3人が、日本学術振興会（JSPS）の特別研究員（DC1）に面接免除で採用されたというようことが起こっております。これも大変うれしいです。

研究者入門という授業のほうなんです、こちらのほうは、当初は知名度が足りなかったらしくて、宣伝するとだんだん参加者がふえてきました。ただ、単位取得者は多いのですが、実際にAREのプログラムに参加するということまではなかなかいっていません。研究者入門では、研究者はこういうものですよということで、体験談を話したり、それから実際に自分でこんなやってみたいという研究テーマを見つけましょうというようなことをやってみたりしています。しかし、その中で、実際に、じゃこれをやりたいという学生は、余り多くはないということです。

実際にプログラムに参加した人の数では、やはりAC入試で入ってきた学生が多くて、4年間で合計42名です。ただし同じ人が何回も出てくるので、これは延べ人数です。

それから、国際科学オリンピック特別入試という入試を2009年から始めたのですが、その学生も少し入ってくるようになりました。それから、あとは推薦とか、いろいろあるのですが、合計で延べ

115人が参加しております。

AREは、理工農系の学生だけしか参加できないというルールになっておりましたので、1年から3年の理工農系の学生全員が対象になります。それを積算しますと、結構3,000人ぐらいの人が、参加してほしいなと私どもが思っている対象になります。実際に参加したのは、延べで115名です。だから、ほとんどそんなに多くはないです。参加率で見ますと、ACの学生は、42名が参加で、母集団の大体10%ぐらいですから、アドミッションセンター試験、AO入試で入学した学生は、10人に1人ぐらいがこのプログラムに参加しているということになります。

それから、国際オリンピック特別入試の場合もそういう割合になる。あと、G30というのはGlobal30プログラムで外国から来ている学生なんですけれども、これも優秀な学生が来ました。この辺の入試の学生が多いです。それだけが有意に多くて、ほかはわからないだろうと思っていて分析しましたら、なぜか前期の入学者の割合は有意に小さかったという、そういうことになってしまっ、あらっと思ったのですが、とにかく前期の入学者は母数が多くて全体をこれが引っ張りますので、そんなに有意な結果が出るとは思っていなかったのですが、そういうふうになっちゃいました。

まとめます。AC入試、国際科学オリンピック特別入試による入学者は研究者志向が強いんじゃないか。後からわかるんですね。研究者志向が強い人を採りたいから、こういう入試をやったのかというと、そうではなかったのです。AC入試というのは、問題解決能力を見る、そういう試験をやしましょう。推薦入試だと、大人しい。優秀だけれども、大人しいので、もっと元気のある人を採りたいのだということでやったわけです。いわゆる一芸入試っぽいところもあるのですが、ただ実際に各学部、理工学のほうに入るのであれば理工学のことでは何か実験をやってきましたとか、物をつくってきましたという、そういう経歴をアピールして入ってくる学生が多いわけです。それで、大学に入ったら一生懸命勉強して、卒業研究なり大学院でまだ研究してくれればいいなぐらいに思っていて、1年生から3年生の間に何か研究してほしいということは、もともとは余り考えていなかったのですけれども、実際にそういうリクエストがあり、実際にそういう授業をやってみると、そこへどんどん食いついてくる、そういうことが起こっている。それから、一般入試のほうは、余りそういうことが出てこないということがあります。

ですので、私どもの考え方としては、もちろんディプロノポリシーがあって、それに合った学生を採るわけですから、今ま

でのカリキュラムをベースに考えていると、やはり今までの入試でいいということになるかと思うのです。

それに対して、何か新しい入試を入れてみたら、やはりそれに応じてカリキュラムのほうもそれに合わせて変えていく必要がある。あるいは、高校での学習の変化に応じて、そういう例えば課題研究をやっている学生が採りたいと思ったら、それに合わせて、それに合ったカリキュラムも入試も両方そろえていかなければいけない。当たり前なことなんですけれども、それが、やはりしばらく年がたってわかってくる、何でも手おくれになってしょうがないのですけれども、そういう状況であるということでございます。非常に、余り前向きな話ではなくて恐縮なのですけれども、多分これから私立のほうで非常に前向きな話が聞けると思いますので、この辺でお話を終了させていただきます。

ご清聴、どうもありがとうございます。

司 会（沖・山村）

白川先生、どうもありがとうございます。

それでは、続きまして国際教養大学の中津先生によります「『求める学生像』に合致する学生を確保するための選抜」ということで、ご講演を賜りたいと思います。

中津 将樹（国際教養大学入試室長）

おはようございます。

秋田の国際教養大学の中津と申します。
よろしくお願いします。

本日、皆様にお伝えしたいことが4点あります。1つは、まずどのような入試を行っているか。本学は、16種類の入試をやっております。そのうちの主要なところを紹介させていただきます。どうして16種類もやるのか、これもあわせて説明させていただきます。そして、3つ目、どのような問題を作成しているのか。筆記試験あるいは面接において、どのような視点で、どのような問題をつくって、どのような解答を期待しているのか、そのようなことも含めお話しいたします。そして、最後に大学として入試をどのように位置づけて実行しているか、あるいは実行したいと思っているか、これらのことをお話しさせていただきます。

国際教養大学、まだできて10年目です。
なかなか全国的には知られておりませんので、少し紹介させていただきます。秋田県がつくった公立の大学です。名前だけ見ますと、どこにある私立大学かと聞かれることもありますけれども、秋田県がつくった県立の大学です。学部は、国際教養学部1つのみ。国際教養学部の中に、グローバルビジネス課程とグローバルスタディーズ課程があります。入学のときに分かれるのではなくて、2年生の後半に、それぞれの関心、

志望に応じて分かれていくことになっています。

国際教養大学は、他の大学がやっていないことをいろいろやっております。授業は全て英語。1年間の留学義務づけ。ですから4年間英語で勉強しますが、3年間は秋田、そして1年間は海外で勉強します。今、提携大学は、23カ国、150校近くあります。これらにうちの学生は留学しなければいけない、そういう制度です。少人数教育。1クラス当たり平均18人、非常に密度の濃い授業を心がけております。アメリカ型の教養教育、昨今、リベラルアーツという言葉がマスコミにも出るようになりました。そのような意味での、いわゆる専門課程に入る前の一般教養というよりも、むしろ4年間幅広く教養を身につける、つまり、人文科学、社会科学、自然科学、芸術など、いろいろなことを勉強して、そして本当に専門的なことをやりたかったら大学院でやればいいじゃないか。むしろ、18歳から、二十二、三歳の間は、いろいろな世の中の学問を勉強して、社会を知ってもらおう。そこが重要ではないかと考えております。24時間開館の図書館。学生に、好きなときに来て、好きなだけ勉強してほしい。そういう意味で、大学としては、環境を整えることが大切だと思い、24時間あけております。安価な費用。公立ですので、恐らく私立さんよりはかなり安い。留学の費用も学費に

含まれています。そういうことを考えますと、トータルで見るとかなり安く学生は勉強できると思います。

キャンパスは異文化空間。この言葉は、よくうちの大学のパンフレットなどで使っております。教員の半数が外国人、学生の2割は留学生ということを考えますと、かなり国際的なキャンパスではないかなと思っています。

結果としては、大学の特徴ではありませんが、就職率はずっと100%を保っております。

私たちの理念としては、やはり外国語能力と教養をまず身につけてほしい。そして、それをもって、専門知識を身につけて、そして将来は、国際社会、そして地域社会で活躍できる人材を養成したいと思っています。

求める学生像としては、私たちは高校生にはこう説明しています。まず、入ってから勉強で厳しくノルマなどを課していますので、まず勉強が好きである。そして、社会に対する問題意識を持っているような学生、そしてまた将来、外国語、主に英語になるといえますけれども、そういうものを身につけて、また教養も身につけたい、そして外国語だけではなくて、世界の多様な文化、言語、歴史、社会、あるいは国際関係も含めて勉強したい、そのような学生、大歓迎、と伝えております。

入試制度に関しましては、先ほど言いましたように16種類あります。そのうちの幾つか話していきます。まず、グローバルセミナー入試。これは、県内の高校生限定の入試です。これは5月と8月に2泊3日の合宿型のセミナーをやる。本学は秋田県民の税金でつくられていますので、秋田県内の高校生の教養力の向上、ひいては、その後、国際教養大学を受けて、そして入ってほしい、そういう願いを込めてつくっております。合宿型の勉強セミナーで、本学の教員が、大学で教えるような内容をあえて日本語で4コマ、そして英語の授業や、TOEFLなども体験していただく。あいている時間には、在校生や留学生との懇談、そして滞在する場所も通常の学内の本学の学生が住む寮、いわゆる疑似、模擬国際教養大学生活を体験してもらう。ともすれば、国際教養大学は、英語を勉強する大学だ、英語ができないと入れないと思っている高校生がかなり多いということを我々は感じました。そうではないんだ、英語というのはあくまでも手段であって、実際に勉強する分野は社会科学だ、そういうことをあえて知ってもらうために、高校生向けには日本語で授業をやっております。国際関係、環境問題あるいは昨今の東アジア問題。このような分野をあえて高校生に日本語でやる。いわゆる高校では勉強しないような分野を勉強する、そうすることによって教養

力をつけてもらいたい、そのような入試です。

高校推薦については、多くの大学も行っているものと大きい違いはないと思います。出願要件としましては、評定値4.0以上かつ英検2級程度、あるいはこのような資格がなくても、高校時代に、勉強、文化活動、スポーツなど、一定の実績、例えば国体に出場したとか、そのようなレベルの学生さんに出願要件があります。11月に、国際教養大学のキャンパスで、英語の筆記試験と面接を行って、合格を決めます。

ギャップイヤー入試昨今、東京大学による秋入学、ギャップタームの導入などがマスコミなどで騒がれていますが、本学のギャップイヤー制度も基本的には、その趣旨は同じです。ことしで6年目になります。通常、日本の高校生は、高校を卒業するとすぐに大学に入ります。ギャップイヤーに関しては9月入学です。3月に卒業する、高校生が9月にするのです。そのあいている期間に、自分のやりたい活動をやってもらいます。例えばボランティアでもいいです。インターンでもいいです。あるいは、世界バックパッカー旅行でもいいです。地域のNPO、NGOでの研修あるいはファームステイ、そういうものでもいいです。そういうものをして、そして9月に入ってきていただく、そういう制度です。実は、入試は前年11月に行っております。高校推

薦などと同じような時期にやります。11月に、英語の筆記試験、そして面接、そしてその面接の中にはギャップイヤー活動計画も発表してもらいます。もし自分が合格したら、どういうこと、何をやりたいかを話してもらいます。これらに基づいて合格者を決定しております。その後は、本学の担当教員とメールなどで、その活動内容、計画についていろいろ話していただきます。翌年3月までは、合格者は高校生ですから、活動そのものはできません。ただ、2月の入学前教育に一環として、大学に来てどういうことをやる予定なのかということは今度は英語で発表してもらうことになっています。そして、実際の活動は4月から8月まで。その間の身分は、「入学予定者」の扱いになっております。海外で活動する学生も多く、この試験で入学した学生の半数程度以上は海外でギャップイヤー活動をやっております。その際の保険の加入も義務づけております。事前、直前までの指導も行っております。入学後は、ギャップイヤー活動計画に関し、英語で発表し、英語でのレポートをもって、インターンシップとしての単位、3単位を付与します。

なぜギャップイヤーをやるのか。イギリスなどでは一般的なようですが。大学生の1割から1割5分、2割程度はギャップイヤーをやっているようです。私たちは、ギャップイヤー入試では、能動的、主体的

に活動するような学生が欲しい。いわゆる通常の学生のようにすぐ大学へ入るのではなくて、寄り道して、いろいろなやりたかったことをやってみる。そして、そこで得た経験を大学に入ってから勉強に生かしてほしい。恐らく通常の高校生や、先生から見れば、「あいつ変わっているよ。」ただ、そういうような変わっているような学生、大歓迎です。いわゆる与えられたことをやるだけではなくて、自分でこうやりたいんだ、そのためにはこういうことをしていく、そのような積極的な意欲を持っている、変わっている学生を大歓迎。そういう趣旨を持ってやっております。

外国人留学生入試。これに関しても、春入学、秋入学、両方やっております。日本留学試験は任意です。最低限必要なのは、TOEFLなどの英語のスコア、推薦状、そして高校の成績証明書です。渡日前の書類選考だけで決めております。よく留学生から話を聞きますのは、日本の大学に入学する場合、1年間研究生をやらないといけない、あるいは日本語学校へ行かないといけないとよく聞きますが、そもそも私たちは、授業は全て英語ですので、日本語学校へ行く必要はありません。むしろ、その分早く入学してもらって、しっかりやりたいことを勉強してほしい、そういう趣旨でやっております。ただし、推薦状、成績証明書などはかなり吟味してチェックしており

ます。

AO、高校留学生入試は、英検準1級程度以上の英語力を持っているか、あるいは高校時代、例えばAFS、YFU、ロータリークラブ、いろいろな留学プログラムに参加した学生を求めています。私たちは、高校生に対しては、受験英語だけではなくて、より実践的なプラクティカルなものをやってほしい、そういうことで、英検、TOEFL、TOEICなどをぜひ受けてくださいといっていますし、あるいはみずからの意思で、高校時代、1年間、海外で勉強してきた経験を持っている学生さんは、大歓迎です。そういう経験を大学に入ってから、自分の関心、勉強に生かしてほしいという意味で、こういう入試をやっております。

ほかに、社会人、帰国生、転編入など、いろいろな入試をやっております。

それぞれの入試に関しましては、先ほど申し上げたように、日本語、英語での面接、英語小論文を課しております。このような特別選抜に関しては、私たちは、学力は当然のことながら、むしろ人間的な魅力を持っている人材が欲しいのです。いろいろなタイプの学生、先ほど言いました変わっているような学生、海外にいた一生懸命部活をやっていた、そのような学生も含めて、いろいろなタイプの学生が欲しいという意味で、いろいろなタイプの入試をやっております。

一般選抜に関しましては、A日程、B日程、C日程と3タイプあります。それぞれ3教科型、5教科型、1教科型です。A日程の3教科型と申しますのは、センターの3教科です。国語、英語、そしてそれ以外が一番得点の高い科目。理科だったり数学だったり社会だったりするかもしれません。それと、国際教養大学が課す個別試験、英語と国語の合計。B日程は5科目型、これはセンターの5科目です。国、数、社、理、英と国際教養大学が課す英語と国語の筆記試験。C日程は、1科目型と私たちは内部で言っております。これは、センターの英語と国際教養大学がやる英語の筆記試験、つまり英語だけで入れる入試です。

この一般選抜に関しましては、面接などは課しておりません。むしろ、知力のあふ、いわゆる高校時代しっかり勉強しているような学生が欲しい、そういう意味でこのような入試をやっております。

入試制度に関しましては、このような試験の種類以外にも幾つの特徴を有しております。1つ目は、ほかの国公立との併願が可能です。実は、前期日程、後期日程とは私たちは呼んでいません。先ほど私が申し上げたように、A日程、B日程、C日程、ほかの国公立さんとは試験日をずらしております。そのため高校生は、少なくとも国際教養大学を受けていただける高校生は、本学とほかの国公立を受けることがで

きるはずですが。私たちはあえて試験日をずらすことによって、受験生にチャンスを与えたい。もし同じ試験日にするようだったら、私たちは、歩どまりや、いろいろな計算がしやすくなるかもしれませんが、高校生の受験のチャンス、機会を奪ってしまうのではないかと。2つ以上受けられるようにして、その後、国際教養大学をとっていただければ入っていただきたい。そう思って、あえて試験日をずらしています。

2つ目。全国7カ所で試験をやっております。公立だから秋田県内のみという話もあるかもしれませんが、やはり全国から優秀な生徒さんが欲しいという理由により、同じ日に、同じ時間で試験をやっております。

3つ目。特別科目等履修生制度です。これは、いわゆる暫定入学、仮入学制度です。試験では、皆さんがご存じのように、どうしてもどこかでボーダーラインを引かないといけません。1点差でぎりぎり合格、1点差でぎりぎり不合格。ボーダーライン上で不合格になった生徒も、よく書類を調べてみると、国際教養大学の学生として入りたい、例えば先ほど言ったように、高校時代、いろいろな活動していた、あるいは海外にいた、そういう学生に対して、不合格だけれども、仮合格させましょう、1年間、正規で入った学生と同じカリキュラムで、同じ寮に住んで、同じ勉強してもらう。

そして、1年後に、一定の基準、単位数、GPAを超えたら、転編入の生徒として2年次に入れましょう、そして、1年目の特別科目等履修生として取った単位を2年目に認めましょう、ですからトータルとして4年間での卒業が可能になる制度です。このような学生に対しては、入学金も2年目にとっております。私たちは、ボーダーラインの一、二点差というのは、能力的にはほとんど関係がないと思っています。たまたまこの問題が出てきた。たまたまできなかった。ある意味、運や、運命もあるかと思えます。それでも、ぎりぎりだめだった学生には、チャンスを与えたい。実際、この制度で入った学生を見ますと、危機感を持って勉強しています。かなりいい成績を持って卒業しております。

4つ目。英語資格等保持者への特例措置制度。これは、英検準1級以上、それと同等のTOEFL、TOEICあるいは国連英検、ケンブリッジ英検、IELTS、そういうものを持っている学生さんに対しては、一般選抜においてセンターの英語の試験を満点換算に扱う制度です。もちろん、センター試験は受けてもらいますけれども、満点の扱いをする。やはりこれは、先ほど申し上げましたように、高校生の皆さんには、受験英語だけではなくて、より実践的なものも勉強してほしい、そういう意味も込めて、このような特別な措置をつくりま

した。実際、この制度を使って、受験を志願してくる学生はふえております。一昨年ですと、大体、全受験生の15、6%ぐらい、去年ですと2割ぐらいになっております。当然、合格のときには、そういう学生は満点扱いになりますので有利です。そういう学生が、実は、センターの英語では何点とったのかと調べてみますと、基本的には少ない学生で10点、多い学生ですと、4、50点得している結果になっております。

入試の選抜基準としましては、先ほど申し上げました特別選抜、これは面接を課しておりますので、人間的な魅力を中心に採っていきたい。筆記試験に関しては、潜在的な学力、社会への関心、論理的思考力を見たい。一番先に申し上げましたように国際教養大学は、将来、国際社会、地域社会で活躍できる人材を養成したい。そのためには、語学ができるだけではなくて、さまざまな社会問題に関心を持って、それに対して自分の意見を論理的に考え、あるいは批判的視点を持って考え、そしてそれを社会に発信できるような、そのような素養、心意気を持っている学生が欲しい。そういうことを見る・試すような面接、あるいは見る・試すような筆記試験をつくるようにしております。

入試問題に関しましても、今、申し上げたようなポイントでつくっております。面接に関しては、高校時代に何をやってい

たかということも問いますが、実際に志願理由書を見せても、みんなどの学生さんもいいことを書いています。入った学生に聞いたら、高校の先生方に添削してもらって出しているというものも多いようです。

それならば、社会問題に対する関心・知識を問うような質問もしております。

筆記試験に関しましては、今の若者は本を読まないということですが、彼らには現代の名著というものも読んで欲しいと思っており、例えば最近では、「学問のすゝめ」あるいは「タテ社会の人間関係」などを使いました。英語の問題に関しては、ニューズウィーク、タイムなどの英字紙からとっております。そうすることによって、例えば高校生の皆さんは、国際教養大学にもし志願していただけるのであれば、たとえ受験勉強でもいいので、そのような現代の名著と言われるもの、あるいは英字紙、英字雑誌に目を向けるようにしてほしい、そういう経験は大学に入ってからでも必要です。役に立つ、そういうことを考えてやっております。

設問に対しましても、例えばここに書きました設問、日本とインドの社会制度、これは、実は中根千枝の「タテ社会の人間関係」のところから持ってきたのですが、そのいろいろな事例を参考に、「あなたはどのように思いますか」、「どちらの意見に賛成ですか」などを問うております。

なぜ多くの入試をやっているか。本学の定員は175名です。それに対し、学部入試だけで16種類やっております。結構大変なんです。ただ、それぞれの入試によって出願要件が異なる、そうすることによっていろいろなタイプの学生が集まるだろう、例えば定員175人に対して1つの入試で全員を採ることも十分可能なのですが、それだと同じようなタイプの学生しか集まらないのではないかと。いろいろな入試、出願要件が異なるいろいろな入試をやることによって、いろいろなタイプの学生が集まる。そして、学生が大学に入ってから、それぞれの高校までの経験を共有することによって、お互い刺激し合って、切磋琢磨して伸びていく、そうすることによって大学も伸びていく、そういうことを期待しております。

そういうような大学時代のいろいろな人との経験、コミュニケーション能力の育成、外国人も含めるならば、語学も含めて、あるいはそれぞれの文化的背景の異なる、思考能力も異なることによりいろいろな摩擦を経験することによって、交渉能力、説得する力を伸ばしていきたい。そのような環境をつくっていきたいと思っています。

16種類の入試で入った学生の入学後の実際のパフォーマンスはどうか。二、三年前、卒業生のそれぞれ入試タイプごとのGPA、いわゆる成績を比較してみたところ

ころ、どの入試に関しても大きい違いはないことがわかりました。この調査をやる前は、私たちは、実は、C日程全て英語だけの入試で入る学生は、基礎教育のところではつまづくのではないかと、あるいはグローバルセミナーで入った学生に対しては、英語力そのものは実入試ではさほどは問うていないので、卒業は遅れているのではないかといろいろ危惧していたのですけれども、結果的には、大きい差はなかったということです。

このようなさまざまな入試をやる、メリットとしては、先ほども言いましたように、いろんなタイプの学生、多種多様な学生を確保することができることです。そうすることによって、私たちが、一番先にお伝えした求める学生像、将来、国際社会、地域社会で活躍するような資質、素質をもつ、そのような学生を確保できているのではないかと思います。ギャップイヤー入試で入った学生の経験を聞いて、一般選抜で入った学生が夏に、海外でボランティアをやる。ギャップイヤーで入った学生が、一般選抜で入った学生にいろいろな刺激を受けて一生懸命勉強する、そのような波及効果がよく聞かれます。デメリットとしては、いろんな入試をやるので、時間、労力、エネルギーがかなりかかることです。

多様な学力の学生が集まることによって、当初1年目は、教員にとって授業はど

のレベルにあわせてらいいのか、またスタッフにとっては、ユニークな学生もいろいろ入ってきているがゆえに——最初の1年間は、実は入寮義務づけなんですけれど、寮生活で騒がしかったりする場合は対処等のトラブルも幾つかありました。

最後に、国際教養大学は入試をどのように考えているか。やはり育てる入試にしたい。グローバルセミナー入試では、県内の高校生に対する教養力のアップを目指しています。ただし、グローバルセミナーに出たから国際教養大学を受けなければいけないということは一切ありません。ほかの大学に行ってもらっても構わない。むしろセミナーに参加することにより、県内の高校生には教養力を伸ばしてほしい。先ほど言いました試験問題についても、あえて日本の現代の古典と言われているようなもの、そして英字紙などを使うことによって、そのような媒体にも目を向ける、そのような慣れを身につけてほしい。

なお、先ほど言いましたギャップイヤーに関しては、能動的・主体的に活動できる学生、そういう学生が欲しいですし、今の若者にはそういう人材になってほしいと思っています。

そしてまた、本学のカリキュラムに關しまして言いますと、やはり教養教育、リベラルアーツ、問題解決型、探求型、単に一方通行で話すのではなくて、ディスカッ

ションを通し、自分の意識を高めていく、そういうところが大切ではないか、そして自分の意見を入試問題でも書かせますし、入ってからもそういうような授業をやっています。そのようなことに慣れることを身につけてほしい。

最後に、私たち大学にとっては、入試というのは、ある意味、社会へのメッセージです。それを通じて、社会、高校生、保護者、高校の先生方に何を伝えて、どういうことをやって、どういう学生が欲しいのかということを私たちは伝えていっております。国際教養大学の場合は、県がつくった大学ですので、秋田県教育庁ともいろいろ関連があるのですが、高校の先生方との協議することによって、高校と大学、そして大学と社会との、関連を深めていきたいと思っております。

以上です。ありがとうございました。

司 会（沖・山村）

中津先生、どうもありがとうございました。

それでは、続きまして立命館大学の本郷先生によりますご講演をお願いしたいと思います。

「私立大学におけるＡＯ入試の現状と課題―立命館大学の事例を通して―」です。

本郷 真紹

（学校法人立命館総長特別補佐

立命館大学文学部 教授）

立命館の本郷と申します。よろしくお願いいたします。

本日、私立大学のＡＯ入試の現状と課題ということで報告させていただきますけれども、ご承知のとおり私立大学におけるＡＯ入試というのは非常に多様な意味を持っておりまして、ありていに申し上げまして、入学者定員を充当するため、あるいは一般入試の偏差値を維持するために置かれたＡＯ入試も多々ございます。ただ、そういうものは、今回お話しする趣旨とは違いますので、あくまでも個人の特性を見計らうという、そういう目的で設けられたＡＯ入試の内容についてお話をさせていただきたいと思います。

最近、とみに、ＡＯ入試というのは評判がよくない、とりわけ公立の進学校などでは非常にやゆされておりまして、ＡＯというのは、アドミッションズ・オフィスの略なのですが、青田買いの略であるとか、関西などでは、あほうでもＯＫ入試とか、そういうふうなことまで言われます。なぜそういうふうに言われるに至るのかというのは、実は本質的な問題もあると思いますので、そのところを課題として出させていただきますと思うのですが、本来の趣旨は、入学者の質向上を目指す、とりわけその中から意欲にすぐれた人間、それから個性の非常に強い、将来的に大学に入ってから全体のリーダーになる、またキャリア

の実績においても模範となるような、そういう学生を採りたいという趣旨で始められたのがAO入試でありました。

そのための担当機関として、アドミッションズ・オフィスというのを設置したわけであります。アメリカなどの例ですと、アドミッションズ・オフィスというのは、入学選抜全体を仕切る機関、ですからどちらかという各大学におかれております。入学センターに近いというのがアドミッションズ・オフィスだと思うんですけど、日本の場合は、その中でも、特に特別入試あるいはAO入試だけに特化した執行機関として、アドミッションズ・オフィスというのが機能してかと思えます。

立命館大学においては、アドミッションズ・オフィス入試、AO入試として行われている特別入試のほかに、自己推薦、それから文芸・スポーツ入試、指定校推薦、このようないわゆる特別入試全体を取り扱う機関として、アドミッションズ・オフィスというのが設けられました。その変遷ですけれども、最初に置かれたのが1994年でございます。政策科学部という設立してまだ間がない学部で、自己推薦特別入試が開始されました。95年には、経済、文学部を除く他の学部でも、AO入試、自己推薦特別入試を実施するようになって、翌年からは全学部でそろって行われるようになりました。98年にその執行機関として本部にア

ドミッションズ・オフィスが設置され、翌年からAO入試が、自己推薦ではなくて、AO入試という独自の位置づけで行われるようになったのですが、いち早く法学部は、単なる自己推薦ではなくて、法学部のアドミッション・ポリシーに見合う学生を採るための入試と位置づけて、セミナー方式という、幾度かセミナーを開催し、そのセミナーのレポートあるいはそのセミナーの場における質疑等を勘案して、合格者を決定するという、かなり手の込んだ入試をやり出しました。

その後、2001年から他の学部でも学部独自方式を開始しまして、基本的には自己推薦という、高校生が自分のこういうところを買ってくれと訴える入試と、学部のほうが、それぞれ学部の特性、アドミッション・ポリシーを踏まえて、設定したオリジナルな入試との2本立てでやってきています。今日では、13学部のうち薬学部を除く12学部でAO入試をやっています。しかしながら、後で申し上げますけれども、非常にいろいろな課題が出てまいりまして、今年度の入試から経済学部と文学部の一部の専攻・領域でAO入試を廃止するということが決定しております。AO入試実施の是非につきましてはこれは全部学部の裁量に委ねております。

次に、本学のAO入試の変遷ですが、2003年ぐらいが一番ピークでした。子ども

の数が多かったことでもあります。立命館サマーカレッジという、夏休みに本学のキャンパスに高校生を集めて、いろんな活動—大学での研究、学びというものに触れさせるプログラムとか、グループワークというプレゼンテーションとか、そういうことをやらせて、その中でみずからの課題を設定させ、ＡＯ入試での評価に反映させるという方式を設けていたこともありました。2000年代の前半には非常に多くの受験生がＡＯ入試を受けてきたのですが、だんだん減ってまいりまして、合格者も手続者も右肩下がりになっています。1つは少子化の影響もあるのですが、一番大事なことは、公立の進学校でＡＯ入試は絶対に勧めないという動きが非常に強くなってきたということが、大きな影響を与えているのではないかと思います。

次に、2013年度の実施状況ですけれども、法学部と文学部と経営学部だけは、かつては社会人入試という枠で行っていた入学者選抜を、ＡＯ入試の中にあわせまして、社会人方式という形で行っております。ただし、ほとんどこれは実質的に機能していない、受けてもほとんど通らないか、法学部の場合ですと出願者もないということで、ゆくゆくは、この方式も見直しを図らないといけないのではないかと考えております。

各学部が具体的にどういう入試をやっているのかという点については、お手元に

入試ガイドを入れさせていただきましたので、これをご参照いただきたいと思います。

それで、12学部で行われていますＡＯ入試の現在の課題としましては、入学した学生のＧＰＡの問題がございます。一回生から四回生までのグレードポイントアベレージですけれども、これは、全学平均に対して2.6ということではほとんど差はないといいながらも、やはり少し低いということがあります。

2012年度の進路就職決定状況、卒業生の中に占める就職決定あるいは大学院進学割合も、ＡＯ入試で入学した学生は80%ということで、全体平均が84.9%ですから、5%ほどキャリア実績は上がっていないということになります。

入り口の方式別に分析した結果では、ＡＯ入試で入ってくる学生は、モチベーションは高いけれども、そのことが、実は大学での学びや成長にうまくつながっていないことが挙げられるのではないかと思います。もう一つは、やはり正直に申しまして、基礎学力面で問題があるということです。

今後、ＡＯ入試というのは、詳細な書類審査、それから時間をかけた丁寧な面接等で、個々の特性を見計らい、基礎学力については、大学入試センターですとか、あるいは一般に行われている資格検定試験等の成績を出願要件に入れることで、大学に入ってから学びに支障がない基礎学力を

担保した上で、個性を見計らうという方向が打ち出されるように思います。

残念ながら、筆記試験で学力を見計らうというのは、現行の制度上では2月1日から4月15日までにしかできません。年内に行う入試では、学力課題は課してはいけないことになっています。実質的には、公募制推薦等で、学力課題を課しておられる大学もありますけれども、これは厳密に申しますといけない、そうなってくると、基礎学力を査定した上で、個人の特性を見計らうという入試は、私立大学でこれを実施するのは極めて難しいということになるかと思っています。と申しますのは、ほぼ一般入試と期日がかぶってしまうことになるからです。どれだけそういった入試に受験生が見込まれるかというのは、非常に難しいのが実態じゃないかと思っています。

最近、新学習指導要領と関連して、確かな学力と豊かな個性ということがよく言われます。高等学校において新カリキュラムへの改訂がなされ、歯どめ指標がなくなったということで、まず理数の各教科から科目から非常に多くの内容が盛り込まれたものになってまいりました。2015年からは、いや応なく国公立大学を問わず、一般入試においてその新課程に準拠した出題がなされることから、一般的な感として、詰め込み主義と言われた時代への逆行を指摘する向きもあります。しかし、その一方で豊

かな個性を見計らわなければいけないので、一見すると二律背反的なものを課することになり、特に私立大学にとっては極めて重要な課題になろうかと思っています。本来の趣旨からすると、両方を兼ね備えた学生が受験して入ってくれるのが望ましいのですけれども、時期的な課題に鑑みて、それを実現するのは、なかなか難しいと言わざるを得ないのであります。

大学改革実行プランでも同じようなことが言われておりまして、センター試験の活用を、一般化するのが難しいのであれば、いわゆるSATとかATCのような、あるいはインターナショナルバカロレアのような、外国で行われている資格認定のようなものを取り込んで、その上に個人の特性を見計らう、あるいはキャリアを検証するというような入試が、将来的には望ましいのではないかとされておりまして、また一部、予備校等の組織では、クリティカルシンキングを養うための新しい形での力量検定の開発も進められているようでありますけれども、まだまだそれが一般化されるには至っていないのが実態じゃないかと思っています。

本学の場合、文社系学部の合格発表は10月中旬で、理工系学部は12月、したがって実際に入試として行うのは、9月段階ということになるのですが、これがなかなか高等学校の教育現場には受け入れても

られません。まさに、その時期からいって、青田買い以外の何物でもないという受け止め方をされる。実際に、高等学校の3年生の実態を見てみると、一定の緊張感のもとで基礎的な学力を養成点で、高等学校の3年生の後半期が非常に大きな意味を持っています。だから、9月、10月段階で入学保証のお墨つきを与えてしまうと、結局は、それから半年間ぐらい遊ばせてしまうことになり、その間に緊張感も完全に崩れ、4月に入学したときまで学力とモチベーションが維持できないということが指摘されています。話題になっております秋季入学にしましても、私の個人的な考えですが、よっぽどきっちりとしたサボらせない仕組みをつくらないと、自由に好きなことをやらせていたのでは必ず学力は落ちます。しんどい入試に対応すればするほど、合格後ほっとした気持ちが3ヶ月でも6ヶ月でも続きますから、あえて、新しいことにチャレンジするとか、学ぶ受験を維持するというのはなかなか難しいです。それを何とかしようと思っていような形で取り組んできた私どもの経験からしても、実はそうなんです。入学前課題ということで、AO入試に限らず、指定校推薦も、文芸・スポーツの特色入試もそうなのですけれども、秋に入学保証のお墨つきを与えた受験生に対して、まずプレエントランス・デーというのを設け、12月に全員に招集をかけまし

て、大学で何をするのかを明らかにし、大学入学までにやっておいてほしい事柄を学部ごとに指定します。それは、在宅の学習でできることが条件です。プレエントランス・デーの前後に入学計画表というものを受け渡して、あなたが入る学部では基本的にこういう力が必要になりますから、足りないと思ったら絶対これをやっておきなさいということを伝えます。個人負担になりますが、さまざまなプログラムを受けることを奨励しています。

本来ならば、早期に入学のお墨つきを与えたのであれば、大学は責任を持って指導すべきだという声もありますが、これをやってしまうと、高等学校の現場に非常に大きな障害を与えてしまう。つまり、3月までは高校生なので、当然のことながら高校に通って勉強するのが原則で、それを強制的に大学に集めるということは難しいのが実態ではないかと思います。

したがって、この辺の理想と現実のギャップをどういうふうな形で埋めていくのが、これから大きな課題になってくると思います。ただ、AO入試のありよう自体が無駄なものかということ、そうではなくて、AO入試対策として論文などの練習を積んでいる学生は、かなり新聞を読み込んで、そのために辞書を駆使して、わからない言葉を調べて勉強しています。問題なのは、やはり9月に実施するということで、

できれば、AO入試にしても、2月か3月、一般入試と並行して実施すれば、ずっとそのときまで生徒は勉強するから、そのまま入学してもモチベーションもインテンシブも持続する高校から言われました。

この時期は、先ほど申しましたように、私立にとっては大きな課題ですので、今後どういうものがベターなのかを考えた上で、改善を加えていかなければならないと考えているような次第であります。

以上でございます。ご清聴ありがとうございます。ありがとうございました。

司 会（沖・山村）

本郷先生、どうもありがとうございます。

3人の先生方のご協力により、ほぼ1時間程度でご報告いただくことができました。

では、11時40分から後半の部分を再開したいと思います。よろしくお願いいたします。

40分に再開いたします。

（休 憩）

司 会（沖・山村）

お待たせいたしました。これから1時間ちょっと、開始が若干おくれましたので、12時40分過ぎぐらいまでを一つの目安としておりますけれども、先ほど3名のご報告をいただいたものに対して、今度は会場から大変多数のご質問をいただいております。

今、とりあえずお預かりしたものについて目を通しまして、特に今回の企画の趣旨に即して判断させていただきながら、共通した、複数同じような質問が出ているものを優先しながら、まずご質問をそれぞれの先生方に投げかけてみたいというふうに思います。

最初に、少し大きな話といいますか、追加のご説明をいただくような格好になるかと思うのですが、3名の先生方それぞれに、簡単でも結構ですのでご回答いただきたいことが2つございます。

まず、1点目、申し上げます。実は、今回の企画そのもの、この多元化、多様化の背景、実際のところの話をさせていただいているのですけれども、実は、ご報告の中で、その制度や、あるいはそこで行われている仕組み、評価、試験のその評価そのものの妥当性あるいは入試制度全体ないし、部分的なものも含めたものの評価といったことがどのように行われているのかにつきまして質問がございます。今の仕組みがよければそのままいくということになるでしょうし、逆に課題が出ているということであれば、何らかの手直し、実際に学部で廃止するというようなこともお話がありましたけれども、まさにその根拠ですとか、どのようなことがあって、どういう評価がなされてそのようなプロセスを経たのかということにつきまして、それぞれのご経

験あるいはいろいろなお考えがあると思いますけれども、お話しできる範囲でいただければと思います。

まず、白川先生からお願いします。

白 川

その評価の妥当性ということでございますが、私どもの大学の中では、毎年、追跡調査結果といいますか、各入試で入ってきた学生の主に学業成績でございますが、そちらのほうの統計をつくりまして、そしてそれを学内の各組織に配って、それを見ていただいて、それで判断していただいているという状態です。

中 津

受験者層に関し国際教養大学では、出願用紙にアンケートをとってしまして、ほかはどこを受ける予定ですかとか、国際教養大学の入試制度をいつ知って、いつ受験しようと思ったのか、あるいは大学そのものをいつ知ったのか、そういうことを調査しており、それに基づいた資料を学内の会議用に作成しております。面接点あるいは筆記試験の点数についても、それぞれの委員会で、今年はどうだった、去年よりどうだったというのをやっています。入った後に関しては、先ほども申し上げたように、卒業時のGPA、入試タイプごとに、毎年ではないですけれども、数年に一回、調査をしております。

本 郷

先ほど報告の中でも、現状と課題につきましては示させていただきましたけれども、つけ加えますと、手の込んだAO入試、特別入試というのは、やろうと思えば思うほど、教員の負担は大変なことになります。教員個々に聞いてみますと、AO入試の委員をさせられるのは、一般入試の出題委員をさせられるよりもはるかにしんどい。時間的にも拘束させられるし、自分自身の研究や教育と同時に行わなければならないというのは大きな負担だとよく言われます。それが、廃止あるいは縮小という方向に向かわせている一つの要因です。もう一つは、生徒側の課題ですね。既に申し上げましたように、モチベーションと学力の両方で、9月、10月段階で入学を保証することにはかなり大きな課題があります。一つの方策としては、4月に入学した後、一般入試で合格した生徒と一律に扱うのではなく、何か特別な枠組みをつくる、例えば理工系でスーパーサイエンスなどを経験した学生には、彼らの研究意欲を持続させるために実験室の利用を認めるということをつくるということが重要になってくるとは思います。

ただし、全てそういうふうにすればいいかというと、それはそうとも言えません。特別に優秀な学生やモチベーションの高い学生の囲み込みをしてしまうと、逆に多くの人数の学生相互の触れ合いの中で学ぶという姿勢がなくなってしまう。研究者養成

にはそれでいいのかもわかりませんが、一般社会人の養成という点については、囲い込み方式、特別扱いの課程をつくってしまうと、本来目指す方向とは違ったものになってしまう危険性がありますので、十分に注意しなければなりません。その辺のところが非常に大きな課題ではないかと思っています。

司 会（沖・山村）

ありがとうございます。

今のお話の中にも、実は、若干出てきているのですが、2番目の質問は、この多様化、多元化に関して、やはり特に立命館のご報告の中で顕著だったかと思うのですが、コストの問題、人的および金銭的な問題は両方とも非常に大きな負担なのではないかというふうに思われます。その点についての質問もいただいておりますので、その点について、それぞれの先生方のお考え並びに大学全体として感じられて、今、先生方のご負担の話が出ていますけれども、ここにお集まりの中の先生方だけではなくて、大学全体としてどうなのかというのもぜひ伺えればと思います。よろしくお願いします。それぞれの先生からご回答いただければと思います。

白 川

私も、アドミッションセンターの担当として、入試のコストを下げるというのもアドミッションセンターの仕事だと思ってお

ります。

それで、少し古い話になりますが、試験監督であるとか面接であるとか、そういう負担がどれくらいあるかということもアンケート調査しまして、これを何とか減らしていけないか、あるいは入試は多様化しているのだけれども、何とかコストを低く、これを実行する方法はないだろうかということは、常に考えております。

実際に、いい学生が採れていても、コストがかかるから、やめようというふうな話が出ていて、一方で大学のほうでは、こういう入試をやりたいというのとぶつかることはあります。例えば、秋入学というのをやめようという話になりまして、大学としては秋入学をやるということになっているのですが、現在、秋入学をやっております工学システム学類のほうでは、A/C入試の第2期、それから帰国生徒特別選抜の第2期という、要するに今まで8月入学で行っていた入試が10月入学になるので、やめようという話は出ています。これは、コストがかかるということが1つの理由ですが、そのコストというのは、今までは、8月に入ってから9月に授業が始まるまでの間に、一応うちの学生になっていますから、補講をやりませう。そして9月からは4月入学の学生と同じように授業をしていたのですね、それでほとんどの学生が3年8ヶ月で早期卒業をしていました。それは、

コストがかかるのだけれども、それでもいい学生が来るからやろうとやっていたわけです。それが、10月入学になって、実際に学生がそのときに補講ができるのか、9月からの学生だけの入学前授業になるのか、やったとしても、それをまた維持していくのは大変だ。つまり入試そのもののコストだけではなくて、入った学生の補講とか、そういうコストが高いからやめたい、そういう話があります。

そういういろんな話と大学全体としてどうするのかという話がうまくマッチしていかないという問題はあるのですが、個々の教育組織で判断していく入試である場合には、そういうことをやっていかなければならないということがあります。

それから、コストとしては、いろんな入試をうまくまとめてあげるといことで、実施時期をまとめるとか、会議を少なくするとか、そういうことは努力しております。

それから、特に我々のAC入試に関しては、書類審査と面接をやるのですけれども、これに関しては、それなりのコストはかかるのですが、実際に面接をなさる先生とか、書類審査をなさる先生自身は、これは大変だけれども、そういう書類を読んだり、面接したりすること自体がおもしろいので、これはやりたいという先生が意外と多いのですね。だから、単にさっきアンケートをとってと言いましたけれども、何人

が何時間働いたかというコストだけではなくて、担当される先生方の心理的なコストということも考えなければいけないかな、そういうふうに考えております。

中 津

入試業務に対する費用のコストということを考えますと、うちの大学の場合、やはり一般選抜を地方会場でやる分、秋田は費用が大してかからないのですけれども受験者数の割には、その費用が一番大きいかなと思います。

そういう現場での運営業務そのものには、うちの場合、教員は携わっておりません。実際の作成なり採点なり、そういうところでかかわってきますけれども、それは、大学業務の一環、教員との契約のときにそこを含めていますので、そういう面でも、多大なコストというのは、実はそんなに発生していないのです。コストがかかるのはいわゆる本当のロジスティクスな部分、事務的な部分に関しては、例えば印刷なり、あるいは委託なり、そういうところです。

入試業務に関しましても、現場は入試室のスタッフでやっております。そういう意味で、教員といわゆるファカルティメンバーとスタッフの役割分担がアメリカ型になっているかと思います。

本 郷

財政的な観点では、どうしても検定料収入というのが重要な課第になってきますので、当然、コストとの見計らいを、十分に考えていかなければいけません。ただやっぱり一方で、学生や社会から支持される大学の役割を考えると、有為な人材を社会に送り出す、そのための学生の人間としての成長を期する部分で、一番大きなポイントは、多様性、ダイバーシティということだろうと思います。

私どもの大学の場合、歴史的に非常に全国性が強く、関西圏からの学生の比率が大体50%しかなくて、残り50%強が関西外であるということ関係から、一般入試も全国31会場でやっているという経緯がございます。

このような出身地の多様性に加え、一人一人の個性が相互にぶつかり合って一つの文化を形成していくという、理念ですので、当然、コストに見合うかどうかということとは別に、どうしても多様な入試を展開しなければいけないという責務があります。ただ先ほども申し上げましたように、教員の負担は非常に大きなものになりますので、そのあたりをどのように効率的に運営するかということが一番大きな課題になっているように思います。

司 会（沖・山村）

ありがとうございます。

恐らく今の話は、まさに伝統的な、比較的歴史の古い大きい大学、これは国立大学も恐らく含まれると思うのですが、その場合の特に教員の負担の問題、それに対して比較的新しい、場合によっては若干小規模な大学で、システムとしてかなりアメリカ型のアドミッションズ・オフィス、入試ではなくてオフィスそのものの機能というのが非常に明確に分かれている場合とでは、あるいは教員の職務そのものがどのように定義されるかによって、かなり大きく違ってくるということかと思います。今回は両極端のお話が出ているので、間がどうなのかというのは、正直、私も知りたいところがあるのですが、それが少しご回答の中にも出てきたかなというふうに思います。ありがとうございます。

今、共通する質問をいたしました。ただ、もう少しもっと本質的といいますか、大きい問いも、会場から事前に準備されたと思われる質問もございます。全部読み上げますと5分以上かかりそうなので、大きい3点、これは、高校の先生からいただいているご質問で、恐らく私なりにまとめさせていただきますと、こういう質問というか投げかけです。

そもそも、この多元化・多様化というのは必要なのかという問いが中心にあります。要するに、高校側の状況、特に地方の高校の事情をわかっていないのではないか

という厳しいご批判でして、高校側の都合を見ないで、大学側の都合で多様化と言っているのではないかというご意見です。多様化に関して言いますと、選抜の多様化、つまり、入り口でどのように選ぶかではなくて、中で、入った後での多様化のほうที่สำคัญなのではないか。教育面での多様化の話が本来先に来るはずなのに、なぜ入り口の多様化を先に議論し改革しているのかがよくわからない。大学が多様な入試を入れると、そのたびに高校側が振り回されている。少なくともこの高校の先生のお考えでは、ご自身の高校ではそれなりに人間を育てるということはしっかりしているのに、なぜ制度がどんどん変わって行って振り回されているのか、理解できないというような厳しいご指摘も含めたご質問というふうに私としては受けとめました。それぞれのお立場からで結構ですので、こうした高校側からの投げかけに関してどのようにお考えなのかを少しご説明いただければと思います。よろしくお願いします。

白 川

まず、筑波大学のAC入試が始まった経緯について、ご紹介しなかったのがまずかったのかもしれないですが、これは、先に中教審答申がありまして、それで高校のほうの学習指導要領が改訂されまして、総合的な学習の時間を入れる、それから課題研究をやる、そういうことを高校に取り入れ

ましようということ、それから総合学科等ができてまいりました。そういう「自ら学び自ら考える」という学力について、その当時の大学のほうの入試では、それに対応できないので、そういった問題解決能力という学力を見るための入試を始める必要があるということで、AC入試を始めました。東北大、筑波大、九州大がまず始めたわけですね。実際に総合的な学習を始めた高校がありますので、そういうところからの生徒さんに、高校での在学中になさった活動等をアピールしていただくというのがそもそもの発端でございますので、それは、多元化・多様化というのは、大学も、多元化・多様化が必要であると同時に、それが、高校もやはり多元化・多様化しておられるので、それにあわせて入試も多元化・多様化しているというふうに考えております。

なので、それは、1つの高校でいろいろな入試全部に対応するというのではないのではないかと、逆に言うといろんな高校があるために、それぞれの高校ごとに何か入試を選んでいただくというか、それは、高校のほうで多分できるのではないかというふうに、私のほうからは、むしろ今のご質問を受けて考えてしまったというのが正直なところでございます。

中 津

私もそれに近い考えなのですが、地方の高校の事情については、いろいろあ

りましたけれども、少なくとも私たちは、地元の教育委員会あるいは高校の先生方、ある高校は、年7、8回も訪問していろいろな話などをしていますし、そういうものに基づいて入試制度をつくったと自負しております。恐らく受験対策ということを考えますと、進学校ですといわゆる教科書を暗記してしっかり勉強するという形だと思うんですね。先ほど申し上げましたが、うちの場合、筆記試験が論述式になっている。社会的なものを提示して、それに対する自分の意見を書かせるようなものにしている。そういうような説明しますと、ある高校の先生は、国際教育大学の入試は、ユニークで問題意識が高い学生を採りたいというのはわかるけれども、入試対策が大変だ、幾らほかの国公立と試験日はずらしているから同時に出願できるといっても、入試の傾向が違うので、いわゆるほかの大学のような読んで書かせるようなものよりも、毎回、放課後などを通じて、小論文対策の問題をやらなければいけない。それに高校生が、時間を食ってしまって、ほかの大学の対策ができないという話を聞きます。ただ、それでも、私たち国際教養大学はどのような学生が欲しいのかということを説明して理解していただいております。あと、入試も16タイプありますので、実は、いわゆる伝統的な受験勉強といいたいでしょうか、進学校でしたら一般選抜でも入ることもできる、

逆に言えば超進学校でなくても、論述対策あるいはギャップイヤー入試、高校推薦などを含めると、選択の幅を広げている、指定校推薦などもとっていません、どこからでも応募できます。そういう意味で考えると、選択の幅を私たちは幅広く提供しているつもりです。高校生には、例えば、実は一高校生当たり5回か6回ぐらい受験できるのですが、それぞれの入試タイプ、出願要件、テスト形式が違うので、自分の学校での成績、模擬試験などを見て、どれが自分に一番ぴたり合う入試なのか、それを自分で見定めて出願してください。それをいつも伝えています。

本 郷

最終的な目的として、社会に出た際に、自分なりに確信のいく生活を送る、なりたい自分になって、やりたい仕事をやるということが子どもたちの成長の一番の目標であるというふうに考えれば、中・高あるいは大学がどれだけ多様化すべきかどうかを議論するというのは、おかしいと思うんですね。多様化するのとは当たり前の話で、その中でどういう子どもに育てるかということを考えないといけない。私の考えから申しますと、多様な人材、その中での成長という点では、大規模な私立大学はそれなりに整った環境を持っているように思います。ただ、やはり学問分野と学部によって、かなり要求するものに違いがある。だから、

確かな学力と豊かな個性というのは、これは、並行するものじゃなくて、確かな学力の上にしか豊かな個性は形成されないと思いますが、学力をどこまで求めるのか、その学力とは一体何なのかということについて、根本的に考え直す必要があります。一律に一般入試における高得点者を受入れ、大学へ入ってから、バラエティーのある授業を提供することで、個性的な人間を育てなさいというだけでは、済まない問題があるように思います。その点については、中教審でも高大の接続の議論がなされていますけれども、これをもっと密にして、将来像を見据えた上で検討していかなくちゃならないんじゃないかと思っている次第です。

司 会（沖・山村）

ありがとうございます。

今、ある程度ご説明いただいたと思いますが、司会の特権で、違う角度から関連する質問をいたします。今、高校側からの視点というのをご質問の中で確認させていただきましたが、報告の中にもあったのですが、改めてそれぞれの大学で、入学後の学生が、それぞれの入試制度に関してどのように思っているのか、評価しているのかお尋ねします。これは、学校によっては、大学によっては、少しいろいろな入学後に、その成績の問題も含めてでしょうけれども、いろいろ悩んでいる学生がいないとも限らないというふうに仄聞しております。

すので、とりわけその学生、入学後の学生のその入試に対する個々の入試、多様化しているものについての評価について、どのようにお調べになっているか、どういうふうにお伺いになっているかについてお話しただけだと思います。よろしくお願いいたします。

白 川

これはというのは、私は直接やっているわけではないのですけれども、アンケートというのがございますね。それで、やはり学生自身は、自分が合格したものですから、自分が合格した入試が、いいというふうに思っているというのが結論でございます。私が調べたのではないがと言いましたのは、実は、うちの大谷准教授が、高校のほうの合格体験記というのがいっぱいありますので、そちらのほうを拝見して、こんな入試でこうやって入りましたというのがいっぱい書いてあるということで、そちらのほうですと、実は不合格のケースもわかるということがあるのでやっていますけれども、やはり自分が合格したものに対してはよかった。

それから、不合格になったものに対しても、それだけ頑張ったということで、やはり肯定的に評価しているものが多いようでございます。AC入試に関して言えば、これは、後でまた書いてもらっているものについては、「非常に自分を考える機会にな

ったし、いい入試だと思う」という評価を
すぐくいただいています。

中 津

一例を申し上げます。一般選抜で入っ
たうちの学生に、一度、聞いてみたのです
が、いわゆる普通の伝統的な入試スタイル、
センター試験と個別試験で入った学生に
「ギャップイヤー入試で入った学生をどう
思う」と聞いたら、「あいつら、個性的で
ユニークでおもしろい」「俺がやってこな
いことをいろいろやってきて、話を聞いて
いるとおもしろいし、俺もギャップイヤー
活動をやりたくなってきている」と言うん
ですね。ギャップイヤーで入った学生に、
「一般選抜で入った学生をどう思う」。
「いや、あいつら、しっかり勉強して入っ
てきているから、俺も、これからやっぱり
勉強しないといけないと思うな」。

それぞれお互いにいい意味で刺激し合っ
ているようで、大学としては、それなりの
効果があるのかなと思っています。

本 郷

私どもの大学の場合、一般入試、セン
ターか独自入試で入ってくる学生が大体6
3%で、特別入試で入ってくる学生が大体2
3%、残りの14%が附属高から上がってく
る内部進学者組です。入学の方式的には、
ほとんど入学後のG P Aとの関連性はござ
いませぬ。ただ、やはり意識の点で、方式
により非常に差がある。今後これを、大学

としてどう受けとめて、どういうふうに改
善策を講ずるべきかというのが大きな課題
です。つまり多教科・多科目の受験対策の
学習をして入ってきた学生、いわゆる教科
学力の高い学生というのは、私大の場合、
第一志望で、来た学生は多くありません。
そのような生徒は、ほとんど国公立大学を
第一志望にしている、これ以上、浪人でき
ないからという理由で入ってくる子が多い
わけですから、意識・意欲の点では当然課
題が残ります。そうじゃなくて、私立大学
を第一志望で受験してくる子というのは、
多教科・多科目型の国公立の難関大学対策
をしてきた子に比べると、入学時の教科学
力という点では、問題のある子も少なから
ず存在します。それで、どういうふうにバ
ランスをそろえるか、両者に対して画一的
な授業を行うべきなのかどうか、この辺の
ところは非常に議論のあるところで、学部
によっても、取り組む姿勢や、課題意識は
異なります。このような課題を踏まえて、
明確にし総体としての大学のカラーを築い
ていかなきゃならないと考えているような
次第です。

司 会（沖・山村）

ありがとうございます。

ある程度共通して、大きい、かなり場合
によっては厳しいご意見も含めた質問にお
答えいただきました。この後、できれば個
別のご質問というふうにも思っているので

すが、その前に、3名中2名ぐらいに共通しそうかなというのがもうあと2つほどあります。今の流れで言いますと、この質問をまず本郷先生に投げかけながら、ほかの先生お二人にも、もし可能であればお答えいただきたいと思います。

先ほどからそのAOの問題あるいは高校側の問題というのを少し質問の中にも出しておりますけれども、こういう質問がございました。「進学校がAO入試を嫌わなくなるために何かできることはないでしょうか」という内容です。これは本郷先生対象ですが、中津先生にも、あるいはこれは、余り嫌われていないかもしれませんが、もし白川先生から何かありましたらということで、まず本郷先生、お願いいたします。

本郷

報告の中で申し上げましたけれども、なかなか私立でこれも実施するのは難しいんですよ。やっぱり一番の課題は時期の問題じゃないかというふうに思います。AOという入試のありようは、決して悪いものではなくて、展開のしようによっては、十分にいわゆる筆記試験だけで問うような学力以上のものを引き出してくる。もちろん、小論文という面も、先ほど申し上げましたように、そのために必要となる知識というのは、十分に彼らが勉強しなければいけないと得られないものがありますから、それ

と連動させる形で行わせるということはいんですが、ただやっぱり高等学校側から一番ご批判を受けるのは、9月、10月段階で、もう入学のお墨つきをやってしまうと、その後の学習というのはなおざりになってしまっていて、そればかりか、周りの一般入試を受けようとしている友達にも、悪い影響を与える、学校の雰囲気、緊張感を完全に崩してしまうというご批判が強いように思います。そのあたりは、いわゆる一般入試を重点化されている進学校になればなるほど、その嫌いが強いということですので、なかなか現行のAOに対するご理解もいただけないというのが実態じゃないかと思います。ですから、もし本当に、それこそ、例えばですけれども、学力検証というものが、今、行われているセンター試験とか各大学学部の独自試験ではなくて、例えば秋の段階で一定の到達度検証を行わせて、その上で個性的な学力というものを見計らうというような入試が行われるとすれば、今後、やはりAOのありようというものも若干変わってくるのではないかというふうに思っておるようなことでございます。

白川

私どものところは、AC入試で入る人数が少ないせいもあるかもしれませんが、時期的にも、AC入試でうまくいなくても、ちゃんと一般入試で入れるような時期ということで、割と早目にやっております。

ます。青田買いではないということは、そういう、その場ではかれる学力ではない学力を見ているということで、ご説明はしております。実際に多くの進学校からも、その中で自分なりに何か部活なり研究活動なりをやった人が入ってきておりまして、今のところ、そんなに進学校から嫌われている気はしてはいないのですね。そういう生徒さんの場合は、合格後にでも生徒さん自身がセンター試験も受験するとか、それなり他の生徒さんと同じように勉強する。あるいは、自分の本当にやりたい勉強、勉強というか研究活動みたいなことを一生懸命やっているということです。そういう学力を見る入試なので、それはそれで、高校の方でも認めていただけるようお願いしたいというのが現状でございます。

中 津

国際教養大学の場合、実は、皆さんが考えるほど進学校の人は受けていないのですね。出願要件として、英検準1級程度以上あるいは高校留学経験者、まずその要件自体、ほとんど進学校では、英検をかなり重視している、あるいはTOEFL、TOEICを重視しているというところはほとんどないと思いますし、留学経験者もそんなに多くないと思います。ただ、今の質問の趣旨と関係するとしたら、高校推薦がAOと同じような時期、これは、11月に合格者が決まってしまうというのがあるのですけ

れども、最近、だんだん進学校からの出願も増えてきています。やはり私たちが、進学校を一つ一つ回って、早く、合格者が決まっても、センター試験の受験は、義務とは言いませんけれども、合格者には受けるように言っている。プラス、課題も出して、そして添削して、入学前教育も秋田に来てもらってやっている。場合によっては、入ってからのためにTOEFL対策もやっている、そういうことを伝えて、いわゆる早く決まっても、しっかり課題は出している。基本的には高校がやらなければいけないというのは、それはもったもたかもしれませんけれども、やっぱりこのご時世、大学側も、実際かなり課すものは多い。特に進学校に関しては、実際、高校3年生は、1月、2月、3月、ほとんど高校へ行っていないですよ。ただ、そういう間でも、私たちは、課題を課して合格者にはやらせている、そういうことを説明して、納得していただいています。

司 会（沖・山村）

今のお話ですと、やはり入学前の教育システムというのがかなり鍵になるかもしれないというお話かと受けとめました。今、本郷先生のほうから、やはりAOについての大きな課題のお話もありました。時期の問題も、実は幾つか出ていたのですが、実は、その時期の問題に絡めて似たような質問と、似ているけれども、違う質問という

のがございます。これも、やはりまず本郷先生にお答えいただき、もし何かコメントがありましたら、お二人の先生にもというものです。1つ目の質問は、「私大でAO入試を遅く実施することが、難しいという理由がよくわからない」、これは、公立大学の教職員の方かと思いますが、そういうご質問がございました。一方で、「AO入試、推薦入試を秋入学にシフトさせることはできないのでしょうか」というご質問もございます。

やはり時期の問題あるいは入試の時期が変えられないのであれば、入学時期をどう変えるかというお話かというふうに思います。この点につきましては、もし本郷先生、お考えがありましたら、よろしく願いいたします。

本 郷

先に触れましたように、AO入試を一般入試と遜色ない時期に実施する、その際に、基礎学力担保の方策としてセンター試験を利用するような方式の入試を設定した場合、それでどれだけこの方式で受けてくるかというのは、甚だ疑問です。それならば、センターの3教科、5教科、7科目の点数だけで判定する入試は何のためにやっているのかということになります。そこまですつと対策学習をやり通してくる子というのは、当然のことながら、難関の国公立大学を第一志望とするということになりますので、

本来のAO入試の趣旨からすると、実態として、そこに持っていくのは難しいでしょう。ただ、理想形としては、最後まで頑張らせて、その学部特性を反映させたような論述でも、あるいはディベートでもいいんですけれども、教科学力以外の学力を見計らうというような入試も、将来的には十分検討する余地はあるのではないかと思います。そのあたりは、課題としては認識しておるつもりです。

それから、秋入学が一般化して、それが国公立を問わず行われることになると、おっしゃったとおり、AO入試、推薦入試の意味合いがまた変わってくると思います。ただ、先ほども指摘しましたように、入学前教育というのは、かなり義務的にやらせてはいますが、高等学校の正課との関係とか、個人的な経費の問題等で、強制するのは非常に難しい。また、個人の責任ということになると、子どもらは遊んでしまうことが多いので、そのあたりも、大きな課題だろうと考えております。

白 川

細々とですが、秋入学をAO入試でやっているわけです。平成12年からやっておりましたけれども、国際総合学類のほうはやめてしまいまして、それから工学システム学類のほうもやめたいと言っているという、そういう状態でございます。悪くはなくて、やはり志願者が少ない、それから合格者も、

当然、少なくなってしまうというのが一番の問題で、一応はやっております。それで、入ってきた人は、3年と8カ月で卒業する人がほとんどで、平成14年からですが、早期卒業ができるようになりましたので、夏休みに補講をやりますので、早期卒業で出ていったり、さらに大学院に進学して、大学院のほうも早期卒業してというような人も結構いますので、いいことはいいんですが、余りにも今まで一般的ではないので、どうしても知られていないかもしれないですね。一生懸命PRしようとは思っているんですけども、そういうような状況でございます。やはりみんなが受ける入試のほうがたくさん受けてくれる、そういう気がします。

中 津

国際教養大学は、秋入学、春入学とも、どちらもAOはやっています。強いて質問に近い形とすればギャップイヤー入試だと思いますが、入試を11月にやって、翌年の9月に入学なのですが、先ほど申し上げたように、活動そのものへのアドバイス、活動中の、メールなどによると思うんですけども、報告の義務づけ、そして入学後も発表してもらおう。そういうような指導は行っております。

司 会（沖・山村）

ありがとうございます。

やはりこれは、もしかすると公立と私立

の大きな違い、国公立と私立の大きな違いなのかもしれません。ご質問の中にもありましたとおり、私大におけるというのは非常に大きな鍵かなというふうに思います。時間が、迫ってまいりましたので、個別のご質問をあと一、二件ずつお願いできればと思います。まず、白川先生に、これは確認のような質問なのですが、「筑波大学のディプロマポリシーは、学部・学系構成にかかわらず研究者養成を目指している。そのためのアドミッション・ポリシーに基づき、入試を行っているのですよね」というご質問がありましたが、いかがでしょうか。

白 川

いいえ、AC入試のアドミッション・ポリシーは、その問題解決能力を見る入試するという、そういうことから始まっておりまして、たまたまその後、中身を見てみると研究者志向の人が多かったという形でございます。研究者養成というのは、大学全体としてはございますけれども、そのために、個々の入試、もしそれが大学全体のポリシーだとすると、全ての入試がそういうポリシーになってしまうわけなんですけれども、必ずしもそれに向いている人も向いていない人もいるはずですし、どの入試で入ったから向いているとか向いていないとかいうのは、やっぱり後でわかることだというふうに考えております。

こんなご回答でよろしいでしょうか。

司 会（沖・山村）

あと、今回のテーマにもありましたが、入試での学生の選抜で評価尺度の多元化を考えるということについてですけれども、アドミッション・ポリシーに合った学生を評価するための評価方法について、具体的に、これは、ひょっとすると公表できない面もあるのかもしれませんが、「どのような評価方法で、実際のそれぞれの選抜方法、どういう評価をしているのかという点についてお伺いしたい」という質問があるのですが、3人の先生方、いかがでしょうか。

白 川

やはり入ってきた後の学生を見て、それぞれの組織で見て、それを評価しているという格好になると思います。何か数値化してみるとか、そういうことになると、やはりGPAとか、そういうもので見るということになってしまうので、そのアドミッション・ポリシーに合っているかどうかという件に関しては、その実際の入試とそのアドミッション・ポリシーが合っているかというようなところを我々が、アドミッションセンターの者が、その学類の各組織の人とお話ししたりして、これでいいのですかというような話はしておりますけれども、何か数値化してというものは特になくて、今のところは、その後の学力、入学後の追跡調査ぐらいしかやっていないというのが現状でございます。

これは入ってからの評価ですよ。入る前の選抜のときの評価ですか。

司 会（沖・山村）

選抜の時点での評価ということです。選抜時点で、具体的にどういう方法で、やっぱりいろいろな入試があるでしょうけれども、ある入試だったらこういう点を見て評価するとか、そういうご質問だと思います。

白 川

そういう意味です。それは、もうAC入試なり国際科学オリンピック入試、この2つはアドミッションセンターでやっておりますので、それはもうそのとおりにやっているとしか言いようがないのです。実際に、オリンピック入試だったら、オリンピックでどれだけの成績であったかというのを見ますし、それからAC入試であると、その自己推薦書に書かれている内容から、問題解決能力があるということを我々のほうで、読み取るということをやっている、そのポリシーどおりにやっているということです。これをさらに評価するというのは、なかなかほかの評価機関というか組織が、逆に必要になるかなというふうに思っています。その結果として、入ってきた学生を確かにそういう学生だねというのは、その教育組織ごとに、そのまま評価してくれている、我々を評価してくれている、そういう形になっているということで、先ほどそういうふうにお答えしました。

中 津

選抜する際の評価に関しては、配点や比重は非公表になっていますので、お伝えできませんけれども、例えば、先ほど申し上げたように、面接では求める学生像に基づいた質問をして、それを点数化していることは確かです。筆記試験は、当然、点数化します。

ただ、どのような質問するか、どのような出題形式にするかということに関し、なるべく彼らの思考、そしてそれが本学のアドミッション・ポリシーに合致しているか、そういうのを見きわめるように努力はしています。

本 郷

それぞれの入学試験というか、入学者選抜方式での基準については、全て公表しておりますので、大体どういう基準で採っているかということは、本学に関してはわかりただけだと思います。ただ、本題から外れるかもわかりませんが、15年ほど前は、立命館というと、もう入試のデパートと言われるぐらいに、A方式からF方式などと、多くのを設けていて、高校の進路の先生からも批判を毎年受けたという時期がありました。それが、入学後の学生のありようと関連させて考えた場合に、少数得意科目の重視だけで入学させるのは望ましくないという方向性を全学部が打ち出し、この間順次整理してきて、ほとんど1

方式に固定したという経緯があります。そのところは、実は、非常に難しい問題がございまして、大学の側が求めるいわゆる基礎学力というのは、何のためにそれを求めるのか。ありていに言うと、基礎学力の高い子を集めたほうが、教員が楽に指導できるからではないかというような意見もあるんですね。また一方で、基礎学力がないと、なかなか大学での授業についていけない。特に理系の分野などはそういう声が大きい。だから、なるべく多教科多科目型、いわゆる国公立型に近いような入試が望ましいというような意見もありますが、そうになると個性がどうなのかということになってくるんですね。先ほどAO入試ではないので申し上げていいかどうかわからなかったのですが、経営学部が後期入試で実施している感性入試というのがありまして、それは、センター試験で、一定の努力を6割5分やったか、担保させておいて、それでは差別化せず独自の試験を受けさせて、それで可否を決めるんですが、その試験というのは非常にユニークなものです。去年と今年の例で言いますと、試験会場でこういう袋が配られて、その中に入っているものをどうすればよく売れるか考えなさいというような問を出すのです。去年は、たしか輪ゴム。今年は電池だったと思います。そういう形で経営的感性のようなものを見計らう。そのような入試も試行的に実

施しています。ただ、それが人気を博して受験生がたくさん集まっているかというと、そうではありません。ですけれども、今後の一つのありようとして、そういうものも、当然AO入試の一環として考えていくべきじゃないかと個人的には思っております。

司 会（沖・山村）

ありがとうございます。

実は、ご質問の8割、9割方が、中津先生へのもので、特に制度面での質問が集中しておりました。かなり細かい具体的な質問が多かったので、恐縮ですが時間との兼ね合いで、場合によっては、ぜひ直接訪問してお話を伺うというのも手かなというふうに思っておりますので、多くの方のご質問をここで取り扱えないことをお詫びいたします。ただ、やはり共通して、特に重要な問題、二、三点、ここでご回答いただければと思います。

まず、その16種類の入試というものなんですけれども、一方で定員が先ほど175名というお話でしたので、この入試方法それぞれでその目標となっている人数設定がどうなっているのか。これは、実は見ればわかるという話なのですが、ただそこで、そもそも、何らかの定量的な目標設定なるものが行われているのではないか、このあたりについて、少しお話ができることがあれば、ぜひ伺えればというふうに思います。これは1点目です。2点目は、ギャップイ

ヤー入試と、あと先ほどお話のあった特別科目等履修生制度についてです。ギャップイヤーの場合には、9月入学ということなので、半年間の活動ということになります。特別科目等履修生の場合ですと、1年間の学習成果ということになると思うんですが、それぞれにつきまして、ギャップイヤー入試で、例えば活動が不十分であったというような入学予定者が出た場合に、その入学予定者の処遇はどうなっているのか。同じく特別科目等履修生の場合、1年間の成績で、やはりこの人、2年編入は無理だなという人が出ているのではないかと思います。その人数あるいはそういう人たちが実際にその後どのようなキャリアをたどっていつているのかについて、もしよろしければお話しできる範囲でお願いできればと思います。

よろしく願いいたします。

中 津

いろいろ質問をお寄せいただいてありがとうございます。先ほど話がありました。ぜひ、皆さん、秋田にいらしてください。百聞は一見にしかず。秋田空港から10分ぐらいでうちの大学に来られます。という宣伝しておきながら、16種類の入試、それぞれ定員は、ホームページなどについていますけれども、基本的には春入学だけで150、秋入学で25です。

ですから、春入学はかなり多いです。そ

の中でも、一般選抜が3分の2、AOや高校推薦などが3分の1を占めています。開学当初、定員100人でしたけれども、その後、130、150、175とふやしてきました。最初のころは一般選抜をふやしました。学力の高い学生が欲しいということでふやしていきました。その後、ギャップイヤー入試なども導入するようになって、定員をさらに振り分けてふやしてきました。入学後の頭のできに関しては、先ほど言いましたとおり、ほとんど差はないという結論に至っています。一般選抜をふやした理由に関しましては、実際、教えてみると、もう少し学力が高い学生が欲しい、活動的なのはいいんだけど、やっぱり授業をやってみると、知識、高校時代にしっかり勉強している、そういうような学生が欲しい。そして、出口のところ、就職のところでも、やはり企業は筆記試験というのがありますから、そういう面も含めると定員をふやそうというときに、ではどの枠をふやそうかといったときに、一般選抜を少しふやしましょう、開学数年目まではその流れでした。その後、ギャップイヤーあるいは外国人留学生、そこを定員化してきております。

特別科目等履修生について、1年後、できが悪かったら、どうするのかという話があります。毎年、特別科目等履修生で入学する学生は、多いときで、八、九名、少ないときですと4名ぐらいです。定員化は

しておりません。ですから、その年によって変わる。例えば、A日程で、特別科目等履修生で合格した学生が、B日程で正規合格する、そういう場合もあります。

実際、ボーダーラインぎりぎりで不合格になった学生ですので、ほぼ合格するだけの能力は持っていると思うのです。それで、今までこの制度を使って正規になった学生は50ぐらいいるのですけれども、1年後に正規学生になれなかった学生というのは、恐らく、1人か2人ですね。「一生懸命、勉強、危機感を持って勉強した」と学生は言っていましたけれども、それできちんと2年目以降、正規学生になっています。卒業に関しても、正規で入った学生とほとんど変わらない、GPAもそうですし、いわゆる就職実績に関しても、ほとんど差はありません。

ギャップイヤー活動に関して、3点目でした。途中で活動しなかったらどうするのか。大体みんな活動します。入学試験のとき、学生は、ともすれば、やっぱり大きいことを言うんですね。イランで活動を行なうとかボランティアをやるとかいうような学生もいました。そういう余りにも言うことが大きい学生が合格してしまったら、それだけ大学としては、指導する、助言する責任があります。担当教員が、より実践可能なもの、あるいはこのような同じコンセプトだけれども、地域を変えたほうがい

い、あるいはこのようなアプローチで活動したほうがいい、そのようなアドバイスもやっていって、そして入学前の発表、入学後のレポート提出、発表、それまでのいろいろなメールの交換などもやっています。やはり入りたいという学生が多いので、途中でやめるという学生、いわゆるギャップイヤー活動をやめる、そのような学生はおりません。

司 会（沖・山村）

ありがとうございます。いろいろな特性を持っている大学だと思います。

今すぐ一般化はできませんけれども、入学後の教育内容あるいはその前の仕組みで、いろいろな形で参考になるようにも思いました。まだまだ本当に、すみません、まだ手元に、まだ質問用紙が十数枚残っているのですけれども、そろそろ時間が近づいております。せっかくの機会ですので、時間の関係で、お一人か、短ければ二人ということになるかと思えますけれども、会場のほうから、これは、ぜひどうしても確認したい、聞いてみたいというご質問がありましたら、今ここでお受けしたいと思えます。いかがでしょうか。挙手していただければと思います。よろしく願いいたします。いかがでしょうか。

すみませんが、最初にご所属とお名前をお願いいたします。

質問者A

いろいろおもしろい、興味深いお話をありがとうございました。1点お伺いしたいのですが、AO入試されて、もうかなりの経過が過ぎていると思うのですが、先ほどのお話だと、AO入試で入った学生と一般入試で入った学生、学力的等々で、入った後の学生の違いはないということでしたけれども、その就職した後、大学を卒業した後の企業側の評価というのを何かアンケート等でとられたことがございますでしょうか。もしあったとしたときに、アンケートをとられたことがあったときに、それでも、やっぱりAO入試で入った学生と、それ以外の学生とでは差がないんでしょうか、その辺のところをもし情報がありましたら教えていただきたいと思います。

中 津

多分、質問内容からすると私ですね。いわゆる出口を出た後どうなっているかということだと思いますが、大学として正式な調査はしておりません。そもそも、1期生が出ても、まだ四、五年しか経っていませんし、当時は、学年定員100でしたので、卒業生を調査するほどの母数にはなっていないと思うのですね。ただ、いろんな企業の人事担当者との話は聞きましたが、入試タイプがどうこうという話はほとんど出ていません。ほかの大学の学生と違って変わっているとか、そういうような話はよく受けますけれども、入試タイプごとというの

は議論になりませんし、まさにその出口のところで、G P Aも、余り変わらなければ、それでいいのではないか。調査は、確かに必要はあるかもしれませんが、現状ではまだやっていない。これが正直なところです。

質問者A

いいですか。もしその差がないということであれば、手間暇をかけて、A O入試をやる意義は、一体何だろうと私は思ってしまうわけですね。本学でも、今、A O入試は、幾つかやっています、これからふやしていこうというつもりでいるんですけれども、入ったときに違う切り口で入学者を選抜して入れてしまう。入った後、余り差がない。出た後も、そんなに企業サイドから見て、A O入試とそれ以外の学生は差がないということになったら、一体A O入試を実施する意義は、一体何だろうと私は思ってしまうわけです。

その辺、どなたか回答していただけるとありがたいのです。

中 津

今の流れで言うと、多分私か。先ほども申し上げましたように、A Oで入った学生と一般選抜で入った学生が、学内でいろんな意味での相互関係の刺激を受けている。先ほど私、出るところは変わらないというのは、いわゆるG P Aの話であります。一般選抜で入った学生も、みずからギャップ

イヤーで入った学生から話は聞いて、自分も、ボランティア、インターンシップをやるようになる。いわゆる学力、正直申し上げて学力重視というよりも、活動力、やる気、人間力重視のギャップイヤー、特別選抜で入った学生も、入ってから一生懸命勉強をやる。つまり、そう考えますと、理想論からいうと、学生は学力も行動力も出てくる、そのような学生が、ある意味、企業からの受けがいいといいましょうか、そういう意味で就職率的にもいいのかもしれませんが、トータルとしてお互いが伸びてくる、そういう意味だと思います。

以上です。

白 川

特に調査しているわけではないということがありまして、私の所属している大学院の専攻で見ますと、大学には一般入試前期の学生が一番多く入ってきているのに、大学院の博士後期課程に進学する学生がほとんどいないというか、去年は全くいなかったのです。そういう傾向はあります。

そう言うと、さっきご質問の際におっしゃったように、やっぱり研究者養成がポリシーですかと言われるかもしれないのですが、必ずしもそうではなくて、企業に行く人も、もちろんたくさん養成しております。最近、企業のほうから、何かリクルート用の雑誌とかが来ますよね。そうすると、そういうところに卒業生の写真が載ってい

たりするということがあります。それから、高校生向けの何かパンフレットが出回っていて、その企業で、こんな人が活躍していますよというような、そういう写真が出ていて、たまたまそれがうちの学生だということが、たまたまあります。そういうのを見ていると、やはりACの学生というのが、意外と出ているという気がします。最近ですと、「リケジョ」という講談社が出している冊子に、うちの卒業生が出ていたのですが、それはACで入った学生だったとか、そういうのは見えますね。そういう非常に少ないサンプルで見るだけなので、何ともそれが一般的な結果かどうかかわからないのですが、何かそういう企業さんのほうで見ても、こいつはという人は、意外とACで入った学生なのかなという気はしていますね。それから、就職はしていないのですが、起業した学生も随分おりまして、中には、その会社で企業活動をやって、それで経済産業大臣賞をとったとか、そういうのもいます。そういうのはACの学生なので、やはりその統計的にどうかという話とはまた違った意味で、意味はある。逆に、一般入試の学生と変わらないからというものあって、我々のところでは、国際総合学類というところが、最初、AC入試をやっていたのですけれども、やめてしまいました。そのときの理由は、普通の入試で入ってきた人と余り変わらないからという理由

でした。だから、やはり分野的に、それぞれ違うのではないかなという気もしています。余りしっかりとまとめてはいませんので、いい答えになっていないかもしれませんが。

本 郷

本来は、AO入試にしろ、ほかの推薦入試でもそうですけれども、受験生に求める学生像というのは違うはずなんですね。それが十分に機能できていないということは、結局、大学側の責任も重いものがあるって、評価指標も、例えばGPAの実績であるとかキャリア実績であるとか、そういうものでしか推し量っていないということなのです。一つの例を申し上げますと、スポーツ選抜で入ってきたら、当然、当該の競技種目で華々しい成績を上げてくれることを期待するわけですけれども、その競技種目の全国レベルで高い実績を上げるだけではなくて、その学生が、実は、苦勞しながら授業にも真摯に取り組み、成績、GPAは高くなくても、4年間で都合160単位ほど取って、教職の免許まで取り、自分が競技を引退した暁には、教員として後継の指導に当たるといような、気風の学生が一人いるだけで、周りの雰囲気は全然変わってしまう。だから、やはり頑張れば、可能性というのはすごいなということをお互いに自覚させるような役割を彼らに期待することもできるということなのです。

スポーツ選抜ですから、非常に特異な例かもしれませんが、本来は、AO入試等に入ってくる子も、その学部のアドミッション・ポリシーに合わせて、リーダー的な役割、周りの一般入試で入ってきた学生たちに対して、違った形でいい影響を与えるということを期待して入れているわけですから、もしその実力を発揮できないとするならば、大学側の仕組み、設置の仕方にも、多分に考え直すべき部分があるのだろうと思います。

司 会（沖・山村）

ありがとうございました。

非常に重要な論点が幾つも出てまいりました。本当に、続けていろいろ議論したいところですが、予定されている時間をもう既に5分ほど超過しております。司会がうまくコントロールできずに、質問を随分残してしまいましたので、大変申しわけございませんでした。ただ、一方で、それぞれ国公私の違い、あるいは大学の歴史の違いなども含めて、それぞれご報告いただいたものが、理想的なモデルというよりは、それぞれの大学が置かれている状況で、いろいろ葛藤しながら試みられているということの事例の紹介ということかと思います。今、会場にいらっしゃる教職員の皆様は、それぞれの所属の機関の特徴などを踏まえて、いろいろ距離をはかりながら、これは、できる、できないとお考えになられ

たかと思います。最後に出てきた原則論で、そもそもいるのかという話、最後に出ましたし、実は質問の途中にも何度か出ておりましたので、やはり我々自身が抱えている葛藤が、入り口の段階で幾つもある。しかも、それが入学後の教育内容とかなり連動しているのだなということを司会としていろいろ伺いながら感じたところであります。

このような機会、また今後いろいろな形で続けられるかと思いますが、それぞれの機関でご尽力いただければというふうに思います。

最後に、本日、貴重なご報告いただきました3名のご報告の先生方に拍手をもって閉じたいと思います。ありがとうございました。

全国大学入学者選抜研究連絡協議会

平成25年度入研協大会（第8回）『企画討論会』

「入試における評価尺度の多元化を考える」

当日配布資料

白川友紀（筑波大学教授 アドミッションセンター/システム情報系）・・	49
中津将樹（国際教養大学入試室長）	53
本郷真紹（学校法人立命館総長特別補佐 立命館大学文学部教授）	56

先導的研究者資質の評価

筑波大学アドミッションセンター
白川友紀



学生の傾向と「入試」

入試と入学後の学生の統計量には、
様々な関係がある。

例えば、入試と進路(就職先)



進路 (平成23年度 医学・体育・芸術を除く 進路状況)

入試	推薦	一般	AC	その他	合計
教員	14	26		3	43
就活中	27	86	3	4	120
企業	98	309	18	27	452
その他	15	50	2	15	82
進学	152	593	25	79	849
公務員	25	89	2	1	117
研究員・研究生	1	7		0	8
国立大学法人	4	8		0	12
独立行政法人	1	6		0	7
合 計	337	1174	50	129	1690



進路(割合) (平成23年度 医学・体育・芸術を除く 進路状況)

入試	推薦	一般	AC	その他	合計
教員	4.2	2.2	0.0	2.3	2.5
就活中	8.0	7.3	6.0	3.1	7.1
企業	29.1	26.3	36.0	20.9	26.7
その他	4.5	4.3	4.0	11.6	4.9
進学	45.1	50.5	50.0	61.2	50.2
公務員	7.4	7.6	4.0	0.8	6.9
研究員・研究生	0.3	0.6	0.0	0.0	0.5
国立大学法人	1.2	0.7	0.0	0.0	0.7
独立行政法人	0.3	0.5	0.0	0.0	0.4
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0



学生の傾向と「入試」

- ・推薦入試の学生は、他の入試の学生より、「教員」になる割合が大きい。
しかし、教員になる学生を採るために推薦入試を行っているわけではない。
- ・「その他」の入試の学生は、他の入試の学生より、「進学」する割合が大きい。



筑波大学入試と理数学生応援プロジェクト

文科省の「理数学生応援プロジェクト」の受託事業(2009～2012年度)の「先導的研究者体験プログラム」に参加した学生のデータ



大学に入ったら
研究ができてと思っていた

高校には課題研究などがあって面白かったので、
大学に入ったらもっとやろうと思っていた人

高校では普通の授業と受験勉強ばかりで、
大学に入ったら研究をしたいと思っていた人



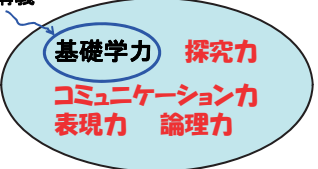

筑波大学
University of Tsukuba

研究者を目指す学生に身につけて欲しい能力

通常の講義

基礎学力 探究力
コミュニケーション力 表現力 論理力

授業「研究者入門」+先導的研究者体験プログラム



筑波大学
University of Tsukuba

先導的研究者体験プログラム
Advancing Researcher Experience (ARE)

↓

“自主的な研究活動を支援するプログラム”

こんな学生に参加してほしい！

- 研究経験はないが研究に興味がある
- 卒研まで待てない、すぐに研究を始めたい
- 大学入学前に行っていた研究を続けたい



どれか1つでも当てはまればOK！



筑波大学
University of Tsukuba

自主的な研究活動の支援

研究のレベルに応じて、
研究費(消耗品費、調査旅費)を支援！

【平成24年度】

種目	申請上限額	採択予定件数	研究スタイル 採択基準
S	100万円	1件程度	共同、個人 論文1件or学会発表2件
A	30万円	3件程度	共同、個人 学会発表1件
B	15万円	6件程度	共同、個人 研究活動の経験あり
C	5万円	40件程度	個人 特に基準なし

筑波大学
University of Tsukuba

サイエンス・インカレ

第1回(2012年2月)
筑波大学の学生4人が7賞受賞
卒業研究に関係しない分野
4人のファイナリスト中2名

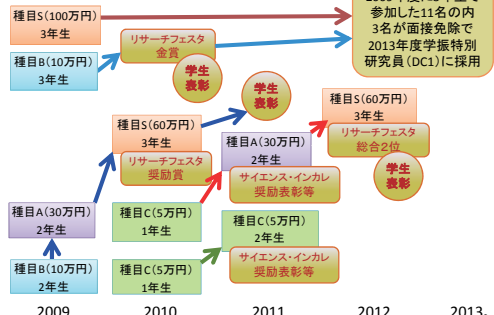



第2回(2013年3月)
卒業研究に関係する分野で
4人のファイナリスト中に2名
うち1名は最優秀




筑波大学
University of Tsukuba

ARE参加学生の研究歴(例)



2009 2010 2011 2012 2013

2009年度に3年生で参加した11名のうち3名が面接免除で2013年度学振特別研究員(DC1)に採用

授業「研究者入門」

課題発見・解決能力を磨く

- ・漠然とした興味から具体的な研究計画への動機付け
- ・研究(者)のイメージをより具体的に知る
- ・研究計画書の書き方
- ・プレゼンテーションの機会および指導
- ・履修者、単位取得者が増加、95%以上は1年生
- ・人文学類、心理学類の学生も受講、単位取得



	履修者数	単位取得者数	プログラム参加者数
H22年度	8名	5名	3名
H23年度	25名	18名	3名
H24年度	47名	31名	5名

先導的研究者体験プログラム参加者

入試	参加者				
	2009	2010	2011	2012	合計
AC	13	9	8	12	42
国際	0	1	1	3	5
推薦	3	5	2	7	17
G30	0	0	2	4	6
前期	6	4	6	11	27
後期	2	2	6	4	14
編入	0	2	0	2	4
合計	24	23	25	43	115

2007～2012年度の理工農系入学者数

(私費外国人留学生、帰国生徒、AC入試第Ⅱ期は記載していない)

入試	年 度					
	2007	2008	2009	2010	2011	2012
AC	45	38	32	31	28	28
国際	—	—	5	6	9	6
推薦	233	215	215	214	201	195
G30	—	—	—	14	14	23
前期	676	705	698	666	660	650
後期	146	142	166	147	140	140
編入	—	—	126	104	188	89
合計	1,100	1,100	1,242	1,182	1,140	1,131

2009～2012年度の理工農系入試別在学者数

(私費外国人留学生、帰国生徒、AC入試第Ⅱ期は記載していない)

入試	理工農系1～3年在学生				
	2009	2010	2011	2012	合計
AC	115	101	91	87	394
国際	5	11	20	21	57
推薦	663	644	660	610	2,577
G30	0	14	28	51	93
前期	2,079	2,069	2,024	1,976	8,148
後期	454	455	453	427	1,362
編入	126	104	88	89	407
合計	3,442	3,384	3,442	3,200	3,442

入学経路別参加率

入試	参加者	対象者	参加率(%)
AC	42	394	10.7
国際	5	57	8.8
推薦	17	2,577	0.7
G30	6	93	6.5
前期	27	8,148	0.3
後期	14	1,362	1.0
編入	4	407	1.0
合計	115	13,038	0.9

先導的研究者体験プログラムと入試

- ・AC入試、国際科学オリンピック特別入試ならびにGlobal30入試の入学者の割合が有意に大きかった
- ・反対に一般入試(前期)の入学者の割合が有意に小さかった
($p < 0.001$)フィッシャーの正確確率検定

まとめ

- AC入試, 国際科学オリンピック特別入試, Global30入試による入学者は研究志向が強いと考えられる。ただし, 国際科学オリンピック特別入試ならびにGlobal30入試の入学者については, まだ参加者数が少ないため, さらに続けて調査することが必要であろう。
- 一方, 推薦入試, 一般入試(後期), 学群編入学については有意ではなかった($p > 0.05$)。
編入学者は入学時に3年で, 参加することができる期間が入学してすぐの1年間に限られ参加しにくいとため, 学群編入学による入学者が研究志向でないと判断することは適当ではないと思われる。

「求める学生像」に合致する 学生を確保するための選抜



国際教養大学
中 津 将 樹
nakatsu@aiu.ac.jp

1

お伝えしたいこと

1. どのような入試を行っているか
2. なぜ多くの入試を行っているか
3. どのような問題を作成しているか
4. どのように「入試」を位置づけているか

2

国際教養大学

(AIU: Akita International University)

- ・秋田県が設立した公立大学
- ・2004年設立
- ・定員175名(学年)
- ・国際教養学部
 - グローバル・ビジネス課程
 - グローバル・スタディーズ課程



3

国際教養大学の特徴

- ・授業はすべて英語
- ・一年間の留学義務づけ
- ・少人数教育
- ・米国式教養教育
- ・24時間開館の図書館
- ・安価な費用
- ・キャンパスは異文化空間
- ・就職率100%



4

国際教養大学の理念

外国語のコミュニケーション能力と豊かな教養、
グローバルな専門知識を身につけた実践力の
ある人材を養成し、国際社会や地域社会に貢
献する。

5

求める学生像

1. 学習意欲が強く、鋭い問題意識をもつ学生
2. 国際社会を舞台に活躍できるような実践的
な外国語運用能力(特に英語)と、幅広い教
養の習得を志す学生
3. 世界の多様な文化、言語、歴史、社会、そし
て経済や環境などの国際関係について、強
い関心と探究心をもつ学生

6

入試制度(1)

1. 特別選抜

- ・グローバル・セミナー
- ・高校推薦
- ・ギャップイヤー
- ・外国人留学生I、II
- ・AO・高校留学生I、II
- ・社会人
- ・帰国生
- ・転編入I、II(2年次)(3年次)

試験: 面接(日、英)、英語小論文

目的: 人間的な魅力のある人材の確保

7

入試制度(2)

2. 一般選抜

- ・A日程: 3教科型
- ・B日程: 5教科型
- ・C日程: 1教科型

試験: センター試験(1-5科目)

個別試験(国語、英語小論文)

目的: 知力のある人材の確保

8

入試制度(3)

3. ユニークな入試制度

- ・他の国公立大学との併願可能
- ・全国7ヶ所で受験可能
- ・特別科目等履修生制度
- ・英語資格等保持者への特例措置

9

入試選抜基準

・面接—人間的な魅力

・筆記試験—潜在的学力
社会への関心
論理的思考力

国際社会、地域社会で活躍できる素養、気質、
潜在力、能力をもつ人材を選抜したい

10

入試問題

1. ポイント

社会に対する関心を有し、自分の意見を論理的かつ批判的視点をもち伝えることができるか

2. 過去の出題

- ・面接: 社会問題に対する関心、意見
- ・筆記試験(論述式):
 - 出典—(国語)現代の名著 (英語)時事雑誌、新聞
 - 設問—(国語)日本とインドの社会制度
 - ベトナムへの教育援助
 - (英語)遺跡発掘品の返還、国籍変更

11

なぜ多くの入試を行なうのか

多種多様な学生がほしい

- 学生同士の学内での交流
- コミュニケーション能力の醸成
- 経験の交流
- 知力、人間力の醸成

→国際社会、地域社会で活躍できる人材を養成できる

→ 学生が伸びる 大学も伸びる

12

入学後の成績の相違はあるのか

なし

13

メリットとデメリット

・メリット

- 多様な学生を確保することができる
- 「求める学生像」に合致した学生を確保できる
 - 学内への波及効果
 - 成績の差異はない

・デメリット

- 時間、労力、エネルギーがかかる
- 多様な学力の学生が集まる(?)

14

メッセージとしての入試

1. 「育てる入試」の実践

- ・グローバル・セミナー、試験問題→教養力の向上
- ・ギャップイヤー→主体的、能動的人材の育成

2. 大学の教育内容、理念の発信

- ・教養教育の重視
- ・語学力、コミュニケーション能力の重視
- ・論理的思考、批判的思考の重視

→教育内容、高校や社会との連携を考えるきっかけとしての入試

15



私立大学におけるAO入試の現状と課題

－ 立命館大学の事例を通じて －

学校法人立命館 総長特別補佐
本郷 真紹



本学アドミッションズ・オフィス設置の経緯

◆ 趣旨

- ◆ 入学者の質的向上を目指すための意識的な取り組みの必要性
- ◆ 特別入試については、受験生の資質・個性・能力を多面的・総合的に評価する入試として実施してきたが、積極的な改善や改革ができていない状況にあった。
- ◆ 本学が質の高い入学者を確保するうえで、これらの特別入試全体を本学の入学政策のなかで重点化し、年度ごとの点検・評価を行う常設機関を設置する必要があった。
- ◆ この常設機関としてアドミッションズ・オフィスを設け、全体の政策立案と学生のリーダーとなりうる中核的人材の確保を行う。
- ◆ 21世紀のリーダーとして活躍のできる人材の発掘や確保を行う機能と役割を有したものと位置づける。

1



本学アドミッションズ・オフィス設置の経緯

◆ 役割

- ◆ 自己推薦入試、文芸入試、指定校推薦を含めた担当セクションとしてアドミッションズ・オフィスを設置する。
- ◆ 特別入試の制度や入試改革、高等学校および生徒の日常的な情報収集やリクルート活動をはじめとする学生募集、応募資格・書類選考などの入学者の資格確認の事務局を担う。
- ◆ 本来、米国におけるアドミッションズ・オフィスは、多くの大学で理事会のもとに大学の管理運営上の戦略として取り組まれている。学生募集、入学許可方針の決定、合格者審査・決定、奨学金手続まで一切の業務を行っているが、日本では、そこまでには至っていない状況にある。本学でも1998年度からアドミッションズ・オフィスを立ち上げるが、その役割については段階を追って精緻化することとし、「日本型アドミッションズ・オフィス」のモデルを目指すこととする。

2



本学AO入試の変遷

◆ AO入試の変遷

- ◆ 1994年度 自己推薦特別入試開始（政策科学部）
- ◆ 1995年度 自己推薦特別入試を全学的に開始（経済・文学部は1996年度より）
実施学部 法・営・産社・国関・政策・理工
合格者163名（一般入試2次手続者4,640名 全体の3.5%）
- ◆ 1998年度 アドミッションズ・オフィス設置
- ◆ 1999年度 AO入試開始
①アドミッションズ・オフィスによる自己推薦入試
②法学部 セミナー方式
実施学部 法・経・営・産社・国関・政策・文・理工
合格者176名（一般入試2次手続者5,219名 全体の3.8%）

3



本学AO入試の変遷

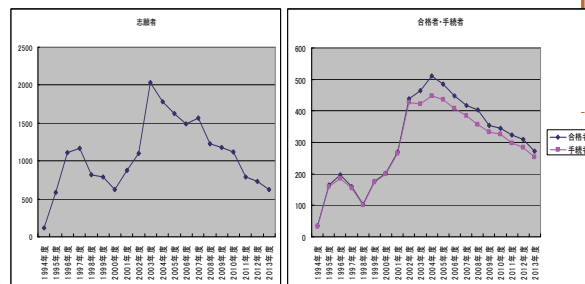
- ◆ 2001年度 学部独自方式開始（政策科学部は2002年度より）
- ◆ 2009年度 薬学部を除く全学部で実施
合格者 355名（一般入試2次手続者3,910名 全体の9.1%）
- ◆ 2012年度 自己推薦方式を国際方式に改める。
- ◆ 2013年度 全学で行う国際方式を廃止し、継続する学部については学部独自方式として国際方式を実施することに改める。社会人自己推薦特別選抜入試を廃止し、社会人学生の募集を継続する学部については、AO入試として「社会人方式」を新設した。
- ◆ 2014年度 経済学部で募集停止
実施学部 法・産社・国関・政策・文・映像・営・スポ健・理工・情理・生命

4



本学AO入試の変遷

- ◆ 2002年度、2003年度、2004年度をピークに減少傾向にある。



5



本学AO入試・スポーツ健康科学部(2013年度)

<スポーツ健康科学部> ◆ グローバル・リーダーシップ方式

募集人数

スポーツ健康科学部	スポーツ科学コース	5名
	健康運動科学コース	
	スポーツ教育コース	
	スポーツマネジメントコース	

選考方法

第1次選考

書類審査

出願書類により選考を行い、総合的に評価したうえで、第1次選考合格者を決定します。

第2次選考

①小論文(80分) 小論文は、高等学校での学習を踏まえ、文章を読み、書き、考える力を総合的に試す問題が課せられます。

②面接(約15分)

面接は、出願書類(「エントリーシート」等)をもとに行います。

最終合否判定

第1次選考および第2次選考を総合的に審査し、合格者を決定します。

18

本学AO入試・理工学部(2013年度)

<理工学部> ◆ 理工セミナー方式

募集人数

数学物理系	物理科学科	10名
電子システム系	電気電子工学科	8名
	電子情報工学科	5名
機械システム系	機械工学科	8名
	ロボティクス学科	5名
環境都市系	都市システム工学科	5名
	環境システム工学科	5名

選考方法

■物理科学科

①数学について、「高等学校での学習から大学での学習につながる内容のセミナー(60分)」を行うとともに、「セミナー内容に関する理解を問う筆記試験(60分)」を行います。

②面接(15分)を実施し、大学で物理を学ぶための心構えや物理の基本的な知識などについて確認します。

■電気電子工学科・電子情報工学科・機械工学科・ロボティクス学科

都市システム工学科・環境システム工学科

数学および物理について、「それぞれ高等学校での学習から大学での学習につながる内容のセミナー(60分)」を行うとともに、「セミナー内容に関する理解を問う筆記試験(60分)」を行います。

19

本学のAO入試・情報理工学部(2013年度)

<情報理工学部> ◆ 総合評価方式

募集人数

情報システム学科	プログラミング試験型	5名
情報コミュニケーション学科		
メディア情報学科	自作ソフトウェア提出型	10名
知能情報学科		

選考方法

【プログラミング試験型】

下記の(1)と(2)を総合的に評価し、合格者を決定します。

(1)書類審査

エントリーシートにより、大学入学後の学習意欲・関心等を評価します。

(2)実施試験

①C言語によるプログラミング能力を評価する試験(60分)

プログラム開発能力、論理的思考能力等を評価します。

※本入試の受験にあたって初歩的な言語プログラミング能力が必要となります。ただし、大学が提供する「事前学習資料」で学習できる範囲に限ります。

②小論文(60分)

情報科学分野で必要とされる問題解決能力、独創性、表現力等を評価します。

③面接および10問試験(プログラミングに関する知識を問う内容)(約20分)

プログラミング知識、論理的思考能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ等の評価をします。

20

本学AO入試・情報理工学部(2013年度)

<情報理工学部> ◆ 総合評価方式

選考方法

【自作ソフトウェア提出型】

下記の(1)から(3)を総合的に評価し、合格者を決定します。

(1)書類審査

エントリーシートにより、大学入学後の学習意欲・関心等を評価します。

(2)自作ソフトウェアの審査

提出されたソフトウェアによりプログラム開発能力、論理的思考能力等を評価します。

※立命館-全国高校生ソフトウェア創作コンテスト「ICT Challenge+R(2011~2012)」に個人でエントリーし、ファイナリストに選出された者およびチャレンジ賞を受賞した者は、自作ソフトウェアの提出を免除し、満点扱いとします。

※「ICT Challenge+R 2012」に関する詳細は、Webサイトをご確認ください
(<http://www.ict-challenger.jp/>)。

(3)実施試験

①小論文(60分)

情報科学分野で必要とされる問題解決能力、独創性、表現力等を評価します。

②面接および10問試験(プログラミングに関する知識や提出されたソフトウェアについて問う内容)(約20分)

プログラミング知識、論理的思考能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ等の評価をします。

21

本学AO入試・生命科学部(2013年度)

<生命科学部> ◆ 科学技術チャレンジ方式

募集人数

応用化学科	1名
生体工学科	1名
生命情報学科	1名
生命医科学科	1名

選考方法

下記の(1)と(2)を総合的に評価し、合格者を決定します。

(1)書類審査(「エントリーシート」・「活動実績報告書」等)

エントリーシートは、大学入学後の学習意欲・関心等を評価します。

(2)プレゼンテーションと面接

①コンテスト等での入賞あるいは受賞内容についてプレゼンテーション(15分程度)を行います。

②その後、出願時に提出したエントリーシートの内容について質疑応答を中心に、面接(20分程度)を行います。

22

AO入試での入学者の実態

- ◆ AO入試で入学してきた学生のGPA(1回生から4回生)の全学平均は「2.6」となっており、全体平均の「2.7」と比較すれば若干低い値となっている。
- ◆ 2012年度の進路就職決定率(就職・進学/卒業生)も、AO入試で入学してきた学生は「80.0%」で、全体平均の「84.9%」よりも低くなっている。入試区分別では最も低い数字となっている。



- ◆ モチベーションは高いが、そのことが大学での「学び」や「成長」に上手く繋がっていない。

23

大学入学者選抜実施要項

- ◆ アドミッション・オフィス入試
詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、入学志願者の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判定する入試方法と位置づけている。
- ◆ また、入学志願者の能力、適性、意欲、関心等を多面的、総合的に判定するとともに、大学教育を受けるために必要な基礎学力の状況を把握するために以下の1つを少なくとも行うこととしている。
 - ①各大が実施する検査(筆記、実技、面接等)による検査の成績を合否判定に用いる。
 - ②大学入試センター試験の成績を出願要件(出願の目安)や合否判定に用いる。
 - ③資格・検定試験などの成績等を出願要件(出願の目安)や合否判定に用いる。
 - ④高等学校の教科の評定平均値を出願要件(出願の目安)や合否判定に用いる。



基礎学力担保の方向性

24

大学入学者選抜実施要項

- ◆ 試験期日等においてアドミッション・オフィス入試における学力検査の期日は、試験期日平成25年2月1日から4月15日までの間としている。
- ◆ しかし、多くの私学の場合、2月1日以降に学力試験を課していたのでは、アドミッション・オフィス入試が成立しない状況にある。
- ◆ 評定平均値や資格試験のみでは、大学で学ぶための基礎学力を測るのは難しい状況にある。
- ◆ 従って、基礎学力が担保されにくい実態がある。
- ◆ 国公立大学であればセンター試験を受験させ、その後、合否判定を行っても受験生を確保することは可能である。



入学者選抜実施要項を実態に合わせる必要がある。

25

新学習指導要領との関係性

- ◆ 新しい高等学校学習指導要領の総則には、「学校の教育活動を進めるにあたっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と規定されており、「生きる力」を育成することが基本的な考え方として貫かれている。「生きる力」とは「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康や体力」などで構成されており、そのなかでも「確かな学力」とは、「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」として位置づけられている。
- ◆ 私立大学におけるアドミッション・オフィス入試が必ずしも学習指導要領で提示されている「確かな学力」のベースとなる基礎学力を測る入試に成り得ていない状況にある。

26

大学改革実行プラン

- ◆ 入学試験の多様化している機能を整理し、その機能を高等学校や大学に分散させる方向性を持っており、欧米のように大学入学資格(イギリスのALEVEL、フランスのパカロレアなど)や大学進学準備検査(アメリカのSAT・ATCなど)等の要素を取り込もうとしている。
- ◆ センター試験の資格試験的活用の促進
- ◆ 思考力・判断力・知識の活用能力等(クリティカルシンキング等)を問う新たな共通テストの開発
- ◆ 大学グループ別の入学者共同選抜の導入の促進
- ◆ 志願者と大学が相互理解を深めるため、時間をかけた創意工夫ある入試の促進

27

AO入試の課題

- ◆ 本学の場合、文社系学部の合格発表が10月中旬、理工系学部の場合は12月上旬となる。
- ◆ 高校教育現場では、一般入試受験層に指導がシフトされる。
- ◆ 高校教育との断絶
- ◆ 私立高校を中心に推薦入試やAO入試をターゲットとしたコース設定を行っている学校がある。
- ◆ AO入試合格者の学習のモチベーションを如何に継続させるのか?
- ◆ 必要に迫られて各大学が入学前教育を展開。

28

本学入学前教育の展開

- ◆ プレエントランスディにおいて大学での学びについて紹介し、学習を継続することの重要性を訴えている。
- ◆ プレエントランスディを受けて入学前教育を重層的に展開している。
- ◆ ポータルサイト「入学前学習支援サイト」を立ち上げ、大学との継続的な接点を持たせるようにしている。
- ◆ 入学前学力自己診断ツールを提供し、「学習のペースメーカー」として活用してもらう。

29

本学入学前教育の展開



30

本学入学前教育の展開

「入学前学習講座」一覧

講座番号	講座名	担当教員	実施時期
1	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
2	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
3	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
4	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
5	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
6	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
7	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
8	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
9	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
10	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
11	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
12	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
13	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
14	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
15	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
16	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
17	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
18	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
19	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
20	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
21	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
22	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
23	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前
24	入学前学習講座 基礎講座	山崎 浩一	入学前

31

AO入試で入学してきた層が中核的存在となるような 仕組みの検討

- ◆ いわゆる進学校では、AO入試での進路指導を行っていない状況にある。
- ◆ 一般入試に対してネガティブな層が、AO入試を受験する傾向にある。
- ◆ 基礎学力の高い生徒がAO入試で入学することのメリットを打ち出す必要がある。
 - ◆ AO入試で入学して来た優秀層へのトップアップ教育プログラムの実施
 - ◆ AO入試で入学して来た優秀層に対するグローバル教育プログラムの実施
 - ◆ AO入試で入学して来た優秀層への奨学金の検討
- ◆ AO入試を大学で学ぶ上で必要な基礎学力を担保したうえで、目的意識や意欲やリーダーシップ力の高い学生を確保できる入試に発展させなければならない。
- ◆ AO入試は大学の核となる人材を確保するものでなければならない。

32

特集 2

平成 25 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 8 回）公開討論会

「受験対策学習ばかりを助長しない入試改革や教育改革について」

日 時：平成 25 年 6 月 6 日（木） 14:00～17:00

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 大ホール

司 会：松 浦 克 美（首都大学東京教授）

パネリスト及びサブテーマ：

淡 路 敏 之（京都大学理事）

「京都大学の入試改革と研究型総合大学（RU12）における入試改革に関する検討について」

河 合 久（中央大学商学部長）

「中央大学商学部における特別入試制度の成果と教育システムのあり方について」

小 林 洋 司（全国高等学校長協会 大学入試対策委員長・
東京都立桜修館中等教育学校校長）

「高大の円滑な接続を推進する大学入試の在り方」

山 下 仁 司（(株)ベネッセコーポレーション Benesse 教育研究開発
センター 高等教育研究所主任研究員）

「主体的な学びにつながる入学者選抜について」

司 会（松浦 克美

首都大学東京 教授）

時間になりましたので、公開討論会を始めさせていただきます。首都大学東京の松浦と申します。本日の午前中には、企画討論会において「入試における評価尺度の多元化を考える」をテーマに、報告、討論が行われました。午後の公開討論会で設定させていただきましたテーマも、午前中のテーマと問題意識を共通する部分も多く、現在の大学入試の中心的な問題点を反映していると感じております。

午後設定させていただいた「受験対策学習ばかりを助長しない入試改革や教育改革について」ですが、ここに教育改革というが入っているのは高校も大学も両方というつもりなんですけれども、これはちょっと最初は違う視点が入っておりまして、今高校生が一生懸命やっている受験勉強が、もう大学入学後にあまり役に立たなくなっているのではないかなという、そういう視点で教育改革を中心に議論できればと考えました。しかし、それでは問題が大きくなりすぎるので、入試改革を中心の構成にしました。だから入試改革で何をやるかというほうは午前中のテーマと結構似てきちゃうんですけれども、そういう視点のタイトルです。

それで、この趣旨説明をする前に、首都大学東京での入試と入学後成績追跡の例を

ご紹介します。首都大学東京は今年で9年目、8年前に東京都立大学から編成がえて首都大学東京になりました。それで、そのときから多様な入試、推薦入試とかA0入試を導入するようになって、20%ぐらいの定員で設定しています。これは第1期生の3年生までの成績追跡調査で、何となく私などはそういうことかなと予期はしていたのですけれども、ちょっと衝撃的だったんですね。

入学時の英語のクラス分けテスト、プレースメントテストですけれども、その結果は普通言われているように一般入試の人に比べて推薦入試やA0入試の人たちが15%ぐらい悪い。ところが1年の最後の成績になると、もう15%ぐらいひっくり返っていて、2年、3年と学年が上がっても一般入試で入ってきた人に比べて一般推薦のほうが20%ぐらい、A0入試のほうが10%ぐらい成績がよいという。この後、卒業するときも、より開くばかりでしたし、これ1期生ですけれども今まで4期生まで卒業したのかな、その毎年とも同じ傾向です。

このような入試方式と入学後の成績の関係は、昨年度この協議会に私も出させていただいて、幾つかの大学、そういう大学というのは国公立でA0とか一般推薦の倍率が2倍とかをキープしている大学じゃないかと思ったんですけれども、そういうところでは同じようなことが起こっているようで

した。

それで今回の趣旨の説明になりますが、仮説として、きょうの議論の中でいやそんなことはないよということになるかもしれないんですけども、過度の合格至上主義による受験技術トレーニングへの依存が高まったために大学教育に対応できない、主体的に学ばない大学生が増えちゃったんじゃないか。そのため一般入試の改善をいろいろどちらでもやっていると思うんですけども、それだけじゃなかなかうまく対応できない、いくらいい問題つくっても受験対策で何とかクリアされちゃう。

一方、AOや推薦入試は、既にやっているところも多いわけでなかなか課題も多いわけですけども、うまくやりさえすれば受験対策に偏らない、高校時代の学習、活動を評価して、それで高大接続を高校大学の両方が協力してやれば、みずから学んだり考える力を備えた社会を支えるグローバル人材が育成できるんじゃないかという、これが趣旨であり仮説であります。

それで、流れだけお話ししますと、最初に京大理事の淡路先生に30分お話しいただいて、その後、中央大学商学部長の河合先生に20分、それから全国高等学校長協会の大学入試対策委員長的小林先生に20分、そのあとベネッセコーポレーションの山下様に20分話していただいて、その後15分休憩、この間に朝と同じ質問用紙を回収したいと

思います。それで1時間ぐらいのパネルディスカッションをしようと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは早速、1番目のご講演をお願いしたいと思います。第1回目は京都大学理事の淡路先生、「京都大学の入試改革と研究型総合大学（RU12）における入試改革に関する検討について」、よろしくお願いいたします。

淡路 敏之

（京都大学 理事）

皆さんこんにちは。京都大学の淡路でございます。まず最初に、本日はこのような機会を与えていただきました首都大学東京、それから大学入試センターにお礼を申し上げます。

きょうのタイトルはこのとおりでございます。このスライドに書かれていますRU12というのは、北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、東京工業大学、一橋大学、早稲田大学、慶應義塾大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学からなる主要研究型12大学（Research University）の略称で、このような12大学で副学長級の教育懇話会を昨年度から立ち上げ、その中に幾つかのワーキングを設けております。大学入試改革もその一つで、幹事を京都大学がやっています。そこでの議論も一部含めながらご説明させていただきますが、RU12の大学について不確実な話はできませんの

で、主には京都大学の入試改革の検討状況についてお話をさせていただきます。

その前に、昨日からの分科会で議論されていますように、入試は各大学・学部のミッションを反映して多様化していますので、丁寧な議論を行う必要があります。理系と文系、また理系の中でも医歯薬系で重視する能力や入試方法は他の理系とは異なる要素があるので、一括して話をするというのは混乱を招く恐れがあると思われます。本日の話は、一般論を対象とするものではなく、本学やRU12では大学入試をどう考えているのかという視点でお話をさせていただきます。

それから、プレゼン資料には皆さん方のお手元にあるもの以外のスライドが含まれるなど一部変更しています。お手元にある資料については手短に、ないものについては少し時間をとって説明させていただきます。

昨年5月に、岡山県岡山市で開催された全国大学入学者選抜研究連絡協議会（以下、「入研協」という。）の企画討論会において、「新学習指導要領の導入：大学の対応と課題」というタイトルで4人のパネリストの方々がスライドに書きましたような話題提供をされました。まさか今年、私がこのような場に立つとは思いませんでしたが、折角の機会ですので、高校教育と大学教育の接点である大学入試について、高大連

携・高大接続という観点から話題提供させていただきます。

大学から言えば、高校は予科という見方ができます。そうすると、予科ではどういうことをやってほしいのか、どういうことがやられているのか、について高校と大学が情報共有することが教育の接続にとって重要となります。

昨年度の入研協では高校教育の目線から主に議論がなされ、新学習指導要領を切り口に、活用型の学習や自立の準備、個性の伸長等について検討されました。高校において自立の準備をなし、大学で個性を伸ばすという意味で捉えれば、個の力を伸ばす予科と本科の連携を、大学側は出前講義などいろいろな取り組みを通じて（高大連携・高大接続を）強化し、その線上で大学入試を検討していこうとも捉えられます。

そのためには、高校におけるカリキュラムの現状を知っておくことは大事です。高校を訪問してわかったことは、高校、大学ともにほぼ全入状態にある昨今の時代的帰結として、今の高校生の進路は極めて多様で、その共通部分のミニマム・リクワイアメントとして、必修科目が主に1年次に設定されています。換言すれば、昭和時代のようなgeneral educationが校内一斉に履行されるというのではなく、生徒の希望先に対応した複数の学習課程がその上に用意されています。進学校では、学力スタン

ダードを系別に策定、進路別の学力保障の準備がなされています。

本年4月25日に文部科学省から発表されました「第2期教育振興基本計画」（中教審答申第163号）には、今後のグローバル社会を見据えて、学力の定着と伸長に加え、学ぶ意欲の喚起、課題発見・解決能力の伸長が大事である、中高段階では外国語教育、特に英語教育と理数教育を充実してほしい、というメッセージが込められています。

また、昨年度の入研協では、ユニバーサル化した大学という状況下での大学入試は必然的に選抜から接続型にならざるをえず、それに見合った、最適な大学入試の選抜方法と能力測定方法の開発が重要であると指摘されています。現在問われている大学入試の改善・改革は以上のような諸条件、諸環境下で、最善解を探索するものとも言えましょう。

なお、昨年度の入研協の討論会では、フロアから、大学入試のフロンランナーである東北大学の参加者がそういう経験知をまとめて出版しているとのコメントがあり、私どもも読ませていただいた次第です。

「第2期教育振興基本計画」（中教審答申第163号）では、4つのビジョン、8つのミッション、30のアクションが記されています。最初に、社会を生き抜く力の育成ということで、幼稚園から高校にかけて、

新学習指導要領に対応するような生きる力の確実な育成が記載されています。2番目には、これを受けた形で、大学では課題探究能力を涵養し、どのような事態に対しても最善解を導くことのできるような人材育成を目指してほしい。そのためには、3番目として、自立、協働、創造に長けた能力の涵養、4番目には、いわゆる学び直しということで、従来の生涯学習の考え方を一歩進める形で記載されています。5番目には、未来への飛躍を実現する人材が日本国にとって待ったなしの状況であり、グローバル人材の育成が急がれると触れられています。

同様に、教育再生実行会議からは、例えば5月23日付日本経済新聞社の記事にありますように、大学においては、グローバル化への対応やイノベーションの創出、経営基盤の強化が待ったなしの課題であると言及しています。私なりに言えば、教育の国際化、イノベーションの創出、自立と多元的学び直しを一体的に推進する社会スキームの実装が重要で、そのような人材育成の効果を最大化する上で産官学連携の総力戦は有効であり、仕掛けづくりが経済社会から強く求められるようになりました。ここで言う多様な学び直しとは、高度な知識基盤社会につきものの学術の発展に応じたステップアップを行うということも包含されており、私は「学び高め」だと思う次第で

す。

教育改革プランには、グローバル人材育成の強化のためのロードマップが示されています。小学校、中学校では英語教育や理数科教育を強化し、高校では例えば国際バカロレアの認定校制度等を活用して、グローバル力の飛躍的アップを図り、大学では国際化を推進して世界トップレベルの拠点を作って世界ランキング100位までに日本の大学が10校入るという目標を掲げています。

このような教育改革プロセスの一環として、世界に通じる、あるいは世界と競える人材の育成に向けて、1点を争う知識偏重の大学入試を改め、予測不能な社会の変化に対応でき、最善解を見出していける能力の育成に主眼が置かれるようになりました。その改革の方向性として3点挙げられていますが、ここでは説明は省略させていただきます。

何事も背景を考えることは大切です。大学入試改革や教育改革をめぐるのは、背景の一つに、科学技術に対して決して少ない資金と人材を投入してきたものの、我が国の経済は依然として閉塞状態にあり、その一つの原因として、多くのデータは日本の大学の国際的競争力の低下を示すなど、人材育成に問題があるのではないかという捉え方がされています。スライドに掲載されていますように、確かに諸外国が科学技

術、高等教育予算を伸ばす中、日本は2000年度の公財政支出を100として比べるとその伸びは諸外国に比べて低い。現在の教育費の対GDP比は日本は3.8%、OECD平均では5.8%です。しかしながら、教育費そのものの絶対額は決して少なくありません。首相は昨日、失われた20年から回復の10年に転じるため、グローバル人材を育成して日本を引っ張ってほしいというような発言をされていました。そのようなことが今、教育に求められています。

背景の2番目ですが、大学というのは科学技術を産み出すと同時に、それを使う人を産み出す唯一の場です。裏返せば、研究成果の社会還元や優れた人材を送り出すという大学の教育研究が、我が国の基礎体力の源であり、それ故大学への期待は非常に大きいものがあります。

大学における人材育成の出発点は入試です。上記のような視点で入試改革を考えると、人口動態を見ておく必要があります。驚くことに、少子高齢化に伴い、過去20年間で18歳人口は約4割減少しています。一方、大学の入学定員は減るどころか増えています。そうすると、単純計算では入学者の学力のばらつきは大きくなると予想され、実際そのような事態に直面しています。学力だけでなくマインドも大事というのはその通りです。しかし、どのようにして、公平性と客観性を担保して大学の入学者の

選抜にマインドを使うのか、その方法は未整備のように思えます。

高校教育に関しては、未履修の問題に加えて、必修科目数の変遷への対処という問題があります。本学は大阪府教育委員会と連携協定を結んでおり、その幹事校である天王寺高校から、昭和31年度から平成15年度までの必修教科数、科目、単位数の変遷、それに伴う高校での学びの質の変化について情報を提供していただきました。その結果を本学の全学教育シンポジウム等において示したところ、多くの教員が想像していたものとは異なるものであることが明白となり、入学前・後の教育の改善に取り組む必要性が明らかになった次第です。同時に、受験テクニック重視の勉強の弊害についても、若手教授が本学の定期誌である「洛書」に投稿し掲載されています。要旨は以下の通りです。「大学は高校での学習を前提として講義がされる。日本の高校教育は多くの場合、大学入試を最終目標にプログラムが組まれているので、入試に必要な科目はしっかりと勉強、そうでない科目は授業を受ける機会さえない場合がある。また、暗記中心の勉強は分野を超えてつながっている原理を発見することに対して負に働く。学生の中に、理系に限定すれば、理科全教科と数学を学び、異分野融合を楽しんでください。」これは主として新入生に送られたメッセージですが、状況をよ

くご理解いただけたと思います。

先ほど申しましたRU12においても、入試方法をめぐって同様な問題意識を共有していると言っても過言ではありません。入試は本来、各大学の基本理念の実現を視野に、大学や学部のアドミッションポリシーに基づいて、大学・学部が期待する人材を得るための一つの方法ですが、現状の志望大学選びは入試科目の偏差値に負うところが大きく、受験技術トレーニングの経験の有無や量に左右されがちです。そのため、大学が期待する人材像に見合った入学者が確保されているとは必ずしも言えない状況にあると認識しています。とりわけ、RU12が重視する国際展開を担えるグローバル人材の養成に不可欠な、幅広い教養力、巧みな外国語運用力、優れた専門力の三位一体的育成は、高校教育の積み上げを前提として成り立っていますので、高大接続は高校3年大学4年の計7年をかけた連携協働による大学の出口での能力の育成であると考えるのが望ましいように思えます。

入学者選抜方法につきましては、知識のみでなく考える力を問う良問を出題するように、RU12では工夫をしておりますが、一方で過度の合格至上主義による弊害があるのも事実です。例えば、ある大学の先生の発言を紹介しますと、思考力を診る良問を出題しても、今までにはない問題ということでは受験者はほとんどその問題に手をつけな

い、その方が合格点をとるのに効率的だと、どこかで指南されているようだとのことでした。傾向と対策が本来の学び以上に徹底されているのには驚いたとのことでした。

私見ですが、外発的動機に基づく受動的な学びは、自ら課題を発見しチャレンジするという自発的な能動的な学びとは異なりますので、高等学校における幅広い学習や主体的な学び、さらには課外活動等によって培われる能力を測定できるより良い方法と丁寧な入試開発を急がねばと思っています。

以上の現状認識ならびに高校教育の実態を勘案して、本学は新入試の導入について全学で検討を加えてまいりました。そして、本年3月26日に、松本総長が京都大学は全学部で特色入試を平成28年度入試より実施すると発表しました。特色入試では、①高等学校における幅広い学習に裏づけられた総合力と学ぶ力及び高い志を、評価書に加えてエビデンスベースで高校長等に記載していただく「学業活動報告書」および志願者自らがエビデンスに触れながら記述する、入学後の「まなびの設計書」をもとに評価し、さらに、②志望する個々の学部の定めるカリキュラムと教育コースを受けるにふさわしい適合力（学力と意欲、適性）を評価し、これら2つを併せて総合的に判定して合格者を選抜するという設計になっています。自発的な学習に根差した俯瞰的構想力や知識の活用力、クリティカル・シンキン

グ、考え抜く力、デザイン力、志望学部のカリキュラム習得に必要な基礎学力等を要求しますので、面接のノウハウだけでは何ともならないことはご理解いただけたと思います。どちらかと言えば、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー重視の選抜です。

なお、特色入試をはじめとする入試業務及び入学後のカリキュラムの改善に資する入試開発ならびに高大連携を推進するために、昨年11月に入試改革検討本部を設置しました。

特色入試の定員は、現在のところ全学部あわせて1割程度を予定しています。入学試験制度の改革は慎重に進めないと教育現場が混乱しますし、何よりも検証しながら進めることが大事であると考えたからです。東北大学のA0入試も同様に進められたと聞いています。

以上の京都大学特色入試は、いわゆる文科省の大学入学者選抜実施要項では、推薦あるいはA0入試の範疇に分類されるものですが、必要な基礎学力はきちっと担保する学力検査あるいは口頭試問などを実施しますので、上記の要項とは若干異なるものです。ある面では、特色入試はオールラウンドプラス尖った能力を診るもので、厳しい試験だとある高校の先生がおっしゃっていましたが、あえて否定はいたしません。

RU12では、大学入試は3年間の高校教育

と4年間の大学教育をつなぐ連携プレーとしての役割を果たしているので、過度の合格至上主義によって高校での幅広い学習に支障のないよう、そして大学として求められる学びの設計、クリティカル・シンキング、さらにメンタル力も含めて、高校におけるそのような能力の育成を助長する入試へと改善することが大事であり、今後とも協力してやっていこうということになっています。

当入研協平成25年度大会において、昨日来、A0入試関係のシンポを聞かせていただきました。その中で、青森県立高校の校長先生が、東北大学のA0入試結果を見ると、生徒の学力と意欲を大学はきちっと診断する力量を持っており、生徒と高校教員に好感を持たれていると発言され、大変印象的でした。また、複数の会場において、センター試験は高校での学びを反映しており、高大接続として機能しているんじゃないだろうか、特に国公立志望者にはそのようになっているのではないかという意見が多かったように思いました。センター試験は自己判定できることがその大きなファクターであるという指摘も傾聴に値すると思われます。

時間を超過いたしました。ここで終わらせていただきます。（拍手）

司 会（松浦）

どうもありがとうございました。先ほども言いましたように質問は最後のパネルディスカッションでまとめてやらせていただきますので、質問票のほうへお願いいたします。

続きまして、中央大学商学部長の河合先生に、「中央大学商学部における特別入試制度の成果と教育システムのあり方について」お話しいただきます。

河合 久

（中央大学 商学部長）

どうも皆さん、こんにちは。きょう午前中から参加させていただいておりまして、その討論のパネラーと質問者の質疑応答を伺っておりますと、ご参加の皆様が入試問題に関して非常に高い視点から考えておられ、私にとりましては大変勉強になってございます。

本日の私のテーマですが、「中央大学商学部における」として範囲をすごく狭めているということ、それから「特別入試制度」というように推薦入試に限定させていただくこと、そのうえで、その成果と教育システムのあり方、主として高大接続教育と推薦入試との関係について限定的に、事例を紹介するという角度からお話をさせていただきます。

本日の内容は、資料にございますように5点ほど柱を用意していますが、1と2に

つきましては本学の学部の入試全般の体系でございます。

実は、中央大学商学部は今から十二、三年前、2000年に現在の高大接続教育の基盤を形成しております、その当時、文科省の特色GPを取得しております。しかし、10年を経過した今日、その制度が必ずしもうまくいっているというわけではございませんので、そういう観点からうまくいっている事例を一つ紹介し、そこからなぜそれがうまくいっているのか、その要因をお示しして、特別入試と教育システムのあり方についての基本を経験的にお話しさせていただきたいと思います。

最後に今後の展望といたしまして、現在本学部でカリキュラムを改正しておりますので、今後そのカリキュラム改正とこの高大接続をどのように考えていったらいいのかということについて、あくまでも私案と申しますか腹案をご紹介させていただきたいということでございます。

まず、中央大学商学部の入試体系でございますけれども、まず大きな意味で申し上げますと、一般入試と推薦入試に分かれていますけれども、ここで言う一般入試は商学部の独自問題、独自日程、独自会場、独自入試で行うというものです。それからセンター利用入試は全学的にやっておりますが、商学部では併用方式、単独方式、前期、後期に分類しています。

もう一つ、統一入試ですが、これは全学の共通問題、共通の試験会場、共通の日程で実施するというものです。現在、北海道から沖縄まで16の都市において地方会場入試を実施しております。

商学部におきましては、この統一入試での合格者は、商学部の4つの学科に1年次から分属するのではなくて、2年次から分属するという、フリーメジャー・コースというコースに入学させるという仕組みを展開しております。

次に、スライドのブルーで示しておりますのが上記以外の推薦入試を含む特別入試です。

現在、本学部の特別入試は大きく3つのカテゴリーに分けることができます。上の3つですが、受験生の特定分野の能力を評価して合否を判定する入試制度で、英語特別入試、二外特別入試、スポーツ推薦入試があります。このうち英語特別と二外特別は、正式名称は違うのですが、学内ではこのように分類しています。二外の語圏はドイツ語圏、フランス語圏、中国語圏、スペイン語圏で、高等学校卒業等の通常の資格に加え、各語圏の語学運用能力に関する試験、例えばTOEFLであるとかドイツ語検定の一定の水準をクリアしていることが出願条件となります。

選抜につきましては、筆記試験と面接試験で判定します。筆記試験につきましては

国語と外国語、外国語については各語圏に該当する言語 1 科目を受験します。そして面接試験でございますが、日本語と各言語による口頭試問ということになります。

スポーツ推薦入試は、他大学でもやられていると思いますけれども、中央大学では商学部配分に占める学生数は44名です。

それから、次のカテゴリーの海外帰国生等特別入試、外国人留学生入試、社会人入試ですが、これらにつきましては受験生の生活環境の違いによって募集枠をカテゴリー化して入学の機会を与えるという分類ができるかと思います。

そして、資料の下の3つでございます。広くこの3つは学校推薦入試の範疇に入りますけれども、このように分類していますのはそれぞれに特徴があるからです。

一番上の学校推薦入試というのは、いわゆる指定校入試に該当します。それから、附属高校推薦入試というのがあります。中央大学は4つの附属高校を持っておりまして、商学部の1学年の入学定員が1,100名程度ですから、推薦入試がその50%未満です。推薦入学者500人ぐらいのうち、附属高校から入学してくる学生数は毎年二百数十名となります。

それから、高大接続教育プログラム関連ということですが、これは高大接続教育と特別入試を絡めた推薦入試制度になります。

学校推薦入試、附属高校推薦入試、高大

接続関連入試はいずれも学校長の推薦をもって入学を許可するということですから、そういう観点からすると3つは同じ種類ということです。

なお、従来商学部には自己推薦入試というものがありました。中央大学ではいわゆるアドミッションオフィスを設置しておりませんので、厳密にはAO入試は実施しておりません。その中であってAO入試に近い自己推薦入試というのを持っていました。が、午前中からの議論にもありましたように、本来その受験生の個性を生かして他の入試制度で入学してきた学生と積極的に交流を図って大学を活性化していただくとか、あるいはそのご本人の個性を伸ばして成長を期待するといった趣旨というものは、どうも十分生かされていない。そして、やはり全体のGPAで評価した場合に必ずしも十分な成績をとってこないということで、入試段階で学力をはかる評価をしたらどうかという議論になりました。しかし自己推薦入試で学力を評価することは非常に難しいですし、他面においてはコストパフォーマンスもありますので、思い切って2011年度をもって廃止したということです。

次は参考程度でございますけれども、まず英語特別入試に関する志願者と合格者の推移は資料のようであり、大体毎年同様の倍率で合格を与えています。

二外特別につきましては、外国人の受験

も認めているということで、2012年志願者が減りましたが、これはその前年の東日本大震災の影響であると考えてございます。これもまあ、志願者の数に応じて合格者も若干減少傾向ということだと思います。

それから帰国生志願者。これは外国の指定した高等学校、教育課程2年以上経験している者を対象にしておりますけれども、志願者は最近減っていると言えます。

それから外国人留学生。中央大学では全学部合計2万5,000人ぐらいの収容人数のうち大体800人弱の留学生が在籍しておりますけれども、商学部にはその30%ぐらいが入ってまいります。やはり2012年度に志願者は減少しましたが、合格者数は大体安定しているという状況です。ご参考までに。

さて、きょうの本題でございますけれども、商学部の高大接続教育の体系ということで、設置当初のスキームはこういうものです。高大接続教育ですから、高等学校との連携が問題になりますが、高大接続教育を経て入学する合格者に対して、入学準備として秋から春にかけてさまざまなプログラムを提供しています。

プレ・スチューデント・プログラムというのは例年余り変わっていないのですが、課題図書あるいはテーマを与えてそれについてレポートを求め、それをこちらで添削してお返しするというもので、入学までに2回から3回それをやっていただく

ということです。

スタートアップウェブセミナー、スタートアップILセミナーは、いずれもITに関連する事前教育ですけれども、2000年当時ですから、今ほど高校生にIT能力やスキルが備わっていない時代だったために大学に入ってから苦労しないように事前教育を施していたということです。これは現在、形を変えております。

入学していただきますと、通常の正科教育課程に入っていただくわけですが、特にこの高大接続教育を経た学生に対しては、1年生からの基礎演習、ゼミを受講してもらって、さらにその能力を発揮していただくということでございます。

それから、プログラム科目というのが学部内に設置されておりますけれども、これについてはまた後ほど申し上げます。これは通常の科目群、学科にぶら下がる正科教育体系とは異なる、その外側に置かれる科目群でして、これに積極的に入っていただくことを狙いとしております。

こういったことを通じて2000年当時は高校生の特殊能力、あるいは高校時代に培った能力を引き伸ばすという意味でキャリアデザイン、キャリア形成支援を行ってこうと、こういうスキームができたわけでございます。

現在どうなっているか、ちょっと具体的に申し上げますと、2012年度、昨年度は、

大きな意味で高大接続教育を商学部では3つに分けております。

まずは高大連携というものがあります。キャンパスインターンシップ、これは高等学校と協定を結びまして、生徒さんに夏休みに商学部が開設するゼミを受講していただいて、その受講が高等学校の単位になるというプログラムです。それから、ハイヤー・エデュケーション・チャレンジ・プログラムというのは、科目等履修生制度を利用して積極的に商学部の決めた科目を受講していただき、入学してきたらそれを卒業単位に含めるというものですが、これは商学部の入学とは直結しない緩やかな連携ということで、高大連携と称しております。

次に高大接続です。これは特別入試とのリンクでございますが、東京コラボレーション・プログラム、東京アカウンティング・プログラム、岐阜アカウンティング・プログラムが当初設置されておりました。東京コラボレーション・プログラム、東京アカウンティング・プログラムは、商学部と東京都の教育庁との間に包括協定を結びまして、その中で東京都教育庁が指定校を定めるというものです。

東京コラボレーション・プログラムは、商学部に進学を希望している生徒さん、高校3年生を対象にして、大学に来ていただいて、特定課題の論文を書いていただくというものです。その論文の評価によって合

否を決めていくものでして、設置当初から東京都立高校2校が指定校となっていますけれども、受講者は1人のときもあるし、7人ぐらいのときもあるし、全くいなかったときもあるということで、変動の激しいプログラムであると言えます。

東京アカウンティングと岐阜アカウンティング、これは簿記の能力を評価して事前教育を施し入学を許可するというものです。

ここに赤字で示してございますように、キャンパスインターンシッププログラムについては、高校生にとっても私どもにとっても、やってみるとどうも魅力がないということで2013年度廃止いたしました。本年度もうやっていないということでございます。

それから、論文作成を核とする東京コラボレーション・プログラムですけれども、これは昨年度の商学部教授会において休講を決定し、今教育庁と協議をしているということでございます。

簿記会計を中心とする東京アカウンティング・プログラムについても、本年度から廃止を決めております。

今、入試とのリンクにおける高大接続で残っておりますのは、岐阜アカウンティング・プログラムのみだということになります。

それから、もう一つのジャンルですけれども、高大一貫教育、これは附属高校です

から推薦で入学してくるのを前提としておりますけれども、附属4校のうち東京の文京区にあります中央大学高等学校と杉並区にあります杉並高校に対しては、商学部の教員が出張講義を毎週やりまして、それを受講し合格を得た者については優先的に商学部へ入学を許可するというような制度でございます。

さて、高大接続教育のうち、今生き残っております岐阜アカウンティング・プログラムですが、これについては資料に記載のとおりです。まず岐阜県立岐阜商業高校と中央大学商学部との間の協定が結ばれているということ。それから高校3年生の6月までに日本商工会議所主催の簿記検定1級合格者に限定いたしまして、商学部の教員が開講する会計ゼミの受講資格を与えること。会計ゼミは秋に本学商学部の教員4名が週末に出向きまして、合計15コマ、ゼミを実施いたします。そして、参加した大学教員全員の評価と面接に基づきまして、ゼミの合格者に入学を許可するというものでございます。

入学後は商学部設置の簿記関連講義の単位を与えるということですね。入学後に簿記会計の継続学習を強要しませんけれども、志願者の多くは現役の在籍中に公認会計士試験の合格を目指しておりますから、まあ基本的には簿記会計を勉強していると。そして現役中に、あるいは大学院在籍中に公

認会計士試験を合格している者が非常に多いということです。

2011年度は18名、要するに岐阜商で3年生までに1級を取った生徒が18名以上いたということですね。そのうち18名が本学を希望したため、これは学校推薦の一枠でございますから、入学を全員認めるということでございます。本年度はやや減少していますが、これには別な理由がございます。

この岐阜アカウンティング・プログラムのスキームでございますけれども、高大接続教育は学部教育とまず連携しなければいけないという大前提がありまして、会計ゼミを開くというようなことでございますが、これをやりまして、合格者は商学部のPlus 1コースというコースに入学してまいります。商学部にはフレックス・コースとPlus 1コースというのがありますが、Plus 1コースは夜間部を廃止する際に、その定員を残したものでございます。いわばエリート教育を施そうということにつけた名称です。このコースに入りますと、特別なアカウントプログラムという科目群に優先受講権を与えられるということです。資料に示しますように、一生懸命勉強していただきたいということですので、奨学金を付与するというスキームでございます。

これが今現在非常に有効に機能しているということです。なぜかということなんですが、こういうことだと思うんですね。ま

ず高校と大学の緊密な連携が大前提になるということでございます。制度をつくっているだけではだめで、人的に責任者同士が毎年、定期的に連携をとり合っているということが必要だと思います。

それから、高校側の濃密な組織的指導が必要だということでもあります。公立高校の場合、残念ながら転勤があるということで、担当者が何年かに1回かわってしまうことがあります。そうしますとその担当者への引き継ぎの問題だとか、その先生の熱心さ、熱意によって必ずしも十分な組織的指導がなされていないケースがあります。岐阜商の場合はそれが十分にできていたということです。

それから、大学側の教育力向上心、これはどちらかというと学生を育てていくというような熱意とか教員の愛校心だと思いますが、そういうものと、それから人的、金銭的資源を十分に確保して提供してさしあげることが必要だということです。

そして、受講生、入学志願者の高い参加意識が必要ということですね。とにかくこういったプログラムに参加すると、参加するだけで入学が決まってしまうというような、非常にプアな意識で臨むことが多いんですね。こういうことがあるとよくない。岐阜商の場合は志願者の高い参加意識がよく維持されているということですね。

特に上の3つが欠けますと、受講生が不

幸になります。我々スタッフが非常に熱心にこれに取り組んでいかなければならないんだ、ということだと思います。

こういったものが備わりますと、単なる入学手段ではない、継続可能な高大接続教育システムが確立できるだろうと思っております。

今後、私的な展望でございますけれども、商学部本来のカリキュラムポリシーあるいはディプロマポリシーはあるわけですが、加えましてキャリア形成教育を視野に入れた学部内の特別なプログラム科目群を設置して充実していく必要があるだろうということ。それから、グローバル人材育成を視野に入れた特別入試制度と教育システムの構築を目指すべきだと思います。

例えば、現在語学の教育が通常の正科目群の中に、語学科目として位置づけられておりますけれども、そこから語学教育を取っ払ってしまって、グローバル人材育成に関するプログラムのほうにシフトさせる。そのようなことを展開していくことによって、目的がはっきりした教育を施すことができると考えてございます。

ちょっと早口で申し上げましたが、時間が過ぎておりますので、以上とさせていただきます。ご質問は後ほど受けたいと存じます。どうもありがとうございます。（拍手）

司 会（松浦）

河合先生、どうもありがとうございます。
した。

引き続き、東京都立桜修館中等教育学校
校長でいらっしゃる、全国高等学校
校長協会大学入試対策委員長の小林先生に
お話しいたします。

小林 洋司

(全国高等学校長協会 大学入試対策委員
長・東京都立桜修館中等教育学校 校長)

こんにちは。全国高等学校長協会大学
入試対策委員会委員長の小林と申します。
都立桜修館中等教育学校長をしております。
ちょっと早口になるかもしれませんが、よ
ろしく願いいたします。

私ども、アンケート調査をいたしました
が、主題はお手元の資料のとおりです。柱
建てを3つ設けました。①新教育課程にお
ける大学入試について、②多様な入試、特
に推薦入試、AO入試について、③今後の大
学入試制度の在り方についてということ
です。柱建ての「たて」は建物の「建て」の
ほうを使っております。

調査の方法でございます。47都道府県を
単位としてAからCの3グループに分けて、
それぞれ抽出しております。Aグループは
およそですが4分の3ぐらいが四年制大学
に進学する学校、それからBグループは大
学以外に専門学校等へ進学するが、多様な
進学をする生徒が在籍する学校、それぞれ
5校ずつ、それからCグループが専門学科

高校、農業、工業、商業といった学校で
ございます。それぞれの抽出については各都
道府県に任せてあります。

実施した時期でございますが昨年の7月
ですので、もう11カ月前になっております、
それをちょっとお含みおきいただければと
思います。

柱建て1でございます。主には大学入試
センターについて調査をいたしました。ま
ず、理科の科目についてですが、受験で4
つのパターンがあるということでご承知だ
と思います。これについて、まず理科4単
位の科目の出題については、選択でいい、
それから出題範囲をある程度限定してほし
いという意見がそれぞれ4割近くございま
した。校種にはかかわりなくあったとい
うことです。

それから、理科ですが、4単位科目の中
に2単位科目を含める出題についてどうか
ということなのですが、これについてはや
むを得ないだろうという意見が6割以上、
4単位科目の範囲でというのも、1割程度
ございました。どちらとも言えないとい
うのも2割程度ございました。

それから、文系の理科受験タイプですが、
やはり高校側では2単位科目を2つ、いわ
ゆる基礎を付した科目ですが、これを考
えているところが多く、7割5分以上ござ
いました。これも校種にかかわりなくござ
いました。

ただ、理学部、工学部系の理科受験タイプについてはどうかといいますと、これは圧倒的に4単位科目2つというところが多いです。さらに医学部、歯学部、薬学部になりますとこの傾向がさらに強まるというようになっております。

あと、文系生徒が4単位科目を履修できるのかということですが、これは教育課程カリキュラム上できるということで、必修で履修可というのが4割ございます。また、選択履修で可能であるということも4割近くございます。校種では、専門学科を設けている学校ではそれが難しいというところはございました。3割以上ございました。

それから、センター試験で過去の良問を利用した出題はどうだろうかという質問ですが、これは良問ならば積極的に使っているのではないかとということが50%以上。それから、やむを得ないというのも4割以上ございまして、合わせると9割以上となっています。

ただ、国語ですが、国語の教科書に掲載された作品の出題についてはどうかということについては、これは慎重にすべきであるというのがいずれも6割近くございました。この質問の趣旨は、特に国語の中でも作品が非常に限られている古典の出題について、これが教科書で扱っているものをセンター試験で出してどうかという、そういう意味合いがあったのですが、そこまで突

っ込んだ質問ではなかったので、現代文も含めてというふうに現場では考えた向きがあるかもしれません。使ってもいいというのは大体3割前後でした。

地歴公民についての意見は、そこに出ているとおりですので、後でちょっとご覧いただければと思います。

次に、センター試験の後の個別学力試験においてリスニングを実施することについてはどうかということにつきましては、現行どおり大学の判断でよいのではないかとというのが5割以上ございました。リスニングにつきましてはそれほどマイナスの評価はなかったと思います。

それから、センター試験でコミュニケーション能力、二次も含めてですが、現状程度でいいのではないか、意見としては、反映されるべきだけでも難しいのではないか、という意見がございました。

それから、センター試験の後ですが、それぞれの大学で個別に試験を行います、この個別学力試験での発展的な領域についての出題について出題しないほしい、それから範囲については、発表するならば事前に発表して十分にそれに対応できる高校現場として時間的余裕があればいいというのが、それぞれが4割程度ございました。

柱建ての2、多様な入試、特に推薦入試、AO入試についての質問項目です。

AO入試の望ましい開始時期ということで

質問を投げかけました。ここでは意見は分かれています。8月1日以降、それから9月1日以降、10月1日以降ということで、だんだん少しずつ下がっていますが、校種によっても特色がございまして、例えば専門学科を設置している高校では8月1日というのが非常に多く4割近くあります。ところが、同じその校種で11月1日以降というのは極端に1割以下になっています。他のいわゆる普通科と言われる学校については、そこに出ているとおりです。

それから、A0入試の合格発表の時期でございますが、一番多かったのが10月中ということでした。専門学科を有する学校では9月中というところが3割ちょっとありました。これについても、高等学校といっても校種によっては、それぞれやはり違いがあるかと思えます。

それからA0入試のエントリー制度ですが、これについては高校の現場としましては圧倒的にやめるべきであるという意見が多いです。特に、専門学科を有する高校では7割程度がやめるべき、一定の時期以降ならばいいというのが2割程度ございました。

それから、国公立大学の推薦入試、A0入試の定員枠の拡大についてですが、現状程度の定員でいいのではないかとというのが一番多かったです。広げてほしいというものもありまして、これは専門学科高校では多いという状況です。ある程度うなずける結果

かなというようには思っております。

国公立大学の推薦入試、A0入試の枠の上限でございますが、これについてはさまざまな意見ございましたが、統計をとってみると大体6割から7割が定員の2割程度でいいのではないかとということでした。ただ、専門学科高校においては、3割程度に増やしてほしい、先ほど枠を増やしてほしいというのがありましたが、それとの関連で4割近くの学校がそういうことを望んでいるということがありました。

それから、私立大学の推薦入試、A0入試の枠の上限ですが、これについてはさまざまな意見ございますが、3割程度がいいのではないかとという高校現場の考え方がございました。ほかでは4割程度、5割程度、2割程度、という順番で多かったです。これも校種によって違いがありました。

また、推薦入試、A0入試で学力試験を課すことについてはどうか。この学力試験という点でいろいろ議論があるかと思えますが、これについては両方とも課したほうがいい、推薦入試もA0入試も課したほうがいいというのが多かったと言えます。特にいわゆる進学校と言われる高校では7割以上がそういう学校がありました。

それから、推薦入試、A0入試での学力試験の個別がいいのか、それとも統一試験がいいのか、その違いを聞いてみましたが、圧倒的に各大学で行う個別の学力検査でよ

いのではないかという意見が多かったです。統一した学力検査というのは2割前後でした。

それから、私立大学のアラカルト受験方式、いろいろご議論もあるところですが、高校の現場ではアラカルト方式については、あってよいということが大体8割前後ということで圧倒的に多いかなというように思っております。どちらとも言えないというのも1割ございますが、やめるべきというのはそれより少ないものですから、アラカルト受験方式はあってよいのではないかとというのが高校現場の大方の見方であるということが言えます。

それから、最低限受験させるべき科目の数はどうか。これは私立大学についてですが、これにつきましては、現行のとおりでいいと思うんですが、3科目というのが一つの目安ではないかと思われませんが、やはり3科目程度というところが一番多くなっております。ただ、専門学科を有する高校においては、2科目というところも比較的多くありました。

それから、今年度東京大学の推薦入試導入というのが一つ話題になっておりますが、国立大学の推薦入試とかAO入試についてということですが、意見を昨年度の7月の時点でまとめてありますので、ご覧いただければと思います。これにつきましては今年度のアンケートについて、実は本日、別の

場所であらあら素案をまとめているところです。そのところで今年度は東京大学の推薦入試についてアンケートの項目に含めるようにするつもりでおります。

それから、私立大学の推薦入試、AO入試についてでございますが、やはり意見がまとまっております。自由意見もたくさんありますので、今日は特にお示しはしませんけれども、いろいろな意見が出ています。

最後に、柱建て3でございます。今後の大学入試制度の在り方についてです。

いわゆる試験については、集団準拠型か目標準拠型か、これは前からずっと統計をとっていますが、併用型がよいのではないかとというのが大体多いのと、それから集団準拠型というのがその次となっております。目標準拠型が少なくなっております。

それから、個別試験中心がよいか、統一試験中心がよいかということでございますが、これについては併用型がいいということで、現行の試験制度がよいのではないかということになると思います。次に多いのは、それぞれの各大学独自のお考えでやっていただくのがいいという意見です。

それから、大学入試資格試験のような形式のテストの導入はどうかということですが、これについては高校の現場としては必要ないというのが大体50%から60%の間にあります。必要ありというところも2割ちょっとあると言えます。

次に、学力に応じた問題が必要かどうかということですが、現状のまま1種類がよいのではないかというのが8割以上でございいます。学力に応じたものがよいのでは、というのは1割以下でございいます。

それから、学力把握のための統一テストの必要性はどうかということですが、現場としましては必要がないというのが多くなっております。ただ、ここで言えることは、ある程度進学を考えている高校は、そういった学力把握のための統一テストの必要性をある程度感じているところも3割ちょっとあるということです。

次に、異なるタイプの入試か、一般入試を複数回かということですが、一般入試を複数やるということではなくて、異なる入試を行うということのほうがよいというのが現場の意見です。例えばA0入試、推薦入試、そして一般入試と、さまざまな形を実施することで現場としては、多様な生徒をとってもらいたいということで望んでいるというのがこの結果でわかります。

最後ですが、昨年の7月の時点では東大で9月入学、いわゆる秋入学が話題になりましたので、それについて質問してみました。今は下火になっていますが、高校側の意見を言いますと、賛成である、反対であるというのがほぼ拮抗していて、2割程度。それから、どちらとも言えないというものもかなりありまして、まだ現場としては判断

に迷っているということが言えるかと思えます。

まとめますと、柱建て1、これはセンター試験のほうですが、センター試験の理科4単位科目の出題範囲、これは何らかの形で限定をしてほしい。そして、高校のいわゆる学習時期等にも配慮してほしいという意見が多かったです。

それから、過去の良問を使うことについてですが、賛成意見多かったです。ただ国語の教科書に出ている作品の出題については慎重にという意見が多かったです。これについては今年度もう少し突っ込みまして、古典についてどうかというところで質問を投げかけてみたいと思っております。

それから、発展的領域に属する問題の出題については、否定的な意見が多かったということでご留意願いたいと思います。

柱建て2のほうでございいます。A0入試の件ですが、この実施時期についてはやはり高校の現場教育の影響が非常に懸念されますので、できるだけ遅い時期での設定を望むという意見が多かったかと思えます。また、エントリー制度については廃止してもらいたいという意見が圧倒的です。

それから、推薦入試、A0入試ですが、やはり多面的な選抜が可能になるようにしてほしいということで、単にその学力だけではなく、すなわち一般入試だけではなくという意見がありました。それから、学力

試験を課すということも一方では考慮してほしいというのもありました。また、AO入試、一般入試で決まった後、3月の卒業まで生徒のモチベーションを維持するというのは現場としては非常に大変だということは一方向の考え方としてあるわけです。ですから、そこで学力試験ということが出てくるのかと思います。

次に、私立大学のアラカルト入試については、システムが複雑にならないようにして、継続してほしいということでした。

柱建て3でございます。大学入試につきましては統一試験と個別試験、この併用という形でやっていただくのがいいということが現場の意見としては多かったです。

それから大学入学資格試験のような形式のテストの導入については否定的な意見が多かったということです。

先ほども言いましたが、推薦入試、AO入試、それから一般といった異なるタイプの入試を行っていただいて、多様な生徒、多様な高校生の選抜の機会を確保してもらいたい、こういう意見が高校の現場では多かったです。

最後に、大学入試の在り方の検討の際には、高校側の意見も丁寧に聞いていただいて、入試制度の改善に反映していただきたいということでございました。

ご清聴いただきましてありがとうございました。（拍手）

司 会（松浦）

小林先生、どうもありがとうございます。

ご講演は最後になりますけれども、次にベネッセコーポレーション、ベネッセ教育研究開発センター、高等教育研究所、主席研究員の山下先生、お願いいたします。

山下 仁司

（ベネッセ教育総合研究所
高等教育研究室 主席研究員）

皆さん、こんにちは。ベネッセコーポレーションの山下でございます。私、この午後の公開討論会、最後ということで、情報提供として私どもが主に行っております調査等のデータから、「主体的な学びにつながる入学者選抜について」ということで、最初の淡路先生のお話と逆になるんですが、一般論でお話をさせていただきたいなと思います。

多分、一方的なお話はこれで終わりかと思いますが、午後の眠いところちょっと我慢していただいておりますので、おつき合いいただきたいと思います。

私からの発表の前提となりますのは恐らく、主体的な学びにつながる入試というのがなぜ必要なのかというところを共通理解を得ないとちょっとなかなか話が進まないと思いますので、まず一旦整理をさせていただきます。

今、高等教育、大学に求められているの

は社会からの要請で、学びの転換をちゃんとさせろということを要求されているということだと思います。実社会ではみずから問いを立てて課題を発見し解決していく、という事が必要です。そこには必ずしも答えがあるわけではなく、自分で最善解を求めていく、または複数の解答の中から最善ではないかもしれないけれどもベターな解答を求めていくと、そういったような力が必要で、そこで必要とされている能力というのは志向性や態度、そういう部分で主体性、また課題解決能力、それから対人関係能力、グローバルなマインドセットとか語学力、高度な専門知識、こういったものを要求されているということだと思います。

しかしながら今、大学入試選抜では、高等学校以下の教育において、これは大学入試だけではなくて高校入試も一部同じようなことがあるかと思うんですが、おおむね誰かが立てた問いや発見した真理を受動的に理解して、それを記憶することを要求されています。このような受験で必要とされる力とか志向性や態度というのは、忍耐力や粘り強さであったり、大量の情報を記憶してそれを確実に正確に想起するような力であったり、要領のよさであったりといったようなところで、ここにギャップがあるから大きな問題であるというふうに言われているのだと思います。

それがなぜ日本において特に今言われて

いるかという、これはスタンフォード研究所の資料から少し引用させていただきまして、簡単にまとめさせていただいたんですが、縦軸を専門知識、上に行くほど専門知識が高い、横軸をジェネリックスキル、汎用的能力と川嶋先生が訳されましたが、要するに主体的な課題の発見ができる力があるかどうかというふうにしますと、このようなマトリックスになります。

今の大学教育は専門的な教育を通してジェネリックスキルを身につけさせるというお話ですので、この2軸は必ずしも完全に直行するわけではなくて斜行する部分はあるかとは思いますが、基本的に現状の我々のお給料を維持しようと思ったら、この人材をとにかくふやさなきゃいけない。

そのためにはどうしても高等教育が鍵になるということだと思いますし、もしかして入試がその教育を阻んでいるとするならば、入試を変えることによって大学だけでなく高校それ以下の教育と連携をする形で本当に主体的に考えられる人間を育てていくような教育が実現できるのではないかというのが基本的な大きな趣旨だというふうに考えております。

これからお示ししますデータは、現在の大学入試がもたらしめているものを分析したものです。リサーチクエスションとしては、多様な入試より、一般入試のほうが学力の担保にもなるしジェネリックスキルの高い

人がちゃんととれているんじゃないの、という仮説を立てたときに、それをちゃんと証明できるかということでもあります。

まず最初に見ていただきますのは、こちらのデータです。大学入試を経験して得られたことは何ですかという質問です。これは弊社が行った2010年の「社会に必要な能力と高校・大学時代の経験に関する調査」で、大学4年生、それから社会人になって1から3年目のなりたての人たち、そして社会人になって10から13年目のそこそこもうベテランと言われる領域になった人たちに聞いた調査の結果であります。

これ見ていただきましてわかりますように、大学入試を経て身についたものは、確かに受験を通して得られた知識とかが高いですが、「粘り強く考える習慣」が身についた、それから「精神的なタフさ」が養われたといった項目の評価が非常に高く、その右側にある「考え方や思考法が身についた」とか、のいわゆる思考力系の評価がそれほど高くないということが特徴として挙げられるかと思います。

更に、これらが身についたと言っている人たちに対して、特に社会人に対して、では今の仕事にその力は役に立っていますかと聞いたものが、次のこちらのデータです。やはり見ていただきましておわかりいただけますように、結局のところ、粘り強く考える習慣と精神的なタフさといったところ

が非常に高く評価をされておりますが、その右側にあります思考力系の部分が非常に評価が低い。このデータは、それぞれの能力が身についたと言っている人の中で、それが今の仕事に役に立っているかを聞いた質問に対する回答ですから、思考力が身に付いたと考えている割合はかなり低いだろうなということが言えます。

ただ、このデータは社会人や大学4年生が自分の入試を振り返って、その入試で得られたものが何だったのかということを手観的に聞いているものですので、余り客観的なデータではないというふうに考えられるかもしれませんので、もう一つ、間接的ではありますが客観的なデータをお見せしたいと思います。

同じ調査の中で、大学4年生の12月に聞いたものなので、ほぼ大体内定が出そろっている状態だったんですけども、そのときに入試形態別に内定を獲得できているか、できていないかを集計したのがこちらです。大学種類別に旧帝大クラスの国立大学、都市部の国公立、地方の国公立、早慶上智を集計したデータをまず見ていただきます。グラフは上の帯が一般入試の経験がある人、下側の帯グラフが推薦、AOしか経験をしていない人に限りました。こうやって見ていただきますと、この濃いブルーの部分、これが内定ありです。この時点でまだこの薄いブルーの人たちは内定がない人たちです。

もう一目瞭然、ごらんいただきましてわかりますように、実はAO、推薦での合格者のほうが内定獲得率が高かったんです、この時点のデータでは。

一応、P値をここに求めておりますのでごらんいただきまして、N数がそんなに多くないので基本的にP値がそれほど高くない、これ5%水準だとまあ有意差ないというふうに結論になりますが、それでもまあかなり低い確率ではあります。地方国公立では完全にP値が有意差を示しています。

次のページが私立大学でMARCHクラス、関関同立クラス、そしてそれ以外の都市部私立大学、地方私立大学です。MARCHでは完全に有意差ありで、圧倒的にAO推薦で合格して入学している方々のほうが内定率が高いという状態です。こちら、関関同立のほうは有意差はありませんが、見た目、推薦、AOのほうが高いです。しかしながらそれ以外の私立大学様のほうは、都市部でも地方部でもほとんど変わらない。有意差は完全にないといったような状態です。内定がとれているということがジェネリックスキルを身につけている事だと言えるかどうかはわかりませんが、少なくとも企業の採用面接とかを考えますと、コミュニケーション能力とか、論理的に説明できる力とか、そういったものがないと多分内定はできないと思いますので、そういった点からも実は一般入試と、推薦・AOなどの多様な入試

と比較して、どちらがいいかといったところでは、意外にもそれほど差はないか、ないしは多様な入試のほうが実はいい人材がとれている可能性もあることがこのデータからわかるのではないかと思います。

もう少し別の角度から、別のデータを紹介します。ちょっと集計の仕方が違いますので混乱を招きがちですが、同じ調査の中で国公立、それからMARCH、関関同立以上の私立大、それからその他私立という3種類に大きくりに分けさせていただいて、います。質問はこのような内容です。「成績を上げるために自分なりの勉強方法を工夫したことがありますか」という質問で、上の3つの帯が一般入試経験がある人たち、下は一般入試の経験がない、多様な入試しか経験をしていない人たちです。

自分で学習方法をいろいろ工夫するというのは、ある意味ジェネリックスキルの一部、主体性とかそういったものに一部通じるところがあると思います。グラフでは、多少のでこぼこはあるんですけども、トップツーボックスの比率を見ていただきますと、レベルの高い大学に入学している人たちは総じて同じように高い。一般の私立の大学さんの場合はそれほど高くないということで、このようなジェネリックスキル系のものは、経験した入試の形態によって身についたものではなくて、どちらかというとその前提となる学力の高さの要因を説

明するような、そういうファクターではないかというようなことを考えております。

同じく、自分で学習する時間や場所を工夫してみた経験があるか、こういったことも計画性とか主体性につながる話ですが、これも同じような傾向で、基本的に入試形態での差ではなくて、学力の高さの要因に見えるところがあります。

それから、これは別の調査で、今年私どもがやらせていただいた、「高校生の大学の選択要因に関する調査」なのですが、「リスクを冒してでも常に高い目標にチャレンジする仕事をしてみたい」という、質問に対して、進学した大学種別でクロスさせて、入試形態別にどのような回答をしているかを示したグラフです。

まず、旧帝大クラスだと少しだけ推薦・A0入試入学者のほうが高くなっています。ただしP値で見ると有意差はありません。次に地方部の国公立大学になりますと、「とてもそう思う」比率が有意に高く、推薦・A0の方がチャレンジ精神を持っている子が入っている。一方、都市部国公立の場合は、一般入試で合格している人たちのほうがその傾向が強いというような形で、真逆の傾向にあります。

次に、こちらが私立大学の結果なんですけれども、有意差はありませんが、チャレンジ精神という点で早慶上智とかMARCH、関関同立クラス以上のところが若干そうい

った傾向が強くなっています。要するに、意欲面で考えても一般入試と推薦入試でほとんど違いはない。推薦入試は、学力や意欲の面で問題があるとよく言われますが、個別の大学のレベルや実情から見ていかないと物事は解決しないといったようなことがわかります。

この第一部のまとめとしまして、私のほうからは、次のように総括させていただきたいなと思います。

現在の大学入試において、一般入試は入学者の指導要領的な学力の担保には確かになっているんですが、ジェネリックスキルの養成には実は余り役立っていないと思われます。受験勉強を経験することで、教科知識だけでなく汎用的能力も高まるという考えもありますが、みずから勉強の仕方を工夫するといった自律性や主体性などは、一般入試に向けた学習の結果によるものではなくて、高い成績の原因であるというふうに考えられます。

一般入試で身につくと社会人が感じているものは、粘り強さであるとかタフさとか、それから自己管理力というようなことで、それはそれで重要なんですけども、今求められている自ら課題を発見し解決をしていくといった能力は、一般入試でそういった能力を持った人たちをスクリーニングきちんとできているかという、必ずしもそうではないと思います。

これまで見てきましたように、国公立大学や有名な私立大学では、推薦・A0などの多様な入試で入学した人たちのほうがむしろ内定獲得率が高いということで、多様な入試というものが実は本当によい人たちを獲得できる一つのツールとなり得るのではないか、と思います。ですので、私の個人的な感想としては、こういったものをきちんと積極的に活用していくべきであろうと思います。

A0や推薦入試で意欲が高く、主体的な学びに向かう潜在力がある人たちがとれるとすれば、ある程度一定の定員割合を割いてとっていくということは意味があることではないのかなと思いますし、入試を通して、「主体的な学びができる人間を欲しいんですよ」という事を発信する事は、高校以下の教育への重要なメッセージになるだろうと思います。

ただし、そのためには午前中から出ておりますように、例えば多様な入試には手間がかかって大量には対応できないとか、面接など対応する教職員の考え方によってもばらつきがかなり生じてしまうとかいった運用面の課題があります。また、学力面を何らかの形で担保しなければ入学者の学力低下につながるんじゃないとか、新しい考え方である課題解決能力などを見きわめることはなかなか難しいといった、能力測定面の課題もあるのではないかと思います。

全ての課題を解決できる答えを我々が持ち合わせているわけではありませんが、次に少しか我々が現在進めております研究をご紹介しますので、と思います。

志願者が大量に来たときに全員を対象に丁寧な入試ができるかという、なかなか難しい。しかし、一般的ないわゆる教科知識のテストで学力による選抜を行うと、一般入試による選抜と同じである。そこで、一次選抜として「課題解決能力」的なものを、マークセンスみたいな簡単にできるテストで1回行って対象者を絞り、そこから面接や論文などの丁寧な入試をする形で今挙げられたような問題を解決するような方法もあると思っています。そこで、我々ベネッセとしてはこの青い部分、一次選抜に相当するところの試験問題、次に面接や論文などによる試験など、教科知識によらず、課題解決能力や批判的思考力を問うような問題のあり方、採点基準のあり方を研究しております。

今、お見せしておりますのは、研究の中で公にしてもいいよと了解を得た問題の一つです。正解率は下に書いておりますように84.5%と非常に易しい問題として、識別力もそれほど高くないので、もう外にも出してもいいですよという了解を得ている問題なんです、見ておわかりのように、要するに特別な知識は必要はない。しかしながら、ちゃんと考えて、論理性を持って自

分で答えを出していく力が必要です。もう一つのポイントは、大学で行われる科学的研究というものは、仮説を立て、それを証明するために対立仮説が成立しないことを明らかにすることで命題を証明するなど、手順をきちんとできるかどうかをできるだけ平易な形で問えるようなテスト問題をつくっております。こういったものでスクリーニングをすることはできるのではないかとこのことを研究している成果の一部が次のグラフです。

こちらの図は、今見ていただきましたような客観式のテストのスコアを横軸の素点として設定したものです。縦軸には、論述式で課題解決能力や批判的思考力を問うような問題の採点評価を示しています。2つのスコアの相関をとったものがこの散布図なんですけれども、このプロット状態を見ますと、わかりますように、左上には全然人がいない。右下には人がいる。これは何を意味するかというと、マーク式のテストでは低いのに、論述で高い人はいないことを意味します。要するに、マーク方式のテストを一次スクリーニングで課しても、左上の論述力のある人をはじく危険性はないということを意味しているということです。論理的、批判的思考力を見る客観式のテストで第一次スクリーニングをやって、そこから丁寧な選抜を行うことは技術的に可能なのではないかとこのことを今、研究

をしております。

こういったような形の大学入試は既に存在しています。こちらは明治大学の情報コミュニケーション学部の昨年度のホームページから転載させていただいているものなんですが、知識によらない批判的思考力を問うような入試問題を出す大学様がぼつぼつとあらわれてきております。残念なことに、この情報コミュニケーション学部のこの新傾向入試を敬遠される高校生の方が多くて、同じ情報コミュニケーション学部の一般入試でA方式の普通の入試科目を課すほうは17倍ぐらいの倍率があったんですが、こちらのB方式のほうは4倍の倍率の結果に今年度はなっております。逆に申しますと、ちゃんとした探究までの力を高校生に力つけてあげて、こういう入試をやっている大学を狙えば今、合格しやすいといったようなことも言えるかもしれないということでもあります。

私の発表はこれで終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

司 会（松浦）

山下先生、どうもありがとうございました。

先生方のご協力で大体予定どおり進んでおります。5分ぐらいおくれて、この後15時55分からパネルディスカッションのセッションを始めさせていただきますので、15

時55分に間に合うようにお戻りください。

それから、質問用紙をこれから回収いたしますので、この休みの時間の間にどうぞよろしくお願いいたします。

それでは休憩といたします。

(休 憩)

司 会 (松浦)

それでは、ディスカッションのセッションを始めさせていただきます。

それで、今寄せていただいた質問用紙を見せていただいているんですけども、なかなか難しいなというのが正直なところです。

何かというと、やはり、そもそもこういう議論、どういう議論をしたらいいのかとか、きょう扱ったようなことが意味があるのかどうかという、そういうところは、なかなか議論しても難しいところで、そういう書いていただいた方に直接ご意見伺ったほうがいいのかなと思います。

ご質問で一番多かったのは、実は小林先生の発表に対してで、データをいろいろ見せていただいたんで、その具体的なことに関する質問がかなりあります。ところが、それも個々の具体的なことであって、ちょっとディスカッションするようなことではないんですけども、これももちろん取り上げて、できる範囲、時間の範囲でお答えいただければと思っています。

それで、ちょっと整理して考えたいこと

もあって、実は本日、東京大学の副学長で入試担当でいらっしゃる福田先生が朝からいらしていただいて、実は私、植物科学の同じ分野で30年来よく存じているものですから、ちょっと東京大学の推薦入試なりその背景なり一言コメントをいただけませんかといったら、いただけるということなので、先にそれをお願いできますでしょうか。

福田 裕穂

(東京大学 副学長)

東京大学の入試改革担当副学長の福田です。松浦先生とは30年来の研究者仲間ですが、まさか入研協の場で東京大学の入試改革を紹介せよとのご依頼を受けようとは思っておりませんでした。

本年3月15日に、東京大学は平成28年度入試から推薦入試を導入するとの記者会見を行いました。この推薦入試について、高校関係者をはじめ多くの方々から関心を寄せいただいていますので、東京大学がどのようなことを考えているのかを少しだけ説明させていただきます。

先程淡路先生から、京都大学では平成28年度入試から特色入試を開始されるとのお話をいただきました。東京大学においても、京都大学と同じ平成28年度入試から、推薦入試を導入することを目指しています。京都大学は特色入試を導入されるわけですが、東京大学では、入学者選抜の形式は一般入試のほか、主に推薦入試かA0入試の2

つがあるということで、A0入試ではなく推薦入試の形式で入試を行うことを決定しました。

定員は100名、現在、後期日程試験を100名で実施しており、これを推薦入試に移行します。

推薦入試導入の狙いですが、東京大学でも入試に関する様々な追跡調査を行っていますが、近年、入学してくる学生と、それから我々が教えたことの中に、少しずつミスマッチが目立つようになってきています。というのは、東京大学では「東京大学憲章」を定め、東京大学が育成し、世界に送り出したい人材を「世界的視野をもった市民的エリート」という少々分かりにくい言葉で表現しているのですけれども、ある種のエリートだけという意味ではなく、社会の中にしっかりと溶け込み、リーダーになれるような人材を育てたいという、そのような意図だと思っていただければよいのですが、そのような市民的エリートになってもらうためには、学生には自主的に様々なことを取り組んでももらわないと多分戦いにならない。

ところが、大学入学後、いつまでたっても誰かに教えてもらうことを期待してしまう学生が増えてきた。この学生たちは東京大学の入試を突破していますから、基本的な学力は相当あるはずです。しかし、頭の使い方が少しだけまだ別の方向に向いてい

ない。もちろん、このような学生に対しても、我々教員は適切な指導をしています、十分に伸ばし切れないうちに大学を卒業してしまう、このようなことになりつつあります。

我々は、これまで入試の問題はかなり良い問題を作ってきたという自負はありますが、やはりあくまでペーパー試験であるということの限界はあって、決められた時間内に、既に設定された課題をどうやって適切に解決するかという能力を測ることがベースになっています。今世界で求められているのはそのような能力だけではなく、自分で課題を創りだす能力なのではないかと思っています。本日ベネッセからの報告にもあったとおり、現在のペーパー試験のみの入試では、課題を創りだす能力まで見極めることは難しいと考えています。

ですから、もう少し違うタイプの入試を実施して、課題を自ら創りだす能力も重要なのだというメッセージを社会にしっかりと発信することが、東京大学の1つの使命なのではないかと考えるようになりました。

東京大学は、これまで入試に関しては、良問を作るというメッセージしか発信してこなかったわけですが、それ以外に、やはり高校時代までに問題を自分で考えるというような、主体的に考える能力、そのような能力を磨いてくることがその学生が将来伸びる上で非常に重要なのだというメッセ

ージを何とかして伝えたいと思っています。

これを具体的な入試制度に落とし込むのは相当難しいことは十分承知しています。しかし、そのような困難はあるにせよ、とにかく東京大学として、平成28年度入試までにそれができるような体制をつくりたいと思っています。

入試改革については、これまで3年ほどかけて議論を進めてきていますが、具体的な制度として設計するのはもう少しだけ時間をかけて、できれば今年の秋から今度の春ぐらいまでに具体的な実施方法等を発表したいと思っています。それまでには、高校の先生方の色々なご意見を聞かないと最終的な制度はできないと思っていますし、高校の先生方だけではなく、これまで推薦入試やAO入試に携わってこられた大学の先生方のご意見も参考にしながら、具体的な入試制度をつくっていきたいと思っていますので、今後ともぜひご協力をお願いしたいと思います。

司 会（松浦）

どうも福田先生、突然のお願いにもかかわらず、わかりやすく教えていただいてどうもありがとうございました。

それと関係したところから入りたいと思うんですけども、淡路先生に一つ質問があるのは、特色入試は具体的にどのような方略をお考えでしょうかという、質問はそういうものなんですけれども、そういう狭

いところだけではなくて。今福田先生がお話ししたことと、先生がお話ししてくださったこと、どういうところはかなり似ていて、どういうところは京大で考えていることとは違うのかとか、そういったことを含めて、それが今この質問の具体的な特色入試をどう考えるかにかかわってくるかと思うんですけども、ちょっとお話しいただければ。

淡 路

先ほど話しましたように、特色入試導入の目的は、東京大学の福田先生がおっしゃったことと基本的に同じです。子供さんの例で言いますと、自分で遊び道具のつくれるような子供さんと言ったほうがわかりやすいかもしれません。次々と目新しい遊び道具をもらっては遊ぶというより、自分でつくって遊ぶ人です。

世界の研究最前線では、私は構想力と言いましたが、福田先生がおっしゃった問題をつくれる能力が大変重要です。研究はほとんどそこで価値が決まると言っても良いかもしれません。その意味では、入試改革は、オーバーな言い方をすれば、日本人の価値の変革につながるようなものだと思います。

先ほど述べましたが、今般の特色入試では1点を競う入試というより、①では高校でのGPA等を、②では学部・学科のカリキュラムを学ぶにふさわしい能力を具備して

いるかを、あわせて丁寧に判断して選抜するものです。このような場合、アドミッションポリシーだけでは中途半端なメッセージになるくらいがあるので、もう少し突っ込んで、志望学部や学科のカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーへの適合力という視点を明記しました。それに見合った募集要項、実施方法について現在鋭意検討しており、今年度中に募集要項を公表する予定です。今年度から実施されている新学習指導要領下で学ぶ高校1年生が2年後に入試を受けるにあたり、教育現場で混乱なきよう、スムーズに導入する責務が大学にあるという考えによります。

司 会（松浦）

はい。どうもありがとうございます。

今後どういう入試をやってくるかということに関しては、まだもうちょっと検討が必要だというのは、かなり認識されていると思います。それは今までAO入試、推薦入試を余りやってこなかったところも、今までやってきたところも、そのままではいけないという認識のところが多いのではないかと考えております。

ただ、その、なぜそこが必要なのか。今、福田先生とか淡路先生もお話がありまして、私の最初のプレゼン、ちょっとした趣旨説明のところでもそういうことを問題にしたわけです。つまり、今、一般入試で入ってくる大学生が、大学の学習についていけな

い、特に主体的な学びみたいところ、教えてほしいというような学生がかなり急が増えてきたという、そういうところを、いろんな方法でやらなくちゃいけないのですけれども、それに対して高校の先生でかなり、それは大学に入ってから大学での教育力の向上でやったらいいんじゃないか、入試の問題ではないんじゃないかという、そういうかなり強いご意見をいただいております。

受験技術トレーニングへの依存が高まると言われても、それは少し意味がわからない。大学教育に対応できない学生が増加と、どういうふうにそれが関係しているというのか、それは大学教育が不十分なだけで、そのような学生でもそれをどう大学が教育するかをちゃんとやっていくべきであって、入試を今考えているような推薦とかAOとかをいじることじゃないのではないかという、基本的な趣旨はそういうふうにお読みいたします。

ちょっとこれは場合によって私もコメントがあるかもわからないのですけれども、今の問題、つまり大学教育に対応できない学生が増えているとはいっても、それは大学教育で対応すべき問題であって、入試の問題じゃないんじゃないか。高校は一生懸命、決められた学習指導要領、大学側が出題している試験問題にちゃんとできるような教育をしているのだから、それで何でい

けないのという趣旨かと思えますけれども、ちょっと全員の先生方に、これ結構大きな問題だと思いますので少し長くなっても結構だと思うんですが、淡路先生からいかがでしょうか。

淡 路

おっしゃることはわかりますが、これまでの入試では、高校教育課程の時代的变化とそれに伴う実態、そこで培われる能力の諸側面が十分に測定できていたか、また時代とともに重要性が増した能力を測定できているかと言われれば十分ではないので、改善しようというものです。これは今般の文科省が謳う入試改革の背景でもあると思われます。

現状の学力検査による入試を私たちは否定してはおりません。そこにプラスアルファの能力測定を加えた特色入試をやらせていただき、良い面が高校教育に反映して大学教育にも好影響を与えるという、positive feedback を期待しています。

繰り返しますが、現状の個別学力試験をなくすわけじゃございません。現状の入試では測定が難しい潜在力や問題作成能力なども測定したいと思っています。やりながら結果を検証し、改善して完成度を高めていきたいと考えています。

司 会（松浦）

淡路先生、もうちょっとだけ聞かせてください。

それで、間違ったら申しわけないんですけども、10年前だと京都大学さんとか東京大学さんは、まあ普通の入試だけでもいいとお考えだったんじゃないかなと推察するんですけども、そういうことではないですか。

淡 路

どう言ったらよいのでしょうか。10年ほど前から少なくとも複数学部でこのような問題意識はございました。今回の特色入試は、受験技術への依存度の高まりという現況、大学での学びへの動機づけ等を考え、プラスアルファの要素を入れるのが良いのではないかと全学部で考えた結果だと理解しています。

司 会（松浦）

どうもありがとうございました。では河合先生、お願いいたします。

河 合

はい。今のご質問は、非常に理念的な観点を問われているように思うのですが、私の立場からいたしますと、やはり私どもの教学の使命というのは、受け入れた学生にどのような付加価値をつけていくのかということが一義的であろうかと考えてございます。

したがって、むしろ日ごろ私の立場からすれば、入試問題についてはもう少しプラクティカルな視点を持って臨むべきではないかなと思っております。

もちろん東京大学や京都大学、あるいは中教審等で非常に高い視点から入試問題を論じ、そしてそれが一定のガイドラインとなったり制度に反映されるとすれば、私たち私立大学で生きる者もそれを枠組みとしながらいろいろな学内における制度を立案、運用していかなければならないんだと思うんですね。

学生をどのような視点から育てるかということは、その大学のある意味、生きざまが反映されるということだと思いますので、その生きざまの中で何ができるのか、こういったことについて日ごろ私たちは努力をしているということだと思うんです。

したがって、きょう私の報告の中で、最後に例えばキャリア形成教育とかグローバル人材育成に絡めた、特別に新しい試みに取り組んでいきたいと申し上げましたけれども、実はそれはカリキュラムが先行しなければいけないと思うからなんです。カリキュラムで既存の大学生にどのように付加価値をつけていくのかといったことを真剣にまず考えて、その後でそれと結びつくような入試制度あるいは高大接続のあり方、こういったものを考えていけばいいと考えています。

少なくとも私が任期中はそのような視点に立っておりますので、例えば志願者を増やしたいからということでカンフル的に何か入試制度を変更するという方針はとらな

いようにしております。

先ほどのフロアからのご質問の中で、私のご質問の把握の限りで言えば、やはりカリキュラム先行で、大学教育でそういったことはやっていけばいいんだというふうに思いますね。

例えば、問題解決能力ということになれば今話題のアクティブラーニングに基づく教育をどのように展開していくのか、プロジェクトベースの教育をどのようにしていくのか。これは必ずしも入試と直結しないんですね。そういったことができる潜在力を持っている人をあえてとらなくても、そのような角度から教育を施し、そういった人物に育て上げていく、これがやはり私もからすれば教育責任の一環であると思っています。

私、入試そのものについては明るいほうではないので、教学的あるいは教育課程の面からの回答になってやや偏っているかもしれませんが、そのような感想を持ってございます。

司 会（松浦）

どうもありがとうございます。各大学、大学の方が多いわけですが、入った学生を最大限育てようという努力はしていて、それに加えて入試のところがどうにかできないかと思っている方と、それはそのままでいいのとあるんだと思います。

ただ、高校側から見るといかがでしょう、

主体的な学びとかそういう点に関して、大学の今までの入試がちょっとネガティブに作用している部分があるのか、まあ必ずしもそうじゃないのかって、小林先生、少しお聞かせください。

小 林

はい。大学入試の在り方、ありようというのは、一つやはり高校側から考えていかなければいけないかなと思うのですが、ただ今やはり問われているのは、大学の教育だけではなくて、高校教育はどうあるべきかということが、やはり問われるべきなのだろうと思います。

今、中教審でも高校部会で話題になっている高校の質の保証とありますが、そういう意味でやはり大学入試に、今までの大学入試に沿った形で知識注入型というか、そういう授業のありようというのは、やはり改めていく必要があるのではないかというのは、高校現場のほうとしても考えているところでございます。

例えば、チョーク 1 本持っていれば授業できるというのはもう過去のことになってまして、例えば東京都の取り組みですと単にその知識注入型ではなくて、さまざまな作業などを取り入れた授業を展開するようになってきています。私ども管理職も先生方の授業を授業観察という形で見るわけですが、その中には例えばディベートを取り入れたり、それからグループ学習を取り入

れたり、そしてそのグループ学習で子供たちが一つの課題を持って、その課題について話し合って、そのグループについても 2 人 1 組のものもありますし、例えば英語ですと会話調で 2 人 1 組、それからほかの、英語も含めてですけれどもグループ学習ですと 4 人 1 組とか 6 人 1 組とかいろいろなものがありまして、それぞれのグループで数分間で話し合ったことを、その後、幾つかのグループが発表をする、コミュニケーション能力というのでしょうかね、そういうその能力を養ったり、そしてその発表した結果から今度は教員がピックアップして、次の授業の展開につなげていくと、そういったさまざまな取り組みの方法が今展開されているところです。

そういう高校でのいろいろな取り組みについて、大学入試でどういように反映していただくのかとなりますと、なかなか今のところまだそこまでは、というところが多いかと思います。例えば本校ですと論理学習をやって、中高一貫校ですと中学 1 年から学校設定教科科目として国語で論理を学ぶ、数学で論理を学ぶという授業で、それぞれ文章を読んだり、それから人の話を聞いたり、そしてそれを筋道を立てて解釈をし、そしてそれを第三者にわかりやすく説明をする。そういう能力を磨こうということですと取り組んでいます。

また、それと関連してレポートとか小論

文をつくり、5年生つまり高校2年生で研究論文をつくることをします。そのテーマ設定も自分で選んで、指導の先生はいますけれども自分で取材をしたり資料を検索していく、そしてまとめていくと、そういうことをやっております。

司 会（松浦）

小林先生、もうちょっとお話聞かせてください、今ので。それで、なぜかという小林先生はきょうは全国高等学校長協会の役職の立場からお話しいたいて、今ちょっとだけ桜修館中等教育学校の校長先生としての立場で、いわゆるきょうここで問題にしていること、断片的な知識じゃない学習をやられている。

ただ、先生のところ、桜修館中等教育学校はその上で大学入学実績も出されていますよね。そういう観点からすると、今の普通の一般入試はその形で、入試はそれでもちゃんとした入試対策学習じゃない、先生のところでうまくやられているところが、実は私はその学校の10年前校長していたものですから、そのときはまだ6年制じゃなくて、そのつくり込みの時期だったんですけども、今の大学入試はあってもちゃんとしたそうじゃない、ジェネリックスkillなり主体的な学びなりができている生徒さんがかなり多いような教育をなされている。

そのうえで今の入試、普通の入試も突破されているという、その現状からすると、

別に入試は変えなくてもいいんだよ、高校教育を変えて大学教育を変えていけば問題ないんだよという考え方もあり得ますし、とはいってもより多くの高校がより入試対策学習じゃないほうにシフトするためには、大学入試も一般入試をも変わってほしいなり、推薦をも維持してほしい、場合によっては拡大してほしいという、そういうところが重要なポイントになるかと思うんですけども。

場合によっては桜修館でやっておられる立場から、少しお話し伺えるといいかなと思うんですが。

小 林

はい。本校でやっているようなことは、大なり小なり他の学校でももう取り組まれているのかなというように思っております。そういった子供たちの多面的な能力というのは推しはかる、そういう多様な入試というのはやはり今後とも考えていく必要があるのかなというようには高校のほうとしては考えております。

それから、従来の方の入試においても、そういった高校側の毎日毎日の授業のやり方を工夫、改善することによって十分対応できるのではないだろうかというように、私は考えております。

司 会（松浦）

どうもありがとうございました。

次に山下先生、次に少し違う観点からか

もしれないんですけども、ベネッセ様は大学での主体的な学びという、そういうキーワードを使っている、例えば河合塾様もアクティブラーニング、それも大学でのアクティブラーニングですけども、内容はすごく似ているんですよね。だから、ちょっと、片や受験のほうのサポートをなさりつつ、主体的とかアクティブというのを強調されているという、それと今の先生方のお話を踏まえて、ちょっとコメントなりお話いかがでしょうか。

山 下

結構難しいハードルを課されて、いきなりちょっと戸惑っているんですが。

最初の、多分高校の先生だと思うんですが、学びの転換というのは大学でやればいいんじゃないかというお話についてなんですけれども、これはちょっと私はもう現在矛盾している話だろうなと思っておりまして。

なぜならば、最初に淡路先生がお示しになられた資料の中にもあったと思うんですけども、現在の指導要領の中では、最終的には探究のレベルまで考える力を養うというところまで文科省は指導要領に目標を設定しているはずなんです。その一つが例えば言語力。言語力というのは単に言葉をしゃべる力ではなくて、論理的に相手に説明ができる力であるとか、そういった力を養成を求められていると。要するに高校も、そ

の下の中も、そういったことを今、もう教育目標とされているはずなので、それをなぜ大学は入試で見ないんだというふうに、ある意味ちょっとこうクレームにされるような話に本来はならなきゃおかしいんだろうなというふうに私は思っております。

で、今その流れで申しておりますが、基本的に私どもは一つは大学に合格する可能性とかそういったものを高校の生徒さんとかにご提供するような仕事をさせていただいておりますけれども、本来的にやはり学びとは何なのかといったところを高等学校現場そして現在は大学の現場とも一緒になって考えて、我々ができる支援をできるだけやっていこうと、そういう立場でやらせていただいております。我々が言うような話ではないんですが、やはり今、日本の社会で求められている人材輩出を目指そうとすると、どう考えても高校現場だけにご支援をしていたのでは、もう立ち行かないんじゃないかというのが基本的な我々の考え方です。

社会が求める力を大学で、そして大学はその社会が求める力を高校と一緒に、ないしは中学高校とずっとK-12プラス4を通じて輩出をしていく事が、まあちょっと非常に抽象的ですけども、できる状態を我々はご支援をしたいという考えです。例えば、高校まではいわゆる知識注入型の教育をされてきても、大学では初年次の段

階で、「大学での学び」「主体的な学び」ができるように学びの転換をしていかないといけない。そういったお手伝いのできないものかということで、もう3年、4年目に入りましたが、中教審の大学分科会の座長の安西先生とともに、フューチャースキルズプロジェクトという産学連携講座の実践研究を5つの大学と6つの企業協働でやらせていただいたりしております。

そんなような形で、我々としては考えているということで、よろしいでしょうか。

司 会（松浦）

ありがとうございます。淡路先生から少しコメントを。

淡 路

実は、ある都道府県の教育委員会に設置された探求型高校群の評価委員会の委員長をしており、学校現場を視察しています。

皆さんご存じのように、SSH指定校制度は、高校での探求力育成を支援する国の事業で、アクティブラーニングの実践だと言えます。その現場の先生からは、探求型学習を進める上で、生徒の進路保証をきちっと図ることは重要であり、大学入試とうまく接続が図れないとボトルネックとなるので、この点を考慮した入学試験をやってくれませんかという声を多く聞きます。

本学は自学自習を学是としていることもあり、答えのある勉強からの学びの質の転換を促すために、入学後の初年次教育に

おいて、10名程度の少人数セミナーである「ポケットゼミ」を開講しており、学生に研究のワンサイクルを体験してもらいます。例えば法学に関心のある学生には、法学部生に限らず全学部から希望者を募り、裁判所まで出向いて裁判官の話を聞くなど調査・分析し、発表と質疑応答、レポート作成までの課題解決型学習を半年間かけて実施しています。入学試験で高校でのアクティブラーニングに対応する要素を取り込めないかということも実は背景にはあります。

司 会（松浦）

どうもありがとうございます。どうぞ、先生。

河 合

どうも申しわけありません。先ほどの私の話で誤解が生じるといけませんので、少し補足させていただきますと、私は教育責任の立場からして、やはり大学生教育を充実させるためのカリキュラムを真剣に考えていくのが先で、その次に入試形態を考え、さらに高大接続を考えていくのが筋だろうというお話をしたわけで、多様な評価であるとか高等学校における探求型ということを否定をしているわけではございません。

今、高校生がそういった教育を経て入ってくるということであればなおさら、大学においても受け入れた高校生にきちんと指導を施すことができるような体制を組むこ

とが大事だというふうにはここは考えてございます。

ベネッセさんがきょうたまたま一緒なので申し上げますけれども、中央大学は全学を挙げて1年生それから2年生に、経年的にどのような学力の推移があるかということで、基礎学力調査をお願いして、それを参考にしている。我々執行部がそれを見ているだけでは意味がないので、ベネッセさんの担当の方に各学部教授会にお出ましいただきまして、全教員にそのデータを説明していただくというようなこともやっております。

また、商学部では往々にして大規模教室、大規模授業の方が多いものですから、これをアクティブラーニングとかプロジェクトベースに転換する。これはゼミ以外にですね。そういった転換をしていくために、先ほどお話に出たフューチャースキルズプログラムというのが幾つかの大学と中教審をベースに研究されて実践されておりますけれども、そのモデルを商学部に取り入れさせていただきまして、来年度から1年生のキャリア入門、それからフューチャースキルズプログラムの模倣版を2年生に。それから、さらにその先に国内及び国外のインターンシッププログラムへと結びつけるようなスキームでのカリキュラムを展開しようということで、先月の教授会でそれを決定いたしました。

そうなりますと、どういう教員がそれにふさわしいのかということになってまいります。我々、研究者出身の教員ではなかなかそれが難しいので、本学の制度であれば特任教員として任期つきでそういった教育の実績をお持ちの方を招聘いたしまして展開していく。この人事についてきょう、今、会議をしているところですが、私はちょっとそれをサボってこちらに来ておりますが、よい結果が出ると思っております。

私は学部教育が形も質も変えていくと、これは教員組織の伝統的な文化を変えていくことにつながっていきますので、大変時間がかかることだと思うんですね。形はできても中身はないということはあってはならないので、そういうことを進めていき、入試はその後ですよ、ということを申し上げたということでございます。すみません。

司 会（松浦）

どうもありがとうございます。

ちょっとここで、この問題に関してもう少しフロアから質問やご意見があったらお尋ねしたいと思うんですけれども、論点を少し整理したほうがいいので1点に絞りたいと思うんですけれども。

今、淡路先生も言っておられたように、高校レベルからアクティブラーニングとか課題研究とか、やはりそういうことをしていた生徒が大学に入れば、より伸びるようなことができるんじゃないか。もちろん、

そういうことを高校でやってきた生徒は、一般入試でも受かりやすいんですけども、ただ、そういうのをやってきたけれども一般入試で受からない人もいるから、そういう人はそういう人用の入試をしてもいいんじゃないか。つまり今までの……ちょっと僕が違っている、ごめんなさい。

淡 路

一般入試では合格しないから特色入試を導入するというものではありません。

司 会（松浦）

はい、ちょっと言い方がまずいですが、そういうフラクションにも対応した入試も従来型の入試に加えてプラスアルファでやっていくという、そういうことでよろしいですか。ちょっとまだ違う。

淡 路

違います。これ以上のコメントは差し控えます。

司 会（松浦）

皆さんからもしご質問やご意見を伺いたいとすれば、もしそうだとすると、今までの一般入試で十分じゃないか、むしろAOや推薦だと高校側なり大学なりが問題点も、けさもあったようにあるわけで、必ずしもAO、推薦のほうに行かなくてもいいんじゃないかというような視点からのご意見もほかにもいただいておりますので、ちょっとご紹介していませんけれどもあるかと思うので、もしそういう観点のご質問なりご意

見があったら、いかがでしょう、2つ3つお聞きできたらと思うんですけども。

特によろしいでしょうか。どうぞ。

質問者A

すみません。高校の教師をやっています質問者Aと申します。

先ほどからお話があったんですけども、ちょっと問題点がはっきりしなくて、私はその受験対策ばかりを助長しないという言葉と、あと主体的に学ばない大学生、これが問題になっているのかなというふうに感じているんですけども。そういう面では、例えば、高校でも先ほど校長先生がおっしゃったように、主体的な学びをするように指導していますし、そういった面では先ほどからあるとおりでと思います。大学でも先ほどから中央大学の先生がおっしゃるとおり、生徒、学生を伸ばそうとして指導しているという話がありました。

私はAO入試とか推薦入試を否定するつもりはありませんけれども、そういった面からいえば、何が問題なのかなということで、主体的に学ばない大学生が問題であるならば、大学にそれを入試で入れた大学の責任であるし、まあ、そこに入ってしまった高校側の問題でもあるので、そこは学ばせるように我々が教育して、大学で教育すればいいのではないかなというふうに思います。

大学入試でいろいろこう変えていって、それで学生がよくなるというのならそれで

もいいんですけれども、その主体性を評価する、それを数値化するとか、そういうところがちょっと、ちょっと余り私に考えが及ばないというか、それが入試改革につながるのか、どうなのか。私がちょっと気になる場所なんです、いかがでしょうか。

司 会（松浦）

先生方から何かございますでしょうか。

河 合

直接的なお答えになるか、大学において主体性をはかる何か尺度があるのかわかるのかというご質問と捉えてよろしいでしょうか。

大変難しいと思いますけれども、これは中央大学に在籍している学生の場合、多くの大学生と同様にいわゆる勉学、正科教育のもとでの勉学以外に、正科外活動であるとかボランティア活動であるとか、さまざまな活動をしていると思うんですね。あるいはアルバイトに力を注がなければいけないという学生もいると思います。

その中で4年間をどのように過ごすのかといったこと、その全般を通してその人の一人一人の主体性をはからなければいけないだろうと思っています。

まだ成功しているとは言えませんが、中央大学ではCコンパスという評価システムをつくっておりまして、学生が毎年毎年、自分がこういうようなことをやっていくという目標を設定してまいります。そ

の目標を達成していくためにはどういう授業科目を履修し、どういう生活を送ったらいいのかといったことの項目を複数用意しております、これは簡単に言えばウェブ上で学生がみずから項目を設定して、そこに、できたもの、できないもの、その進捗度を記入させていくという仕組みのものです。これを半期に一度自分たちでチェックをさせて、そして自分のその主体的な行動あるいは学びといったものに照らして自己評価させる、このような仕組みを実はつけております。

それを我々が教育サイドとしてどのように評価してあげるのか、これが次の課題となっております。そのような基盤を今つくっていると。大変形式的で技術的な評価方法ですけども、そういったものを学業評価と組み合わせているということでございます。

淡 路

ベネッセの方もおっしゃいましたが、高校での主体的な学びは、自学自習、対話と交流を教育理念とする本学は歓迎です。主体的な学びを高校と大学がそれこそ高大連携的にやっていこうとする場合、現在の入学試験は接点であっても十分接続するような状況には至っていないと思います。そこで、高大連携活動を強化すべく高校へ本学の教職員が出向き、高校での主体的な学び、探求型の学習促進に協力しています。

大学からすれば高校を予科とみなして協力し、高校からすれば送り出した生徒さんが大学でどれだけ活躍できるのか、しているのか、そういう意味では高校と大学の7年間のタイムラインで手を組んで、グローバル力のある人材育成を共にやっていきましょうというものです。本年度からは大学院生を「学びのコーディネーター」として高校へ派遣する事業も開始しました。

今後いろいろな問題が当然出てくるでしょうが、相互に情報を共有し合いながらやっていこうというのが、高大接続型の入試改革の基本だと思っています。入試という局面だけを捉えて余り議論しても、少し片手落ちかなと思います。

司 会（松浦）

ちょっとだけ僕もコメントさせてください。それで、きょうの河合先生のところでも高大接続の話があつて、きょうの午前中からいらした方は秋田の国際教養大学のグローバルセミナー入試ですか、私ども都立大学、首都大学東京では生命と地理だけですけれどもゼミナール入試、これも高校生が9回ぐらい大学に来なくちゃいけないくて、高校と大学、高校のうちから大学の先生の授業を受けるという。それから、きょうはオレンジ色のパンフレットをそこに置いておきましたけれども、やはり高校と大学の連携をする中で、いろんな授業をしていくという、そういうことをいろいろやってい

く中で、今のような7年間なり、場合によっては10年間を使って、生徒を育てる、学生と学生を育てるということをもう少し力を入れてやっていったほうがいいのかという、その点なんですけれども。

もう一言あればどうぞ、いかがでしょうか。

質問者A

おっしゃるとおりでした。以前、京都大学の溝上先生が京都大学の学生について意欲とその主体性について調査をしたということがあつたんですけれども、その中で大学1年生次において先を見通したプランがない学生がとても意欲が足りないということがありましたので、私もそれを感じて高校では先を、大学の先を見通した教育というのを考えて教育しているつもりです。

なので、やっぱりここで一番大事なのは、やっぱり4番目の、高校と大学が連携するというのが一番大事なのかなというふうに私も思います。

大学の先生は最近、高校のほう一生懸命回っていらして、高校のほうによくいらっしゃって講演とか講義とかやってくれますし、我々も大学のほうに向かって行って、いろいろな講義を聞いたり研究室訪問したりしていますので、そういったところを通しながら、そっちのほうが先に行ったほうが実はいいのかなというふうに私は思うんですと、すみません、感想です。

司 会（松浦）

どうもありがとうございました。

時間が大分迫ってきたので、あと少し具体的なそれぞれの先生の、ご質問の一部しか取り上げられませんが、いきたいと思います。

まず河合先生なんですけれども、ちょっと今の議論にも関係するんですけれども、今のような高大接続の取り組みは今後重要になってくると思いますが、きょうのお話を伺うと、例えば参加者数などを考えたとき必ずしもうまくいっていないケースもあるという印象なんですけれども、どうすればいいかというようなことだと思います。

もう一つは、なぜ都内や関東の商業高校ではなく、岐阜商業を選んでそれでうまくできたのかという、その辺を少し教えていただければという。

河 合

参加者数の問題ですけれども、入試と絡めた高大接続プログラムは参加者を問題にしておりません。したがって、その年どしにばらつきがあったりしても仕方がないのかなと思っております。

むしろ参加者が少ないほうが、岐阜アカウンティング・プログラムにしても、休講を決めた東京コラボレーション・プログラムにしても、指導していく私どもの負担は軽減されるし、なおかつ指導が濃密になるということで、実効性は高まるのではない

かと思っております。

まあしかし、参加者が少ないということは、一方で我々が望んでおります要件を満たし切れていない高校生もいるということでございますので、そのあたりをどう改善していったらいいのかということ。これがやはり高校と大学との責任者の膝を交えた話し合いであるとか、継続的な連携によって何とかしなければいけない点だろうと思っております。

参加者が少ないからイコール制度を廃止するということではなくて、むしろ岐阜商業のきょうのスライドの4つの成功要因ですね、この1つが欠けても継続的な制度の維持はできない。むしろ制度疲労を起こしていくということは、両者にとって不幸ですので、なるべくそういうことがないように日ごろからの連携が必要かなと思います。

それから岐阜商業につきまして。商業高校で簿記教育が盛んなところは全国あるわけなんですけれども。私どもの高大接続、その際に求めた要求というのは、中央大学がやはり歴史的に、商学部の学生のほとんどなんですが、公認会計士の輩出者数が多いわけですね。これは卒業生や社会から求められている私たちの教育上の使命の一つでもあるということで、それをやはり確実にしていくためには、高校時代からそのような能力にすぐれている方をお招きして、さらに力をつけていただきたい。そういう意味で

は県立岐阜商業の指導力が非常に高かったということでございます。そこで、話を持ちかけて交渉し、協定を結んだということでございます。

ところがまあ、本年度入学者が非常に少なかったということですね。平均で七、八名来ていたんですが、今年3名というのは、岐阜商が他大学と協定を結んだということです。つまり、ちょっと浮気をされたと（笑）。まあ、それも仕方がないですね。これはやっぱり、それぞれの高校や大学の抱えている生きざまですから。それから奨学金の問題とかですね、いろいろあって、中央大学商学部に向かうのではなくて他大学に向かった生徒さんがいらっちゃったということ。これは補足でございます。

司 会（松浦）

どうもありがとうございました。

次に、小林先生に幾つも質問があるんですけども、きょうのテーマに特に関係しているところを2つお願いいたします。

まず、こちらのほうが軽いと思うんですけども、AO入試の実施時期に関して、午前中の討論会の中ではなるべく遅くしたほうがいいんだというお話があったんですけども、高校の校長先生へのアンケートでは、割と早目の時期、今と同じかちょっとだけ遅いぐらいでいいんじゃないかというご回答が多かったんですけども、この2つの話は矛盾するように見えるんですが、

いかがでしょうかという。

小林先生、午前中いらっしゃらなかったんですけども、午前中の話で、高校側はなるべく遅くしてほしいという希望があるという話がちょっとあったものですから。

小 林

そうですね、その件につきましては、8月1日以降というのが多かったというのですが、割とばらけていますので、先ほどお示ししましたように、9月1日以降、10月1日以降、それから11月1日以降というのも数としてはそれなりにあります。特に普通科についてはばらけていますが、一方専門学科、いわゆる農工商といった学科を持っている高校は比較的早くという希望があり、8月1日というのもございます。

それ以前となりますと、もう極端に少なくなっております。ただ高校によってはいろいろな意見があります。地域的に見ても、少し差異があるようです。そういう意味では決して、一律に早いほうがいいということではないというように思います。

司 会（松浦）

見方で、地域とか学習によって違うということかもしれません。

次が、特に大きな問題だと思うんですけども、今、問題になってきている大学入学資格試験とか統一テスト、それに関するご質問が2つあって、小林先生のきょう見せていただいたアンケート結果は、高校は

否定的というふうに見たんですけれども、これが今政府が進めている方向とちょっと違うというふうに、だから高校側は今、少なくとも先生が調査した範囲では意見が違いうというふうに見ていいのかというのと、それに加えて、もしそうだったらもっと強く校長会として意見を出していかないのかという、そういうのとあるんですけれども、これ大事な問題なんで少しコメントいただけると。

小 林

大学入学資格試験のような形式のテストが必要かどうかという質問ですけれども、必要なしということが校種にかかわらず50%以上60%未満という割合です。また、必要ありというところも2割程度ございますので、そういう意味では高校現場としては意見の分かれているという見方もあるかなというようには思いますが、どちらとも言えないというのも、2割程度ございまして、高校入学資格試験のような形式のテストというのが、一体どのような具体的な内容を持ったものになるのかということ、現場としては見守りたいという様子も見えるかなと思います。

ただ、いずれにしても半分以上は、そういうものは必要ないという意見ではありますので、相対的なものですが、やはり現場としては今のところ、それには否定的な意見が強いというようには言える

かと思います。

司 会（松浦）

時期的なものはいかがなんでしょう。今、センター試験は1月の半ば、20日ぐらい前後だと思うんですけれども、こういうものが場合によっては違う時期に行われると大変困るとか、別にそれは困らないとか、個人のご意見で結構なんですけれども、その辺いかがでしょう。

小 林

はい。これは高校の現場としましては、できるだけやはり遅い時期のほうが生徒の指導はしやすいかと存じます。今のセンター試験は相当、大学入試センターのほうで考慮していただいているというように現場としては感じております。

当然、技術的にこの程度でないと、もうこれ以上下げると難しいということになると思いますけれども、現場としてはできるだけやはり毎日の授業のことを考えますと遅い時期にやってほしいということです。その折り合った点が今のセンター試験のあたりというようには感じますが。

司 会（松浦）

どうもありがとうございました。

最後に山下先生の質問の中から、企業の内定の率がかなりの大学数において、推薦・AOのほうが一般入試よりいいという、その点に関して幾つかいただいているんですけれども、共通して複数いただいたのは、

それをジェネリックスキルの有無にかかわるようなお話をされたんですけれども、それが納得いかないという、ストレートに言っちゃうとそうなんですけれども、その点はいかがでしょう。

山 下

確かに入試形態とジェネリックスキルの直接的な結びつきをお示しするデータはなかったんですが、同じデータで内定者がどういう力を持っているかという、内定をとっている者ととっていない者の大学の種類を統制したもので比較したデータを別集計をしております。今日はそれをお見せできなかったのですが、ちょっと納得感が低かったのかなとも思うのですが、そちらのほうでは明らかにコミュニケーション能力であるとか、それから課題を発見する力であるとか、そういったものがある程度自分についているというふうに思われている大学生の方が内定がとれていると。これを間接的につなぎ合わせますと、要するに内定がとれているということは、そういう力が身につけている人たちが多いということで、それがどういう入試から経てきているかという、推薦のほうが多かったというのは今回の事実ということになります。

ダイレクトに推薦入試とかAO入試とかの入学者がジェネリックスキルがいいという傍証には基本的にはなりません、ただ、一般的に考えられるのは例えば、AOですと

面接があったりもします。推薦の場合、例えば小論文を書くとか、そういうスキルを求められている部分とかいうのはありますし、それから、どうしてもこの大学に入りたいからAOでとか推薦でという、そういう学習意欲、そういった面もかなりその点では影響するのではないかなというふうに考えております。

司 会（松浦）

どうもありがとうございます。

そのほかに先生方からここでご発言ございますでしょうか。

あと5分ぐらいなんですけれども、フロアのほうからあと1つ2つご質問、ご意見があればお願いいたします。もうお疲れですかね。

どうもありがとうございました。

では、もしできたら、演者の方から何かメッセージでも、まとめのコメントでも、言い残したことであれば、山下先生のほうからちょっとだけお願いできますか。

山 下

きょうはこのような機会をいただきまして、本当にありがとうございました。私自身も大変勉強させていただきました。

最後に一言というか、やはりですね、今、大学教育そのものに求められているのは大学生の学びの転換を進めていくことであり、その部分が入試という一つのテーマを通してきょうのような議論の一つになったので

はないかなというのが、全体を解する私自身の印象です。

その意味では、恐らく入試をどうするかという制度をひねくり回すような話を中心にするのではなくて、やっぱり全体的な課題の共有の中から、どういうふうに全体を設計していくのかというような視点が恐らく重要で、淡路先生がおっしゃるようにそれは一つ一つのことを丁寧に見て、議論していった一つ一つ改善しつつ、全体も見ながら木も見えていくみたいな、そういうようなことが必要なんだろうなというのを絶えず、強く感じた次第でございます。

きょうはどうもありがとうございました。

小 林

私からは最後のお話として、一つの具体例を挙げて終わらせていただければと存じます。

というのは、高大連携のお話でございます。これは教員同士の高大連携というのもありますけれども、やはり大学の学生さんと、それから高校の生徒、中学校の生徒も含めての連携というのもあるかと思います。

例えば本校では一昨年度あったのは、理系の学生さんに来ていただいて、具体的には東京工業大学とか筑波大学とか千葉大学とか、それから首都大学東京もありました。それで、それぞれ教室ごとにワークショップを設けまして、そこに高校、中学の生徒

たちが行って、そしてそれぞれ学生さんからどうしてこういう専攻をとるようになったのか、それからまたどういう日ごろ授業とか実験をやるのかとか、将来の夢とか、そういうのを具体的に話して、ワークショップごとにそれぞれめぐっていくという取り組みをやりました。

非常に子供たちも感銘を受けたようで、学生さんという一つ自分たちと年齢差がそれほどない、で、実際に今学んでいる大学で、そういう学生さんからいろんな話を聞くと、非常に刺激になったと思います。そういうところから自分なりにまた進路を見出していく、そうした形もあるかと思います。

それから、首都大学東京さんで理科コミュという名称で首都大学東京に行って、そして実験やいろいろなことを学生さんから学ぶという取組に本校の生徒が参加した例もございました。こういう形の高大連携もあるのかなというように思いました。以上です。

司 会（松浦）

どうもありがとうございました。河合先生。

河 合

入試という問題を社会的な観点から扱っていくという、その必要性をきょうは十分実感いたしました。本当にありがとうございました。

一方で、私立大学にいる者としては、入学試験というのはその組織の政策的な配慮を入れなければいけないものであるとも思っております。そのためには、これは全然お手本にもならないのでございますが、私の経験から申し上げますと、大学側にとりましては入試担当部署と、それから学部の方針、これが一致するところを模索していく必要があるだろうと思います。前向きな姿勢で取り組んでいって、教員一人一人の理解を求め、それから行動を求めていくということが必要なかなと思います。

それから、高大接続という観点からいたしますと、積極的に高等学校側からその接続協定を結びたい大学にアプローチすべきではないのかなと思っております。そのときに、本校ではこういう指導をしているということを大学に訴えていって、そこでマッチングするかどうかの判断が必要であると思っております。

本当に雑駁なコメントで申しわけございません。以上でございます。

司 会（松浦）

どうもありがとうございます。

淡 路

アウェーの東京で、京都大学の特色入試について説明の機会を与えていただきましたことに感謝いたします。

この特色入試について、今日は一切触れませんでした。実は予科的な取り組みを

どうすればよいかという点についても相当検討しました。発表するところまでは至っていませんが、要は高大連携を進めていくというものでございます。

高大連携とか、あるいは接続という言葉がよく使われますが、今回を契機に調べてみましたところ、まだ感覚的なところがあって、実質化はこれからどんどん進めていかなきゃならないと感じました。

本日は議論されませんでした。昨年度の入研協において重要な検討テーマであった「大学入試は第二の学習指導要領」というネガティブな側面についても、高大接続はその解決に係るものとして、今後とも傾注したいと思っています。どうもありがとうございました。

司 会（松浦）

4人の先生方、きょうはどうもありがとうございました。それから参加していただいた皆様方もどうもありがとうございました。これで終わります。ありがとうございました。（拍手）

全国大学入学者選抜研究連絡協議会

平成25年度入研協大会（第8回）『公開討論会』

「受験対策学習ばかりを助長しない入試改革や教育改革について」

当 日 配 布 資 料

淡 路 敏 之（京都大学理事）	113
河 合 久（中央大学商学部長）	117
小 林 洋 司（全国高等学校長協会 大学入試対策委員長・東京都立桜修館中等教育学校校長）	119
山 下 仁 司（ 株 ベネッセコーポレーション Benesse 教育研究開発センター 高等教育研究所 主任研究員）	126

京都大学の入試改革と研究型総合大学(RU12) における入試改革に関する検討について

京都大学理事・副学長(教育担当)
淡路 敏之
平成25年6月6日 全国入研協

議論の継続性：平成24年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(平成24年・岡山市)
企画討論会「新学習指導要領の導入：大学の対応と課題」

パネリスト4名が報告：
神奈川大学特別招聘教授 安彦忠彦：新学習指導要領の趣旨とカリキュラム編成の在り方
大学入試センター 試験・研究統括官 荒井 克弘：学習指導要領の改定と大学入試センター試験
全国高等学校長協会会長 東京都立国際高等学校校長 青山 彰：高校での対応と課題
神戸大学 大学教育推進機構教授 川崎 太洋大：学習指導要領の改定と高大接続

高校目録での意見
↓
研究型大学の目録

議論されたテーマ：

新学習指導要領：

生きる力の育成強化、「活用型」学習の導入(教科学習と総合的学習の関連付け)、「自立の準備」と「個性の伸長」(予科と本科)、共通性と多様性のバランス、言語活動の充実(説明能力、論述力など)、共通のminimum requirement、意欲の喚起、環境教育、理数教育の充実、その他

高校における学カスタンダードの策定、学力の定着と伸長、学ぶ意欲の喚起

課題発見・解決能力、思考力、コミュニケーション力、(外国語教育、理数教育等の充実)

選抜と測定：

大学全入時代の到来直前、経営判断、中教審答申、高大接続と大学の初年次教育、高校は国民的教育機関、大学はユニバーサル化、選抜から接続へ、

選考から相互選択の在り方を検討する時期で、共通テストを基本に本来のアドミッションオフィス選考の検討時期。

フロアからの意見：

東北大学は推薦AOを実施。経験知を出版。推薦AOは地域全体の学びの活力源。その他

■人材強化のための教育改革プラン ～ 国立大学改革、グローバル人材育成、学び直しを中心として ～

教育再生実行会議の提言案案の主な内容

グローバル化への対応

海外の大学と学部・学科・大学院を共同設置(座・計)

国立大学の教員に年俸制を導入(座)

大学入試や卒業認定にTOEFLなどを活用(座・計・自)

英語を小学校の正式教科に

インペーションの創出

理工系人材育成戦略(仮称)を策定(座)

国立大の出資規制を緩和(座・計)

大学などで学ぶ社会人を5年間で24万人に倍増(座)

経営基盤の強化

教授会の役割を限定し、学長主導の改革を推進

首相主催の大学将来構想サミット(仮称)を定期開催

(注)「座」は定額競争力会議で示された教育再生プラン、「計」は第2期教育再生実行計画の審議、「自」は自民党の教育再生実行本部の提言にも盛り込まれている内容

日本経済新聞(平成25年5月23日付)より



2. グローバル人材強化のための教育ロードマップ

学校が輩出する人材と社会が求める人材のミスマッチを解消
大学との連携により、グローバル人材、インペーション人材を効果的に育成

小学校・中学校 高校 高等専門学校 大学・大学院

英語教育強化：9頁
英語教育の質・指導力
大幅改善
英語に触れる時間増大

高校の国際化：9頁
国際的素養を身に付けた
グローバルリーダーを
養成する高校

大学・大学院
世界トップレベル
点形成：14～19頁

グローバル人材

「新しい学び」への授業革新：9頁
アクティブラーニング、対話・討論、
経験・実習を重視し、考える力や
表現する力を育成する授業へ

国際バカロリア認定校増
(日本語DPの導入)

外国人労働者の受け入れ促進、
外国人労働者の確保、17頁

インペーション人材

理工系人材育成
戦略の策定：17頁

理工系人材育成
戦略の策定：17頁

文部科学省発表

大学入試の抜本的な見直しの方向性について

- 入試に多様な機能が求められ過渡している
 - 大学進学希望者の能力・適性の判定
 - 各大学の教育水準や学生の質の評価指標
 - 高校における学力の状況の把握
 - 高校における幅広い学習の確保
 - 高校生の学習意欲の喚起
- グローバル化が進化するなかで、知識偏重の学力観を改善し、予測不能な社会の変化に対応できる能力を評価する等、入試の多様化の推進が必要
- 少子化が進出し、選抜機能が低下するなかで、AO・推薦入試においても確実な学力把握が必要

改革の方向性

○高校教育から一貫した質保証への転換

・高校教育・大学入試・大学教育それぞれの段階で、必要とされる能力や学習成果を確認し、次の学びにつなげていく仕組みへ

○大学入試における資性・能力・適性等の多面的・総合的な評価への転換

・論文や面接、多様な経験の評価等に時間をかけた丁寧な入試へ

○大学入試へのTOEFL等活用の見直し

・グローバル化を断行する大学の重点支援、選抜評価における積極的評価等を通じたTOEFL等の大学入試への活用と大学入学者の継続的利用の促進 など

※TOEFL等を活用する大学(平成24年度入試) 総合系 24校、理工系 13校、農林系 2校、経済系 2校、国際系 2校

【参考】
・中央教育審議会「大学入試の抜本的な見直し」(平成24年10月28日)第2回
・文部科学省「大学入試の抜本的な見直し」(平成24年10月28日)第2回

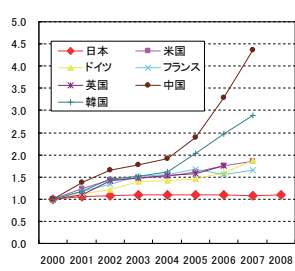
文部科学省発表

背景 1

諸外国が科学技術・高等教育予算を伸ばす中、日本だけが停滞。

科学技術関係予算の推移

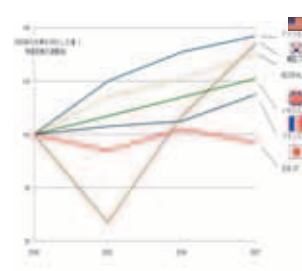
(2000年度の予算額を1として比較)



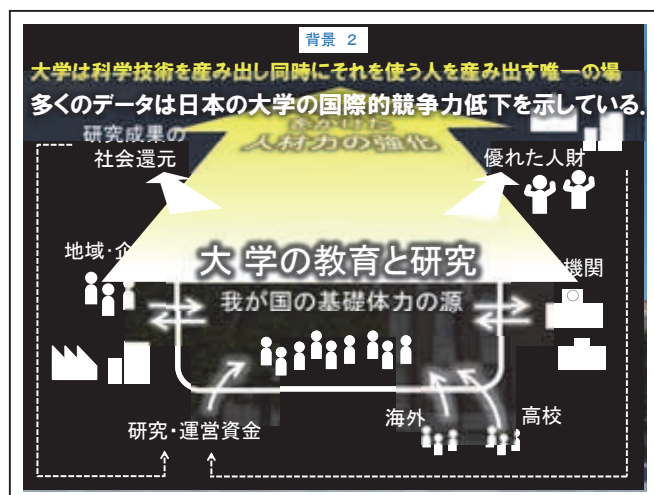
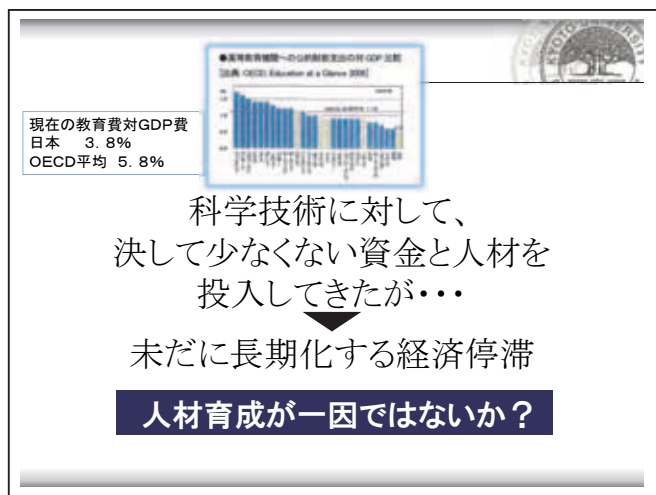
注) 各国の科学技術関係予算をIMレイトにより円換算した後、2000年度の値を1として各年の数値を算出。資料：OECD、IMF

高等教育機関への公財政教育支出の推移

(2000年度の公財政教育支出を100として比較)

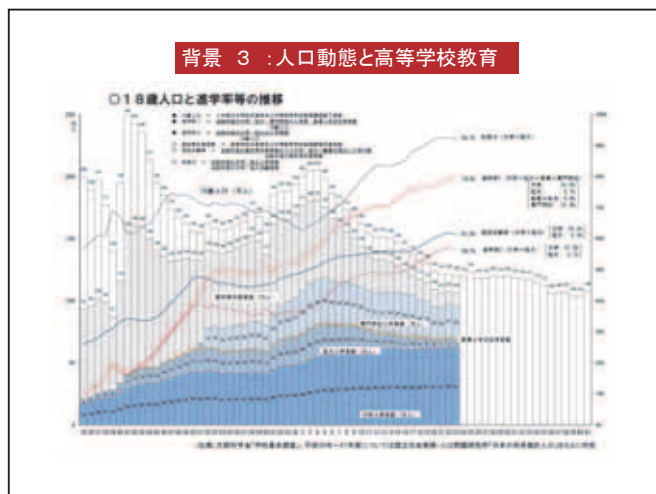


OECD Education at a Glance 2010



学術指向研究	飛躍知の研究	全く新しい知の体系を切り開く研究
	融合知の研究	既存学術領域を融合し、新たな知や技術の体系を構築する研究
	基盤知の研究	既存の知や技術の体系を深化・拡充・継承する研究
技術指向研究	革新研究	将来の応用における重要課題を構想し、根源に遡って解決法を探索する研究
	応用研究	特定の目標に対し、既存の知識、技術を適用して、その実現を図る研究
	開発研究	新規材料・工程の導入や既存技術の改良により新たな製品・サービスを実現する研究

(2008年2月25日 産業競争力懇談会(COCN)中間報告)



< 必修修教科・科目、単位数の変遷 >

実施年度/学科等	普通科	専門学科	卒業単位数	特記事項
	必修修科目数	必修修科目数	必修修科目数	
昭和23年度	6	3	30	国・社・数・理・体から38単位
昭和26年度	6	3	38	国・社・数・理・体から38単位 特設の設置
昭和31年度	10~12	科目 1 46~81	単位 9 科目 30~55 単位 30 単位 85	必修修科目数の増加 英語・算数が必修制になる 必修修科目の一種の増加 外国語が必修制になる 算数は女子のみ
昭和38年度	男子 17 女子 18	科目 1 66~74 70~76	単位 14 科目 47~58 単位 35 単位 85	必修修科目単位数の削減 外国語が必修制から外れる 算数は女子のみ
昭和48年度	男子 11~12 女子 12~13	科目 1 47	単位 男子 42 単位 35 単位 85	必修修科目単位数の削減 外国語が必修制から外れる 算数は女子のみ
昭和57年度	男子 7 女子 8	科目 1 32	単位 男子 27 単位 30 単位 80	必修修科目単位数の削減 外国語が必修制から外れる 算数は女子のみ
平成6年度	11~12	科目 1 38	単位 11~12 科目 35 単位 30 単位 80	社会・地理・公民、世界史必修制になる 理科2科目必修制の復活 算数は男子と必修制になる 総合的な学習の時間制設
平成15年度	13~14	科目 1 31	単位 13~14 科目 31 単位 25 単位 74	国・数で2単位の必修修科目設定 地・文必修制 外国語、英語が必修制になる

① 高度経済成長期においては、進学率の高まりとともに、必修修科目数、単位数とも一貫して増加傾向にある。

② 必修修科目の設定に関して、現在の状況の基礎ができたのは、昭和57年実施の学習指導要領からである。国語Ⅰ、現代社会、理科Ⅰといった、いわゆる「総合科目」の新設の影響

大阪府立天王寺高等学校
山口豊先生より提供

研究型大学の認識

カリ 京大広報, 2011.7 洛書

京大教員からのメッセージ

若手A先生の記事

大学は高校での学習を前提として講義がされる。
日本の高校教育は多くの場合、大学入試を最終目標
にプログラムが組まれているので、入試に必要な科目
はしっかりと勉強、そうでない科目は授業を受ける
機会さえない場合がある。
暗記中心は分野を超えてつながっている原理を発見
することに對して負に働く
学生の間に理科学科と数学を学び、異分野融合を
楽しんでください。

をいかし、少人数ゼミや寺子屋式対話型教育を通じて、研究の最前線を眼前に研究の技法と態度の体得、自律的なキャリア形成の精神を涵養することが肝要。

RU(研究型大学)の論点

○入学者選抜方法：知識のみではなく考える力を問う良問を出題するよう様々な工夫と努力。しかしながら、過度の合格至上主義による受験技術トレーニングへの依存度の高まりや、入試科目数や偏差値を重視する志望大学・学部選びの傾向が一層顕在化する状況。

ORUが重視する「国際展開を担えるグローバル人材並びに卓越した人材」の養成に不可欠な幅広い教養力、優れた専門基礎力、外国語運用力の三位一体的育成は高等学校における幅広い学習や主体的な学びを前提。

○入試で高得点をとることのみに特化した外発的動機に基づく受動的学びは、RUが重視している「自ら課題を発見し、チャレンジする」という自発的・能動的な学びとは異なるもの。

○高等学校における幅広い学習や主体的な学び、さらには課外活動等によって培われる能力を測定し入学者の選抜に用いる高大接続型の入試の開発と実施は、大学入試をめぐる事態の改善、大学及び高等学校双方の教育目標の実現に有益かつ有意義。

○中央教育審議会の高大接続特別部会での議論が開始されるなど、高大接続型の新機軸となる大学入試改革の多方面からの検討と迅速な実行はもはや待ったなし

京都大学の教育方針

○入学直後からの教養・共通教育

先人の学びの発想と展開の脈絡、知と技法を、「対話」を通して体系的・順次的に学び、構想豊かに考える基礎的教養力を源泉に、

○学部専門教育

専門の学芸を深め、学術の最前線に触れつつ専門力と総合力の育成
深堀と俯瞰

複雑化・グローバル化が加速する現代社会:

- ・多元的な視点で分野を繋げる着想力
(対話と気づき、目利き)
- ・発展させる構想力と専門力
(展開)
- ・グローバル社会で活用しえる交流力
(実行と検証、見直し)・・・はやりのPDCA
- ・やり遂げる志、先見性と洞察力、人間力

志を重視した入試

本物を使って学ぶ

小人数クラス担任制等
でバックアップ

京都大学特色入試の概要

高大接続と個々の学部教育を受ける基礎学力を重視し、

- ② 高等学校での学修における行動と成果の判定、
② 個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定
を行い、①と②の判定を併せて、志願者につき高等学校段階までに育成されている学力及び個々の学部で教育を受けるにふさわしい能力並びに志を総合的に評価して選抜する。
①については、高大接続を重視しという観点から、高等学校での学修における行動や成果を丁寧に評価するため、「調査書」に加え高等学校校長等が作成する「学業活動報告書（仮称）」など、入願者の高等学校在学中の顕著な活動歴（例えば、数学オリンピックや国際科学オリンピック出場、大会における入賞、教育委員会賞など）、志願者が作成する「ふたひの設計書」をもとに書類審査をする。
②については、学部が定めたカリキュラムの内容を修得するのに必要とされる基礎学力や個々の学部における教育コースにて望みいかなる能力を重視するという観点から、書類審査に加えて、面接、筆記検査、口頭試問を組み合わせて実施する。

本特色入試は平成28年度入試から実施する。

本特色入試の実施に当たり、必要な調査・分析を行い、さらに、高等学校や関係機関との意見交換等を始めとする高大連携の推進、各学部における入試と教育課程に関する検討を支援する**全学組織として、「入試改革検討本部」を平成24年11月に設置。**

○学部別特色入試一覧

学科(学系)名	募集人員	特に入試において定める人物像	上記に加え求める進路方法	④の特色ある人物像	
文学部人文学科	5名	日本への文化理解の意欲を持つ人	総合型選考(国語、文系科目合算)、推薦型 ①、センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選	
社会学部	6名	社会の仕組みや文化の発展について興味・関心と意欲を持つ人	推薦型 ①、センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選	
教育学部	10名	人権に関心を持ち、教育に関与する意欲と能力を持つ人	①パフォーマンス評価を重視し、②タイプの入試、センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選	
法学部	20名	社会・国家・社会の発展に関与する意欲と能力を持ち、多角的に物事を捉える能力を有する。法解釈能力を身につけた人	小論文、センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選	
経済学部	25名	経済の分野をはじめ、豊富な教養を修得し、社会で自らの能力を発揮する人	国語、センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選	
理学部	前年名	物理学の分野において優れた才能を持つ人	総合型選考の推薦型選考、①試験、③センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選	
工学部	数学科	5名以内	数学の分野において優れた才能を持つ人	①試験、推薦型 (学系)の人選	
	人間環境科学科	1名以内	人間・環境の発展に関与する意欲と能力を持つ人	推薦型 (学系)の人選	
	作業科	5名以内	社会・国家・社会の発展に関与する意欲と能力を持ち、意欲と能力を十分に発揮する人	推薦型 (学系)の人選	
薬学部	薬学科	前年名	基礎的専門知識・能力を有する人	特に入試 (学系)の人選	
工学部	電気電子工学学科	5名以内	電気・電子の分野において優れた才能を持つ人	①試験、推薦型、センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選
	化学・生物工学学科	5名以内	化学・生物の分野において優れた才能を持つ人	①試験、推薦型、センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選
農学部	農科・環境経済学科	3名	食料・環境・農業などに分野において、高度な専門知識・能力を有する人	小論文、センター試験の成績	特に入試 (学系)の人選

- ※1 今回の発表は現時点でのものであり、今後の検討次第で若干変更する可能性がある。
- ※2 推薦・AO入試の入学手続き者が募集人員に満たない場合は、不足した募集人員分を前期日程の募集人員に加える。
- ※3 出願書類として、①調査書、②卒業学校から発行された卒業資格書(修得)、③主なものの設置書、④特筆すべき活動を証明するもの、などを検討中。
- ※4 本学入試の適人に伴い、平成28年度から専修学校一般入試における「論文入試」は廃止する。

オールラウンド+尖った能力

検証と改善の継続、高校関係者・大学関係者との情報共有:

アドミッションポリシー、ディプロマポリシーをつなぐカリキュラムポリシーの3点セットから診て、教育が適正に機能し、質保証がなされているか？
卒業時の学生の質は？

高校教育とうまく接続した学士課程プログラムの改善に活かされているか、教養課程カリキュラム、専門課程カリキュラム、履修システム、成績評価と一体的にチェック

京都大学の教育ビジョンに適う学生の入学及び
その後の育成が改善したか、認証評価と関連さ
せたPDCAの継続による改革

RU12の基本的な考え方

大学入試は3年間の高校教育と4年間の大学教育を繋ぐ連携プレーとしての役割を担っている一方で、近年、過度の合格至上主義による幅広い高校教育の履行に支障が生じており、これを是正するうえで第2の学習指導要領と言われる大学入試のあり方を見直し、入学後の学びの設計やクリティカルシンキング、幅広い学習活動により醸成される知識の活用力・展開力、メンタル力等を測定する入試へ改善することは、高大双方の教育にとって大いに意義がある。

同時に、入試改革は、社会・高等学校・受験生から幅広く支持されるものでなくてはならず、各大学・学部において、入試改革の議論を一層深め、継続的に入試改革・高大接続について検討していくことが肝要。

中央大学商学部における 特別入試制度の成果と 教育システムのあり方

中央大学 商学部長/教授 河合 久
2013年6月6日



1

本日の内容

1. 中央大学商学部の入試体系: 全体の体系と特別入試の種類
2. 特別入試の一部の最近の志願者数・合格者数の推移
3. 中央大学商学部の高大接続教育体系の紹介
4. 高大接続教育の成功例: 岐阜アカウンティング・プログラムを例に、そのスキームと成功要因を示し、特別入試と教育システムのあり方を提示する。
5. 今後の展望: 中央大学商学部ではカリキュラム改正の検討が進んでいるが、その中で、特別入試と教育システムとの関係を充実させるための展望を私的構想として紹介する。

2

中央大学商学部の入試体系

一般入試 商学部独自

センター利用入試 商学部

- ・ 併用方式
- ・ 単独方式(前期選考)
- ・ 単独方式(後期選考)

統一入試 全学統一(地方会場入試)

特別入試 上記以外の推薦入試を含む

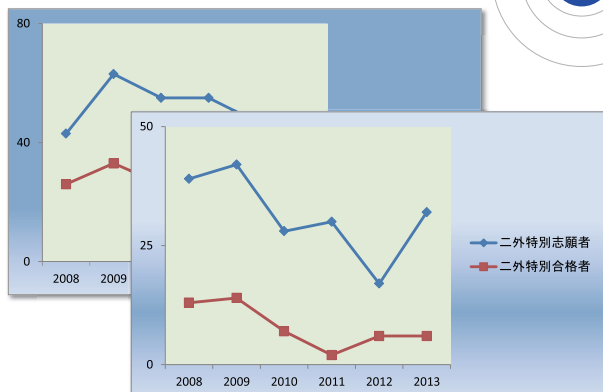
3

特別入試の種類(名称は通称)

◆英語特別入試	受験生の特定分野の能力を評価して可否を判定する入試制度。
◆二外特別入試	※ 自己推薦入試(一般にいうAO入試に相当)は2011年度をもって募集停止(制度廃止)。
◆スポーツ推薦入試	
◆海外帰国生等特別入試	受験生の生活環境の違いによって募集枠をカテゴリー化し、入学の機会を与える入試制度。
◆外国人留学生入試	
◆社会人入試	
◆学校推薦入試	指定校推薦に相当。
◆附属高校推薦入試	※ 高大接続教育プログラム関連は、高校在学中に一定の指導を伴う(後述)。
◆高大接続教育プログラム関連	

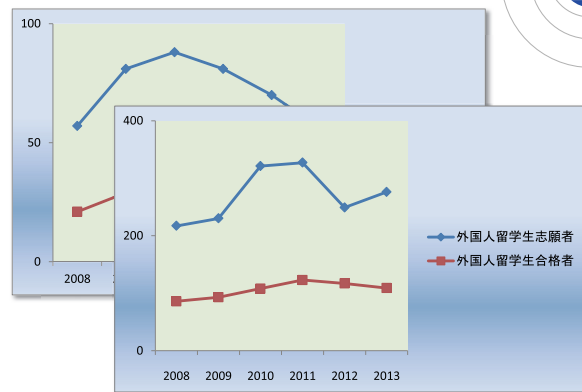
4

志願者数・合格者数の推移①



5

志願者数・合格者数の推移②



6

商学部の高大接続教育体系①

設置当初(2000年)のスキーム



7

商学部の高大接続教育体系②

2012年度実施の制度

◆ 高大連携

- ・ キャンパス・インターンシップ・プログラム 2013年度廃止
- ・ Higher Education チャレンジ・プログラム

◆ 高大接続 特別入試とリンク

- ・ 東京コラボレーション(TC)・プログラム 2012年度教授会にて休講を決定
- ・ 東京アカウンティング(TA)・プログラム 2013年度廃止
- ・ 岐阜アカウンティング(GA)・プログラム

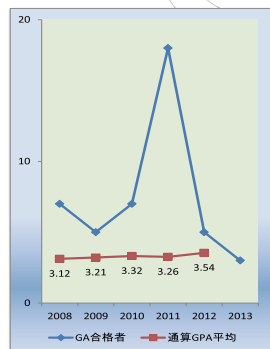
◆ 高大一貫 特別入試とリンク

- ・ 中央大学高等学校 商学部入学校を設ける
- ・ 中央大学杉並高等学校 同上

8

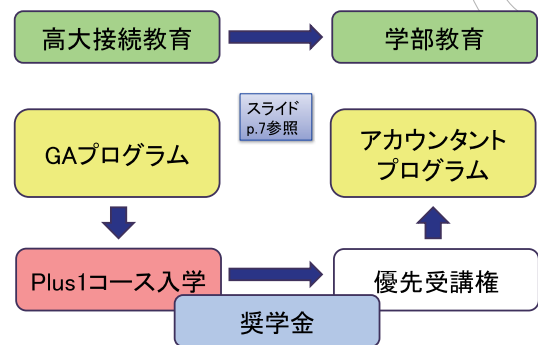
高大接続教育の現状(GAプログラム)

- 岐阜県立岐阜商業高校と中央大学商学部との協定
- 日商簿記1級合格者(高校3年生の6月までに取得)に「会計ゼミ」の受講資格を付与
- 「会計ゼミ」は大学教員4名が高校に出向き、合計15コマのゼミを実施
- 大学教員全員の評価と面接に基づき合格者に入学を許可
- 入学後は商学部設置の簿記関係の講義の単位付与
- 入学後に簿記会計の継続学修を強要しないが、大学在籍からの公認会計士試験合格者は多数



9

GAプログラムと学部内プログラム科目



10

GAプログラムの成功要因

高校と大学の緊密な連携

高校側の濃密な組織的指導

大学側の教育力向上心と資源の提供

受講生(入学志願者)の高い参加意識

たんなる入学手段ではない
継続可能な高大接続教育システムの確立

11

今後の展望(私的構想)

キャリア形成教育を視野に入れた学部内プログラム科目の充実

- ・ 各学科に対応するプログラム科目の継続展開
- ・ 各学科を横断して学修できるようなプログラム科目の履修システムの構築

グローバル人材育成を視野に入れた
特別入試制度と教育システムの構築

- ・ 商学教育を意識したプログラム科目群の設置
- ・ 従来の語学教育のプログラム科目群へのシフト
- ・ プログラム科目群への留学制度の導入
- ・ 留学経験を有する高校生に対する特別入試の設置
- ・ 外国人留学生が参加しやすいプログラム科目群の設置
- ・ プログラム科目参加者と外国人留学生との正課外活動における交流機会の促進(全学対応)

12

高大の円滑な接続を推進する 大学入試の在り方

全国高等学校長会
大学入試対策委員会委員長 小林洋司

研究主題の柱建て

1. 新教育課程における大学入試について
2. 多様な入試、特に推薦入試・AO入試について
3. 今後の大学入試制度の在り方について

調査の方法

■各都道府県を単位として、A～Cの3グループに分け、
Aグループ及びBグループから各5校、Cグループから2校
を抽出した。

Aグループ： およそ3/4以上の生徒が四年制大学
に進学する学校

Bグループ： 大学以外に専門学校等へ進学したり
就職したりする生徒もいるなど、進路が
多様な生徒が在籍する学校

Cグループ： 専門学科高校

柱建て1

新教育課程における 大学入試について

柱建て1

(1) 大学入試センター試験の理科の科目について

■理科出題科目の選択方法

(A)パターン： 基礎を付した4科目から2科目選択

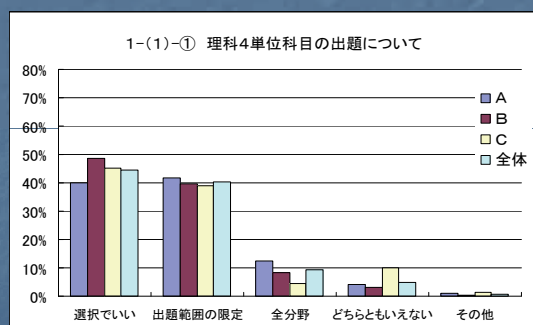
(B)パターン： 基礎を付さない4科目から1科目選択

(C)パターン： 基礎を付した4科目から2科目選択
並びに基礎を付さない4科目から1科目を選択

(D)パターン： 基礎を付さない4科目から2科目を選択

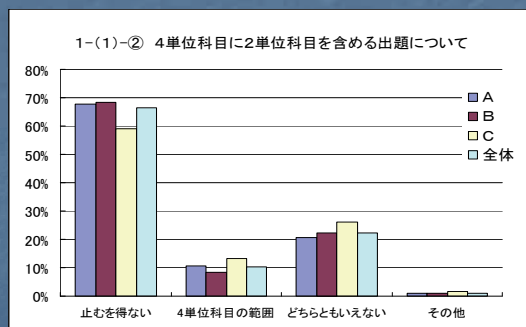
柱建て1

(1) ① 理科4単位科目の出題



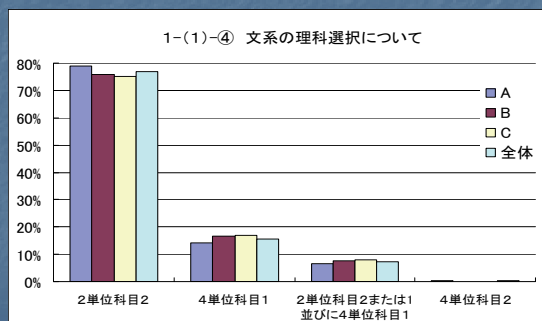
柱建て1

(1) ②4単位科目に2単位科目を含める出題



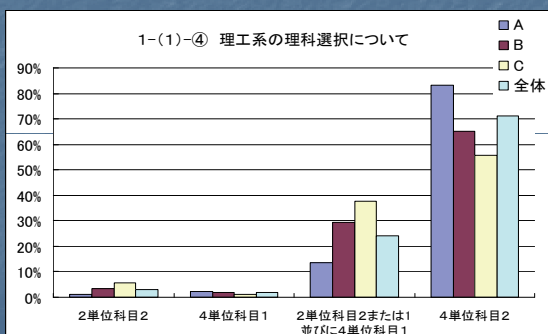
柱建て1

(1) ③a 文系の理科受験タイプ



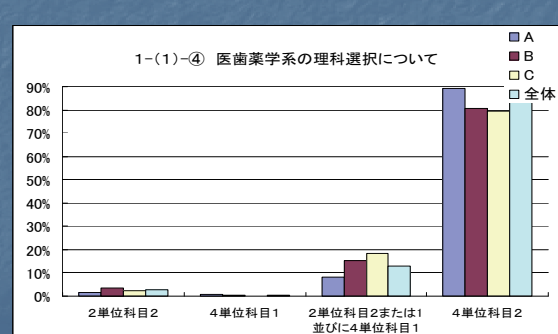
柱建て1

(1) ③b 理・工学系の理科受験タイプ



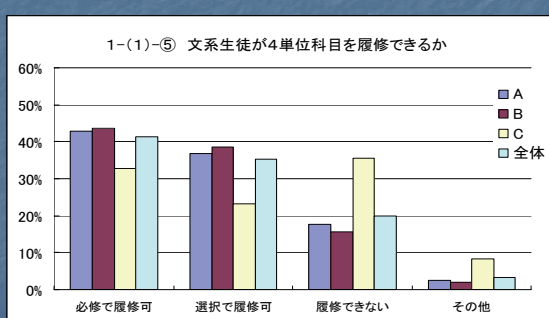
柱建て1

(1) ③c 医歯薬学系の理科受験タイプ



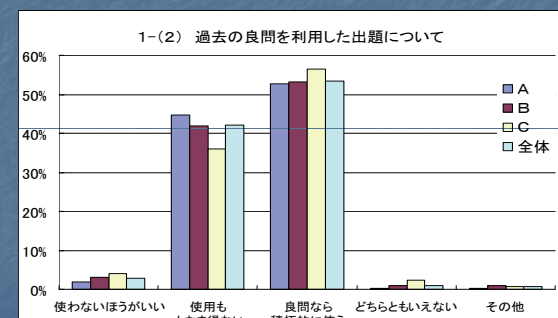
柱建て1

(1) ④ 文系生徒が4単位科目を履修できるか



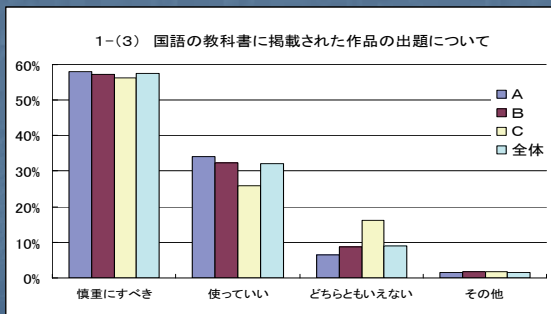
柱建て1

(2) 過去の良問を利用した出題



柱建て1

(3) 国語教科書に掲載された作品の出題



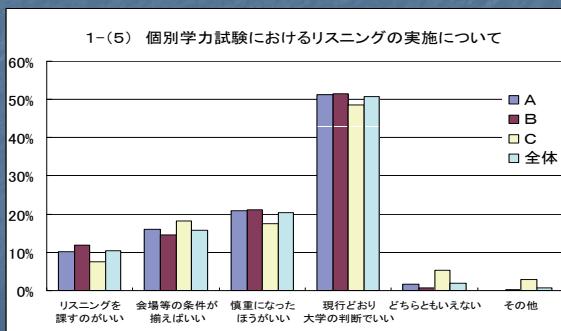
柱建て1

(4) 地歴・公民についての意見

	A	B	C	全体
「倫理・政経」は不要又は見直すべき	14	16	3	33
科目構成を分かりやすく単純にすべき	11	7	3	21
現行と同じでよい	7	8	1	16
A・B科目の単位数による不公平をなくすべき	14	1	0	15
科目間の得点差が小さくなるように努めてほしい	6	4	1	11
地歴・公民から1科目ずつ選択するのがよい	2	5	3	10

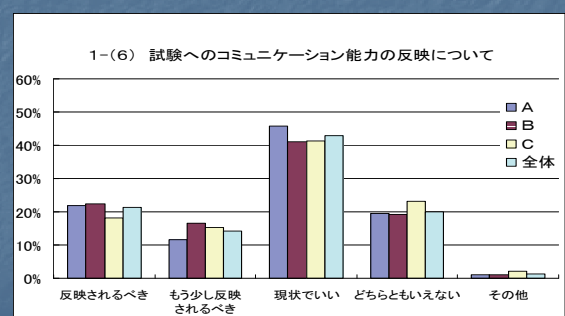
柱建て1

(5) リスニングの実施について



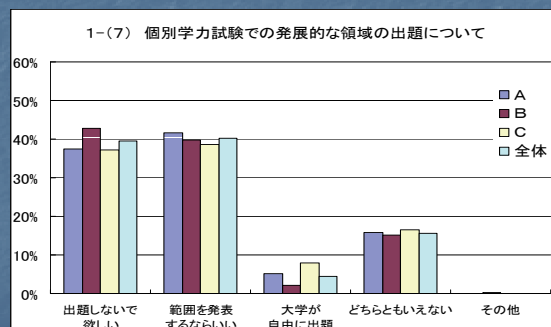
柱建て1

(6) コミュニケーション能力の反映について



柱建て1

(7) 個別学力試験での発展的な領域の出題について

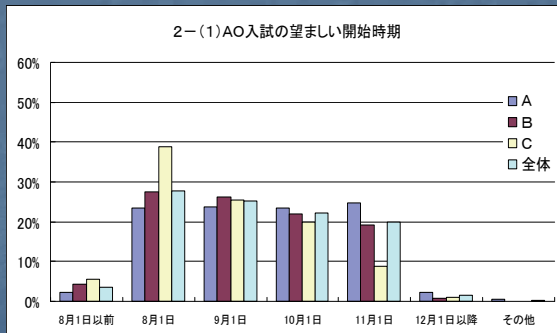


柱建て2

多様な入試、
特に推薦入試・AO入試について

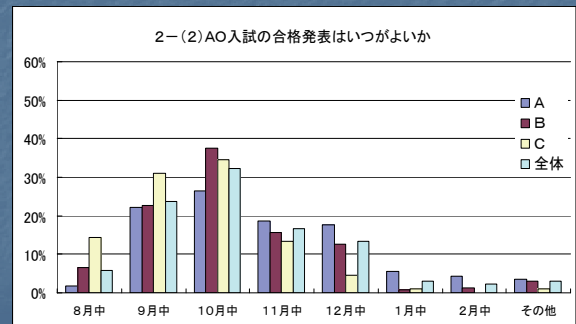
柱建て2

(1) AO入試の望ましい開始時期



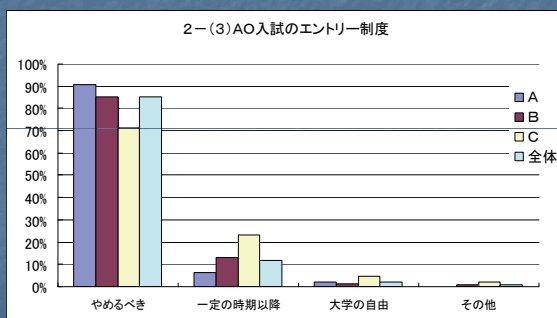
柱建て2

(2) AO入試の合格発表時期



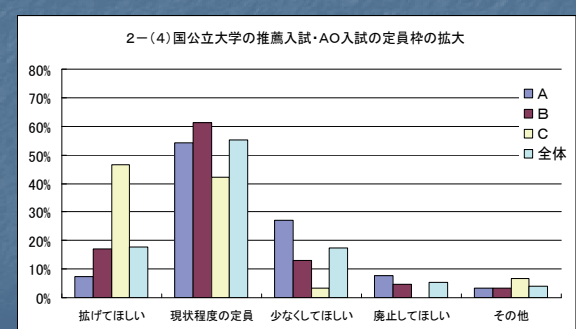
柱建て2

(3) AO入試のエントリー制度



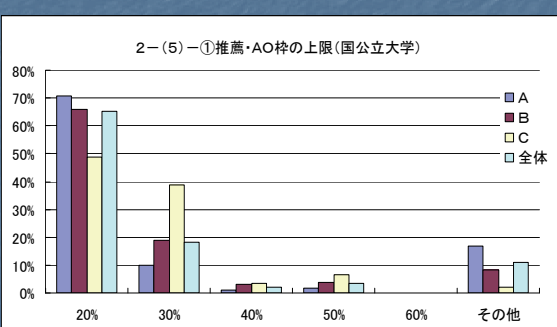
柱建て2

(4) 国公立大学の推薦・AO入試の定員枠拡大



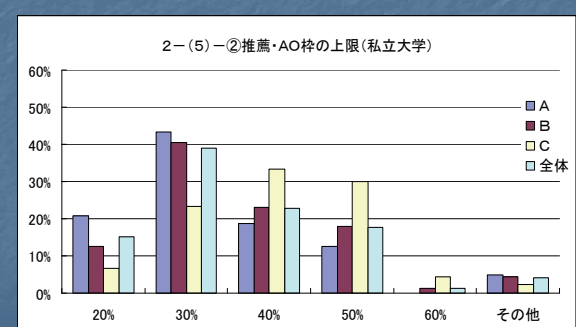
柱建て2

(5)① 国公立大学 推薦・AO枠の上限



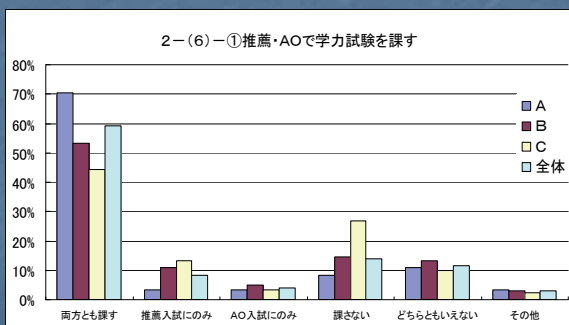
柱建て2

(5)② 私立大学の推薦・AO枠の上限



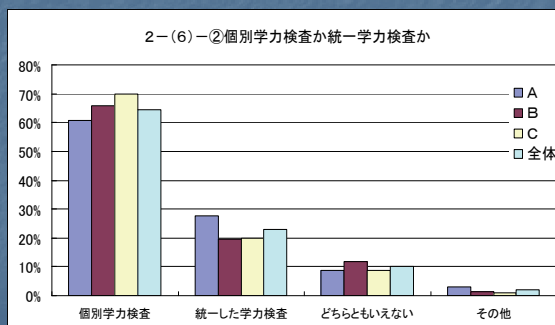
柱建て2

(6) ①推薦・AO入試での学力試験を課す



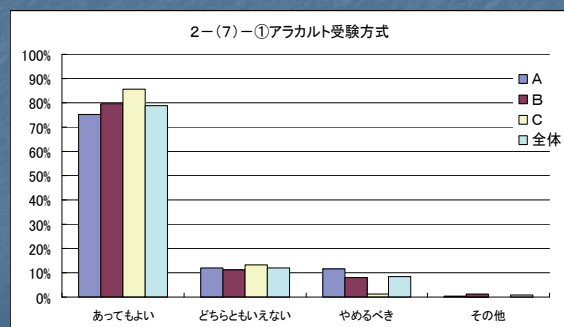
柱建て2

(6) ②推薦・AO入試での学力試験



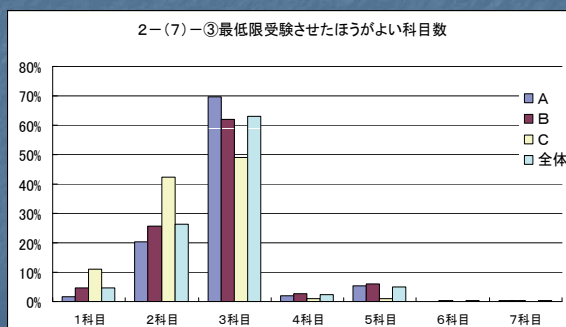
柱建て2

(7) ①私立大学のアラカルト受験方式



柱建て2

(7) ②最低限受験させるべき科目数



柱建て2

(8) ①国立大学の推薦・AO入試について

	A	B	C	全体
現行を維持する	17	26	4	47
アドミッションポリシーを明確化する	14	8	6	28
縮小または廃止する	28	10	0	38
実施時期等を遅くする	3	3	0	6
専門学科高校枠を設置または拡大する	0	5	18	23
必ず学力検査を課す	20	9	1	30

柱建て2

(8) ②私立大学の推薦・AO入試について

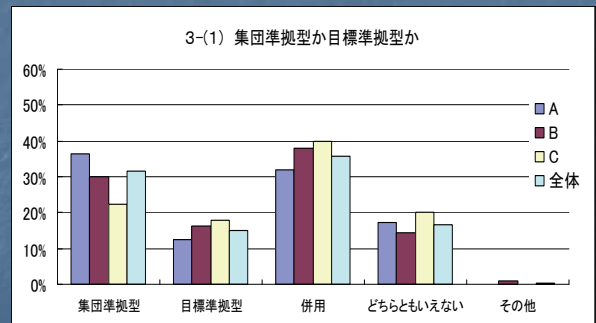
	A	B	C	全体
現行を維持する	7	11	5	23
アドミッションポリシーを明確化する	19	12	6	37
縮小または廃止する	21	14	2	37
実施時期等を遅くする	3	7	3	13
専門学科高校枠を設置または拡大する	0	2	4	6
必ず学力検査を課す	14	9	0	23

柱建て3

今後の大学入試制度の在り方について

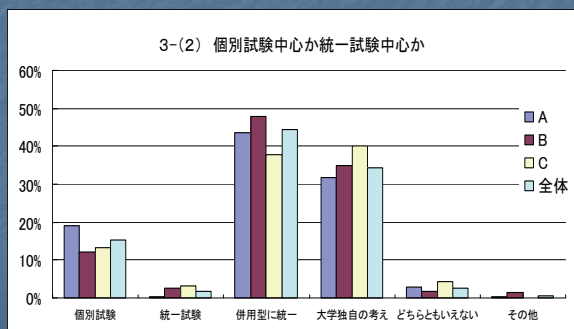
柱建て3

(1) 集団準拠型か目標準拠型か



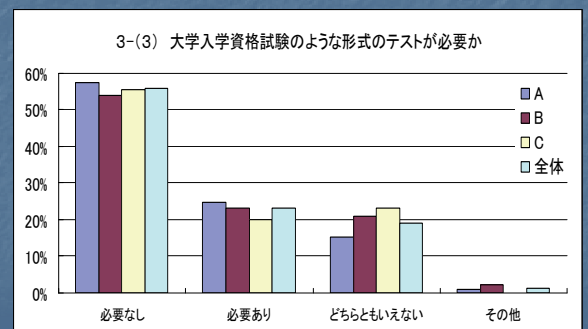
柱建て3

(2) 個別試験中心か統一試験中心か



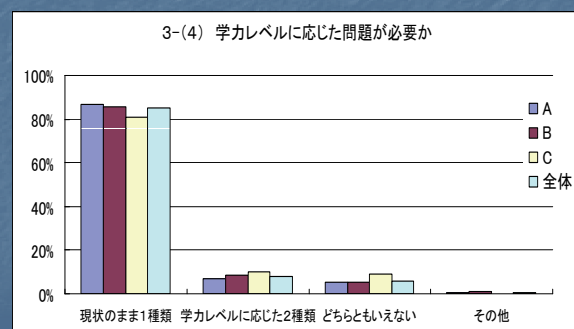
柱建て3

(3) 大学入学資格試験のような形式のテスト



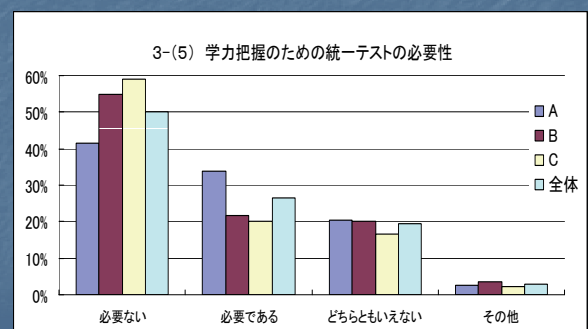
柱建て3

(4) 学カレベルに応じた問題



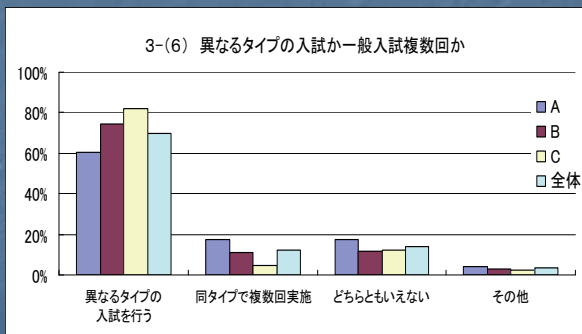
柱建て3

(5) 学力把握のための統一テストの必要性



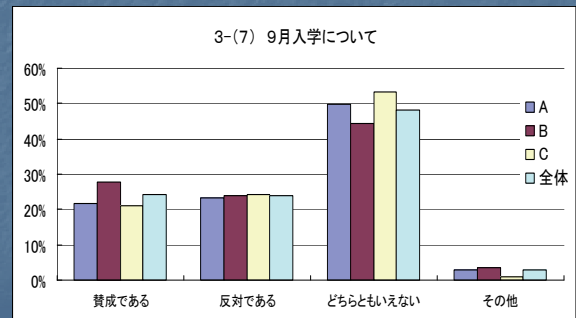
柱建て3

(6) 異なるタイプの入試か一般入試を複数回か



柱建て3

9月入学について



調査のまとめ 柱建て1

- ・センター試験の理科4単位科目の出題範囲には何らかの限定をかけ、高校の学習時期等に配慮してほしい。
- ・センター試験で、過去の良問を活用することについては賛成意見が多かったが、国語の教科書に出ている作品の出題については、慎重論が多かった。
- ・「発展的領域に属する問題の出題」には、否定的な意見が多いことに、十分留意してほしい。

調査のまとめ 柱建て2

- ・AO入試の実施時期は、高校教育への影響が懸念されるので、遅い時期での設定を望みたい。また、エントリー制度の廃止を強く望む。
- ・推薦・AO入試では、多面的な選抜が可能になるようにしてほしい。学力試験を課すことも考慮してほしい。
- ・私立大学のアラカルト入試は、受験システムが複雑にならないよう配慮して継続してほしい。

調査のまとめ 柱建て3

- ・大学入試については、統一試験と個別試験を併用する形に統一するのがよいという意見が、ほぼ半数あった。また、大学入学資格試験のような形式のテスト導入に対しては、否定的な意見が多かった。
- ・推薦・AO・一般といった異なるタイプの入試を行い、多様な高校生の選抜の機会を確保してもらいたい。
- ・大学入試の在り方を検討の際には、高校側の意見も丁寧に聞き、入試制度の改善に反映させてほしい。

ご清聴いただきまして、
ありがとうございました。

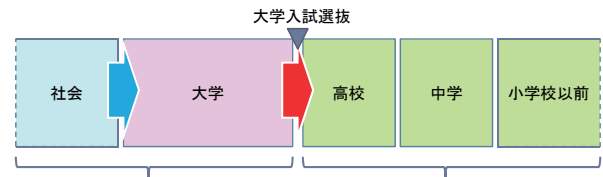
全国高等学校長会
大学入試対策委員会委員長 小林洋司

主体的な学びにつながる 入学者選抜について

Benesse 教育研究開発センター

高等教育研究所
主席研究員 山下 仁司
hyamashita@mail.benesse.co.jp

本発表の前提仮説：「主体的な学び」につながる入試がなぜ必要か？



■実社会では、自ら問いを立て、課題を解決していくことが必要。そこでは必ずしも答えがあるとは限らず、また答えは複数あるかもしれない。

■社会で必要とされる能力や志向性・態度

- ・主体性
- ・課題解決能力
- ・対人関係能力（リーダーシップ・チームワーク）
- ・グローバル・マインドセットや語学力
- ・高度な専門知識

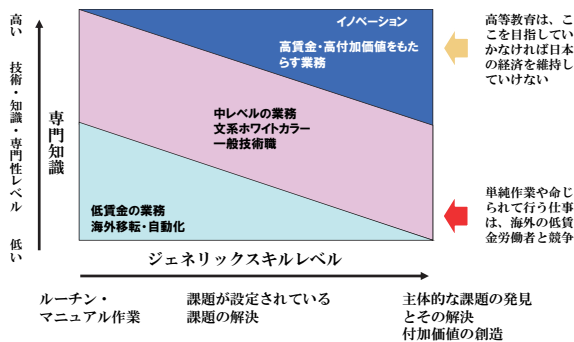
■現在の大学入試（高校入試）は、概ね「誰かが立てた問い、発見した真理」を受動的に理解し、記憶することを要求する

- 受験で必要とされる能力や志向性・態度
- ・忍耐力・粘り強さ
- ・大量の情報を記憶し、それを確実に正確に再生する力
- ・要領の良さ

▶ 2

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

本発表の前提仮説：これから先進国が目指すべき人材育成は…



▶ 3 出典：Standard Research Institute Center for Technology and Learning
2008 SITE 報告を改変

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

第1部 現在の大学入試がもたらしているもの

リサーチ・クエスチョン：

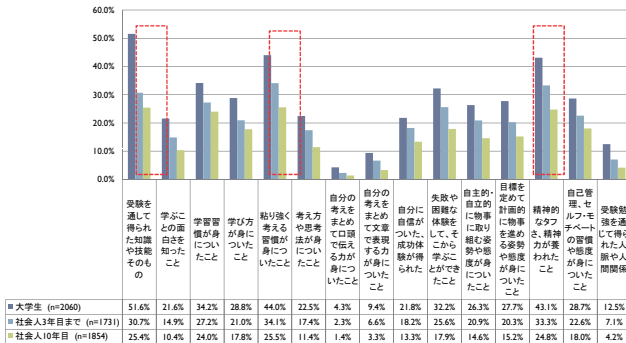
一般入試のほうが、推薦入試やAO入試など多様な入試よりも、社会に役立つ力、ジェネリック・スキルの育成に効果があるのではないかな？

▶ 4

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

大学入試を経験して得られたことは何か？ 大学生・社会人振り返り

「一般入試」を経験したことのある回答者のみでの割合 高校時代の「受験勉強」を通してあなたが得られたことは何か。（複数回答）

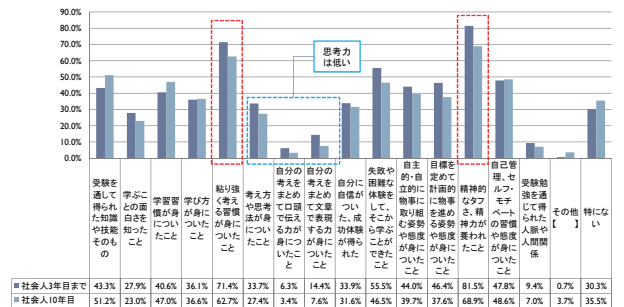


▶ 5 出典：『社会で必要能力と高校・大学時代の経験に関する調査』2010 (C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます
ベネッセ教育研究開発センター

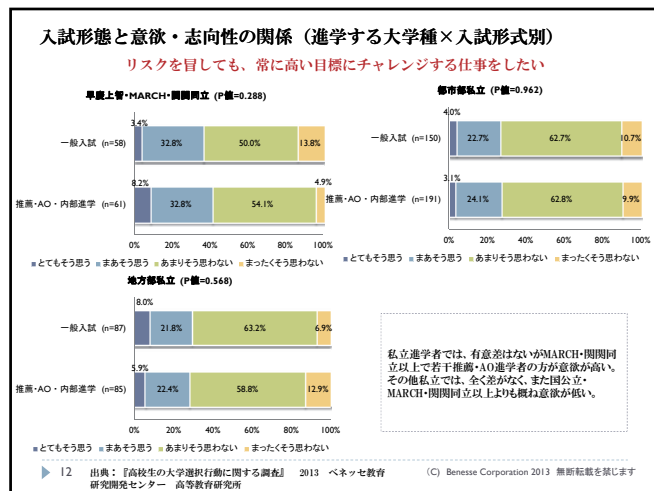
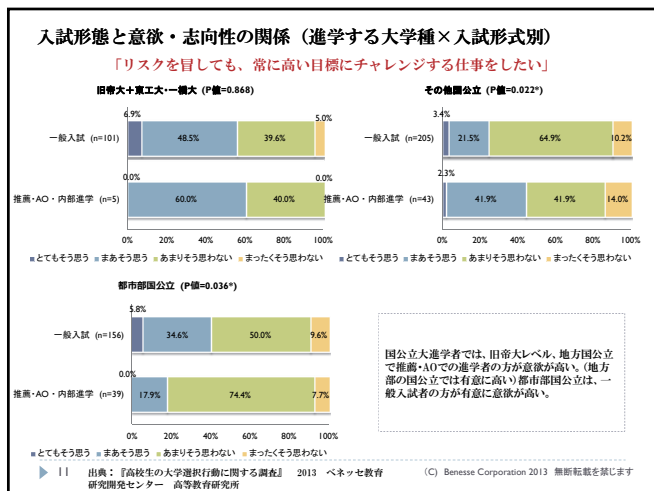
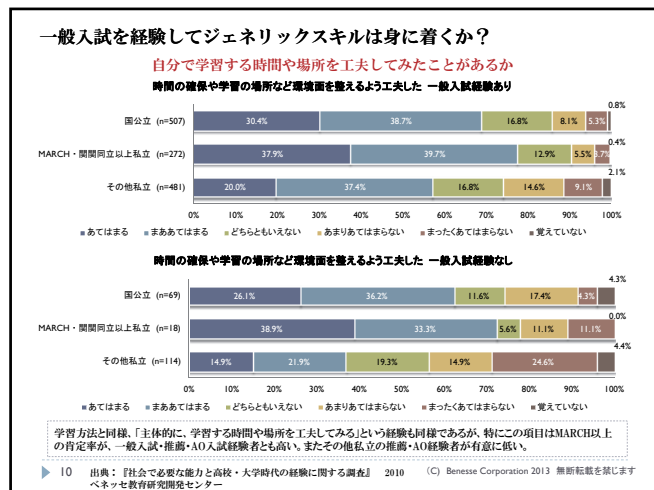
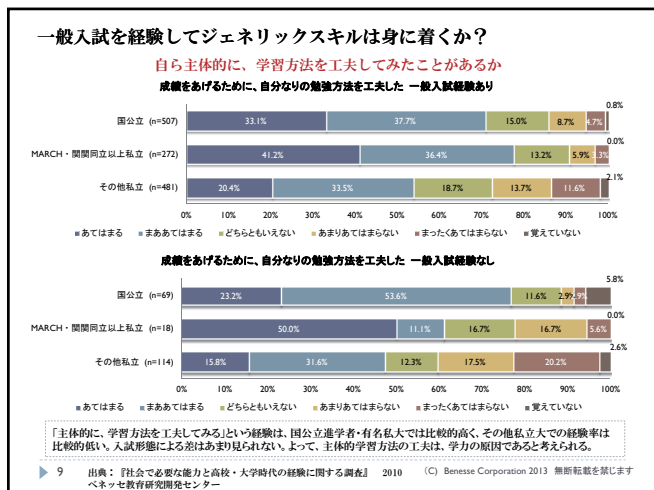
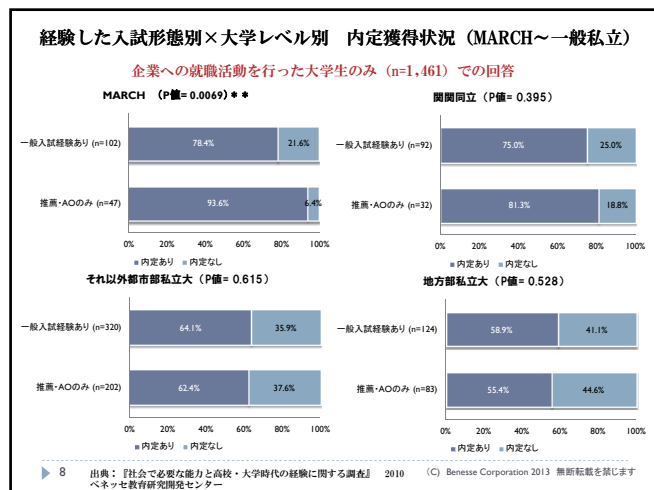
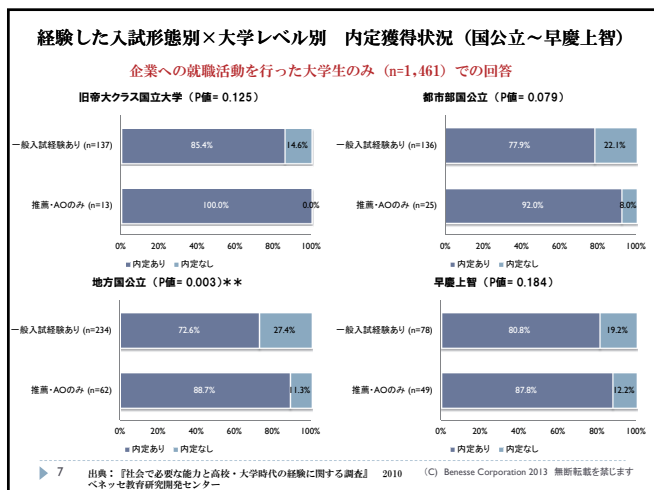
大学入試で得られたことで、社会人として役立っているのは何か？

前の質問で「これが得られた」と回答している者の中で、社会人として「現在役に立っている」と回答された割合

前問で選択したものの中、今の仕事や職業生活に役立っていると思うものは何か。（「得られた」と回答した者を得た割合）



▶ 6 出典：『社会で必要能力と高校・大学時代の経験に関する調査』2010 (C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます
ベネッセ教育研究開発センター



第1部 まとめ①

現在の大学入試（一般入試）は、入学者の指導要領的学力の担保にはなっているが、ジェネリックスキルの養成には役立っていない。自ら学び方を工夫してみる、といったことは、一般入試に向けた学習による「結果」ではなく、高い成績の「原因」である。

一般入試で身につく人と社会人が感じているものは、「粘り強く物事をやり遂げる力」や「タフさ」「自己管理能力」である。（それはそれで重要）

国公立大学や、有名な私立大学では、入試の違いによって就職活動で内定が取得している割合には差がある。推薦・AOなどの、「一般入試を経ない学生」の方が内定獲得率が高い。（それ以外の一般的私大では、差はない）

国公立大や有名私大の推薦・AO入試では、センター試験による学力担保や指定校による最低限の学力保証の上に、チャレンジ精神や意欲の高い高校生を確保することに概ね役立っているようである。また、一般私大でも、基礎学力面での接続的課題はあるが、一般入試よりも進学の目的意識が高い学生が獲得できている可能性もある



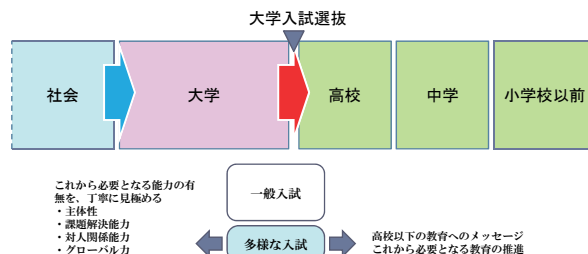
▶ 13

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

第1部 まとめ②

◆推薦やAO入試などの多様な入試は、意欲が高く主体的な学びに向かう潜在力のある学生が獲得できる可能性があるため、一般入試とあわせて一定の定員を割いても意味があるのではないかと？

◆これによって「主体的な学び」ができる生徒を入学させたい、というメッセージを発することができれば、高校以下の教育も少し変わる可能性がある。



▶ 14

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

第2部 多様な入試に向けどうすればよいか

▶ 15

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

多様な入試、主体性や思考力を見る丁寧な入試の問題点

- ① 手間がかかり、大量には対応できない
- ② 面接など、対応する教職員の考え方などによってばらつきが生じる
- ③ 学力面を何らかの形で担保しなければ、入学者の学力低下につながりやすい
- ④ 新しい考え方である、「課題解決能力」などを見極めることが困難である

▶ 16

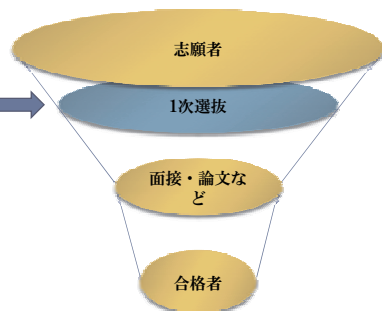
(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

問題点の解決の可能性：客観的な新型アセスメントの導入の試案

ここに、マーク形式の課題解決・論理的思考などの新しい形式のアセスメントを入れることで

- ① 大量の志願者を、面接が可能な適当な人数まで絞る
- ② 面接や小論文の人間的な要因による信頼性の低下を防ぐ
- ③ 学力・能力のある程度の担保
- ④ 新しい能力の保証

を実現する



▶ 17

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

ベネッセでの研究の例（課題解決能力の前提である批判的思考の測定）

問題例：問1

早起きをする習慣がある人は寿命が長い、という研究結果が発表された。

ユニバーサル大学のコーレン教授は、長寿者が多いことで有名な南太平洋の孤島Zに住む男女約100名を対象として10年以上にわたる調査を行った。調査地は、長寿の秘密を解明する手がかりを見つけることを期待して選ばれたものだ。調査の結果から、ふだん午前5時よりも前に起きる習慣がある人は、そうでない人に比べて平均5.8年寿命が長いことがわかった。その他に、長寿者とそうでない人々の間で目立った他の生活習慣の違いはみられなかったという。コーレン教授は「早起きにこれほどの効果があるとは驚きだ」と述べている。

この研究成果に基づいて「早起きをする人は寿命が長い」という結論を導くことが適切かどうか判断するため、確認すべきことは何か。最もふさわしいもの一つを選びなさい。

- 1 コーレン教授が所属する大学は、研究に力を入れている大学か。
- 2 コーレン教授は、企業や省庁から研究のための予算提供を受けていなかったか。
- 3 調査を行った10年のあいだに、Z島にどのくらいの人の出入りがあったか。
- 4 長寿ではない地域でも同じような結果が得られるか。
- 5 調査の対象となった人々の就いている職業による寿命への影響は調べあったか。

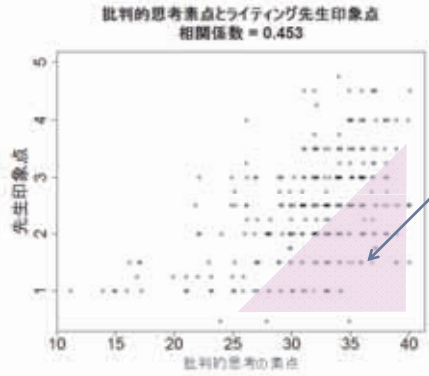
正答率: 84.5%
選択率1: 0.005
選択率2: 0.002
選択率3: 0.045
選択率4: 0.845
選択率5: 0.101

大分類: 推論の土台の検討
小分類: 科学的エビデンスの評価
※対照群がないことを見抜く問題。
正答: 4

▶ 18

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

ベネッセでの研究の例（批判的思考のマーク式と記述型テストの相関）



批判的思考の
マークテストが
高く、論述問題
の人間採点で低
い者

一論述では高い
のにマークで低
くなる者はいな
いということ。
マークテストで
もスクリーニン
グには十分使え
る。

19

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

参考資料：明治大学 情報コミュニケーション学部 新傾向入試

[illegible][illegible][illegible][illegible]

(2) 分析研究对象的自然属性

- ② 銀行の貸付は返済期限が到来するまで返済を要しない。返済期限が到来した時点で返済を要する。
- ③ 銀行の貸付は返済期限が到来するまで返済を要しない。返済期限が到来した時点で返済を要する。
- ④ 銀行の貸付は返済期限が到来するまで返済を要しない。返済期限が到来した時点で返済を要する。
- ⑤ 銀行の貸付は返済期限が到来するまで返済を要しない。返済期限が到来した時点で返済を要する。
- ⑥ 銀行の貸付は返済期限が到来するまで返済を要しない。返済期限が到来した時点で返済を要する。
- ⑦ 銀行の貸付は返済期限が到来するまで返済を要しない。返済期限が到来した時点で返済を要する。
- ⑧ 銀行の貸付は返済期限が到来するまで返済を要しない。返済期限が到来した時点で返済を要する。

▶ 20

出典：明治大学 情報コミュニケーション学科
ホームページより

3 無断転載を禁じます

ベネッセ教育研究開発センター
高等教育研究所

<http://benesse.jp/berd/index.shtml>

本資料・発表等に関するお問い合わせは、以下までメールでお願いいたします。
hyamashita@mail.benesse.co.jp

21

(C) Benesse Corporation 2013 無断転載を禁じます

特集 3

平成 25 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第 8 回）大会関連行事 大学入試センターセミナー

「人口減少期のセンター試験と受験出願動向の実相」

日 時：平成 25 年 6 月 5 日（水） 15:00～17:00

会 場：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 大ホール

企画・司会：大 津 起 夫（大学入試センター研究開発部教授）

パネリスト及びサブテーマ：

内 田 照 久（大学入試センター研究開発部准教授）

「センター試験の受験出願状況の地域特性と年次推移」

鈴 木 規 夫（大学入試センター研究開発部准教授）

「センター試験による私立大学への出願動向」

コメンテーター：

村 上 隆（中京大学現代社会学部教授 元国立大学入学者選抜研究連絡協議会会長）

司 会（大津 起夫

大学入試センター研究開発部 教授）

「人口減少期のセンター試験と受験出願動向の実相」というタイトルでセミナーを行わせていただきます。

講演者は、大学入試センター研究開発部の内田照久准教授、それから、同じく大学入試センター研究開発部の鈴木規夫准教授です。

それから、コメンテーターに、中京大学現代社会学部の教授で元国立大学入学者選抜研究連絡協議会の会長を務められていた村上隆先生にご出席していただきます。

まず、最初に内田から「センター試験の受験出願状況の地域特性と年次推移」という内容で報告いたします。その次に鈴木から「センター試験による私立大学への出願動向」という内容で報告いたします。

大学入試センターセミナーは、大学入試にかかわる情報、知識をある程度まとめた形で皆様にお伝えすることを目標としていますが、昨年はテスト理論に関する内容でさせていただきました。ことはセンター試験の統計情報、我々が持っている情報のうちから、特に大学への志願にかかわる情報に関して、ご報告をさせていただこうということです。

まず、最初の内田のほうは、「センター試験の時間的・年次的な推移」、と「地域的な特徴」についての報告です。それから、鈴木からは、特に「私立大学への出願に関する状況」、これは今までまとまった形では情報をご提供してきたことはなかったのですが、それに関してご報告させていただきます。

最初に内田から約40分の報告、それから鈴木から40分ほど報告させていただきます。その後5分間の休憩をさせていただく予定です。その後に村上先生からコメントをいただいて、フロアとの質疑応答に入りたいというふうに考えております。

それでは、内田先生、よろしくお願いいたします。

内田 照久（大学入試センター

研究開発部准教授）

大学入試センター研究開発部の内田です。

きょうは「センター試験の受験出願状況の地域特性と年次推移」というタイトルで報告をさせていただきます。

このセミナーでは、センター試験を実施してご利用いただいている皆様方に、より有効にセンター試験を活用していただくため、受験者の動向に関する情報の共有を目指します。そのためにまず18歳人口の変化、入試制度への影響について、全国規模で歴

史的に俯瞰することで、地域性や時代性の特徴を対比させて表現してみようと思います。そこでは高校の新卒者に焦点を絞り、センター試験は何が変わってきたのか、変わらないことは何かについて整理していくことで、これから考えるべきことを探る手がかりにしていきたいと思います。

初めに、センター試験志願者の二層構造化について説明させていただきます。次に、高校卒業者の進学志望とセンター試験利用について報告します。3番目にセンター試験による出願状況の地域別の特徴、4番目に今後の18歳人口の推移と予測、最後に、さらなる情報の共有のためにできることを考えていきます。

さて、こちらは昨年、「平成24年度センター試験での新卒者の出願の内訳」です。こちらの右側、国公立大学が半数弱、私立大学だけに受験したのが4分の1ちょっと、なお短大のみはわずかで0.5%ほどです。次のセンター試験未利用というのは、センター試験を受験したものの、そのセンター試験の成績では国公立大学にも私立大学にも短大にも出願しなかった者で、ちょっと不思議な感じがする受験生ですが、20%ちょっといます。最後の、受験料は支払ったんだけど試験場には来なかった者、未受験者は5%ほどでした。

こちらは、センター試験が始まった平成2年から現在までの「18歳人口とセンター

試験の志願者数」です。18歳人口は平成4年、こちらの団塊ジュニアの極大期から昨年までの間に50%台までに減少いたしました。一方、センター試験の志願者は、私立大学の参加もありまして漸近的に増加してきましたが、近年では頭打ちになっています。しかし、実数では頭打ちなんですけれども、高校卒業者の数が減り続けていますので、高校卒業者に占めるセンター試験志願者の割合は現在も上昇を続けている状況になっております。

こちらは、今の「センター試験志願者の部分を拡大したもの」です。ここで、青で示されているのはある属性を持った受験者の層です。この受験者層はまさに文字どおり、まるで定規で線を引いたように、20年間、20万人の水準で安定しています。この青の受験者は、実は国公立大学に出願した受験者です。この層は18歳人口が半分になっても減っておりませんし、センター志願者が増大した時期にもふえておりません。中核的な受験者層として独自の層を形成しています。このことは経験則として、内田・鈴木のマジカル・ナンバー20万人とも呼ばれています。

さて、新卒の国公立大学の出願者数がこの絶妙の人数に収れんする理由として、センター試験では自己採点をしてから出願するために、合格可能性が予測できるからだという意見があります。合格への期待と不

合格のリスクの中で意思決定をするバランスの均衡点、それが全国規模の大人数であるために、このように目に見える形で顕在化したのだというものです。しかし、それは必ずしもそうではないことが最近わかってきました。

こちらは、さきの図に「非新卒、浪人の数を白紫で追加したもの」です。余り知られておりませんが、浪人は平成7年、随分昔ですが、そのときが最大で、それ以降ずっと減少傾向が続いています。一時期少しふえておりますが、それは短大の定員削減、そのあおりで女子が四大に進学、男子がはじき出された結果です。そうこうしているうちに大学の全入時代が到来いたしまして、浪人は急激に減少して、そのまま底を打って現在に至っています。

この浪人の減少、浪人の急減を受けまして、国公立大学の定員に対する実質的な志願倍率は低下しました。そして、新卒の国公立大学の合格率、こちらは従来30%だったんですけれども、ここでぐっと40%台に上昇しています。しかし、ここで疑問が生じます。新卒者の合格率が上がっているにもかかわらず、なぜ新卒の国公立受験者がふえないのかという疑問です。自己採点による合格確率による説明では、合格率が高くなれば受験生はふえてしかるべきなのですが、実際にはこのように変化がありませんでした。そこで私どもは中核層の仮想的

な供給源なるものを考えました。全国の高校の進学校、また中堅校の進学クラス、その総体を、常に高校生の上位20万人程度を確保するための仮想的な定員を備えた器だと仮定します。そうしますと縮小する18歳人口の中であっても、常にその仮想的な定員までは生徒を確保して供給できます。一方、その定員ゆえに短期間での増加供給というのは難しい。そのように考えますと、合格しやすくなっても受験者がふえないという現状とも矛盾しません。

鈴木・荒井は2010年の論文で、センター試験では特定高校からの志願者の集中、これが経年的に見られていまして、実質的な寡占化が起こっているということを指摘しています。このことは仮想的供給源の作業仮説とも合致していると思います。

さて、ここでは下の中核受験者層以外の者を便宜的に新参入受験者と呼んでおきます。また、受験者の人数がふえた増大期、受験者が安定した安定期、浪人の底打ちが見られた飽和期と便宜的に区分させていただきます。

さて、ここでセンター試験の特徴でもあるアラカルト方式に伴う「新卒志願者の受験教科数別の人数と割合」を見ていきます。国公立大学への出願が柔軟にできる5教科受験者、こちらは中核層の20万人よりも少し多い状態でずっと推移しています。ただ、ここ3年ほど若干増加の傾向が見られます。

一方、少数教科受験者、こちらは先ほどの新参入層の増加パターンとシンクロしています。したがって、新参入層は少数教科型の私立大学、そちらを志向していると思われる。

次に、「私立大学と短大の入学定員と大学数」を示します。平成12年ごろから短大の入学定員が削減されるのに伴って、こちらの全体のキャパシティも小さくなっていったことがわかります。しかし、ここで着目するのはセンター試験を利用する私大の数です。センター試験の初めの5年目までは私大全体の20%以下、実に5分の1にも満たない水準で、センター試験を受けても出願先がほとんどない状態だったことがわかります。

これらを踏まえて「新参入層の出願の内訳」を見てみます。上の薄紫は、センター試験にそもそも来なかった未受験者です。次の緑は、センター試験は受験したけれど、その成績ではどこにも出願しなかったセンター試験成績の未利用者。オレンジはセンター試験の成績で私大だけに出了る私大専願者です。センター試験導入当初は、このように緑の未利用者の割合が高かったことがわかります。

このままでは少しわかりにくいので、次に「それぞれの内訳を分解」、そして整理してみます。

さて、センター試験の成績、それを使用

しなかった未利用者は、平成10年にピークとなりまして、以後減少します。一方、私大の専願者はゆっくりと増加していきます。これらの新参入層はセンター試験で私大を受けるかもしれない者たちで、私大の出願機会を確保するためにセンター試験に志願したと思われます。実際に受験をして出願の権利を手にしても、センター試験導入当初はそれを行使する相手先がありません。したがって、センター成績を未利用のままにする者が発生することになります。その後私大の参加がふえて、その権利を実際に行使できるようになると、私大専願者が増加します。それに伴って、出願しない者が減少していったと思われます。

なお、受けてもきつと使わないと事前に判断した者は、センター試験を受けずに早期に離脱しています。この未受験者は平成13年にピークがあります。この平成13年と14年の間で未利用と私大専願の人数も拮抗して、ここで逆転をします。その理由を考えるために、私大のセンター試験参加率をここに表示してみます。こちらを見ますと、私大参加率50%が転換点になっていることがわかります。また、平成14年以降未受験者が減少していることから、センター試験は私大入試に使えると判断する認識の転換点がこの私大参加率50%にあったのではないかと考えています。

「センター試験志願者の二層構造化」に

ついてまとめます。

中核層は国公立大学出願者で20万人で安定していました。そこでは仮想的な定員を維持できる進学校の総体が供給源ではないかという仮説が提案されました。また、大学全入時代はセンター試験では浪人の急減、底打ちの形で発現しておりました。一方、新参入層は私立大学への出願機会を保険的に確保しておきたいと考えているものだと思います。この新参入層の先行増大のために、センター試験の未利用者が発生しました。そして私大参加率のゆっくりとした上昇とともに、私大専願者がおくれてふえていきました。そして、この私大参加率が50%を超えたところで、私大入試に使えるセンター試験としての転換点が見られました。しかしながらこの傾向には若干変化が起こってきておりまして、最近では私大の専願がやや減り、未利用が若干ふえるという新しい傾向も見られております。

続きまして、2つ目のトピックですが、『高校卒業者の進学志望率とセンター試験利用率』について考えます。こちらは平成10年から昨年までの進学志望状況です。

まずは大阪の例になります。高校卒業者のうち、上の緑は大学や短大への進学を希望しなかった者です。一番下の黄色は、センター試験を利用して進学を志望した者、そして真ん中のオレンジは、センター試験以外の方法で進学を志望した者です。これ

はそれぞれがほぼ3分の1ずつとなっております。下2つの進学志望者の中では、半数程度しかセンター試験を利用していないおりません。一方、富山では高校卒業者の半数以上が進学志望なんですけれども、志望者の多くがセンター試験を利用しています。また、青森も進学志望者のセンター試験利用率、こちらは高いのですが、ただ進学志望そのものは半数を割り込んでいる状態です。

このように、都道府県ごとに進学志望率やその中のセンター試験利用率にそれぞれ違いがあることがわかります。各県のデータを整理して、クラスター分析した結果を3類型にして示します。こちらを見ると首都圏と京阪神圏では進学志望率自体は高いのですが、センター試験の利用率は低くなっております。それ以外の地域では、進学希望者の多くがセンター試験を利用しています。ただ、列島の外縁部の地域では進学志望率そのものが低い傾向、そういったものが読み取れるかと思います。

「進学志望とセンター試験利用の地域性」についてまとめます。

進学志望率とセンター試験の利用率、これを県別に累計しました。結果につきましては、さきの図に示したとおりです。こちらの結果から、地域によってセンター試験の使われ方は違っておりまして、逆に言いますと、センター試験での県別成績の比較

などはナンセンスであることがわかります。加えて、センター試験の利用の内訳、センター試験の使われ方は、地域ごとにさらに多様です。そちらの詳細については、次に細かく見ていくことにします。

これは初めに紹介しました平成24年度センター試験の出願内訳です。右の赤い囲みが中核層、左のオレンジの点線囲みが新参入層になります。右側、中核の国公立大学受験者については、出願先が受験者の出身高校のある自県の大学か、ほかの県の県外の大学かで2分割しています。なお、前期・後期受験者につきましては、鈴木・鳴野・石岡（2003）の報告にあります第1志願先を推定する方法で整理してあります。

こちらは、今の出願内訳を年次推移の形であらわしたものです。こちらの全国のデータでは、他県の国公立大学への出願が一番多く、その半分ぐらいが自県の国公立大学に出願しています。その間の範囲で私大の専願が伸びていっているという状態です。しかし、このプロフィールは実ほどの地域の実態も反映しておりません。人数の総和という意味では正しいんですけども、出願状況の推移パターンとしては意味をなさないものとなっています。

こちらは、先ほどの出願種別の年度推移につづきまして、先ほどの図を県別につくりまして、クラスター分析で累計したものです。大きくは5類型で、サブカテゴリーに

分けると7分類となります。こちらを見ますと、私大が突出しているもの、他県の国公立が多いもの、国公立大・私立大が拮抗してきたもの、自県の国公立大学が安定しておるもの、それぞれに類型ごと、出願種別の構成比率、年度推移のパターンに特徴があることがわかります。

次に、タイプ別に見ていきます。まず、タイプ1には、埼玉、千葉、東京、神奈川が含まれます。首都圏の4県です。代表的な神奈川県例を見てみます。この類型では、私大専願が最大多数で突出して増加しています。これは全国的にも極めて特異的なパターンです。

次は、タイプ2系列です。この類型には最もたくさんの都道府県が含まれます。まず、タイプ2aには秋田、石川、福井、岐阜、奈良、和歌山、鳥取、岡山、山口、香川、愛媛、佐賀、長崎、大分の14県が含まれます。山口の例を見てみます。こちらでは首都圏で一番だった私大専願は、ここでは最低です。こちらの類型では、他県の国公立大への出願が最大多数です。しかしながら、人口減少の影響で低下傾向にあります。一方、自県の国公立大学は安定して推移しています。ここからは、地元国公立大学への信頼とあこがれを読む取ることができます。しかしながら、これはマスコミが言う地元国公立大学への回帰というよりは、他県に出る者が減って相対的に自県の割合

が増加しているという状況です。またこれは、リーマンショックなどの経済不況、2008年の時期ですね、そういった経済的な不況で一挙に変動したわけではなく、人口減少の長期トレンドとして生起していることがわかります。

次に、タイプ2 bです。ここには青森、山形、富山、島根、徳島、熊本、宮崎、鹿児島県の8県が含まれます。宮崎の例を見てみます。タイプ2 aと比べると、他県と自県の開きがやや小さい類型です。他の特徴としてはタイプ2 aよりセンター試験未利用が若干多い、そういう特徴が見られます。

タイプ2 cです。岩手、山梨、高知の3県が含まれます。山梨の例です。この類型ではなぜかセンター試験未利用の割合が最も高く、また増加傾向にあります。こうした地域では、県単位でのセンター試験の受験の促進といった受験指導があると考えるのが自然ではないかと思われます。

タイプ3です。宮城、福島、栃木、長野、静岡、三重、滋賀、京都、兵庫、広島県の10県が含まれます。人口が中規模程度の地域が含まれる類型です。長野の例です。他県国公立大と自県国公立大の間に私大専願があります。これは比較的全国総計に近いパターンとなっております。

タイプ4です。茨城、群馬、新潟、愛知、大阪、福岡の6県です。大阪、名古屋、福岡といった大都市を含む類型です。愛知県

の例です。当初は国公立大学の志願が中心の地域でしたが、少しずつ私大が伸長して他県、自県の国公立大と私大専願が拮抗しつつある類型です。この類型は大阪、名古屋、福岡といった大都市が含まれるのですが、首都圏の私大偏向パターンとは大きく異なることがわかります。

最後のタイプ5です。北海道と沖縄の2県です。最北端と最南端が同じ類型になりました。北海道の例です。こちらは圧倒的に自県の国公立大学への出願が多い類型です。他県の進学には船や飛行機による移動が不可欠で、地理的な制約を色濃く反映していると思われます。

「センター試験による出願状況の地域別の特徴」についてまとめます。

地域の状況は全国総計のミニチュアではありませんでした。都道府県ごとの出願状況には固有の特徴が見られました。そして地域の事情、高校の進路指導の方針が定常的に影響を与えていて、地域ごとの出願パターンには一定の傾向性が見られました。

18歳人口の減少、センター試験を利用する私立大学の増加といった社会的な変化の影響は、地域の傾向性の上に年次推移の形で畳み込まれてあらわれていました。ただ、ニュース性を志向する報道とは実情はやや異なっておりまして、年次推移は方向性を持って緩やかに生起していることがわかりました。

引き続き、『18歳人口の推移と予測』について考えます。文科省の言う18歳人口は、実は人口ではなく3年前の中学校の卒業生数です。最新の資料ですと、平成24年3月に中学を卒業した人数が、27年度のセンター試験を受ける世代の人口ということになります。したがって4月に中3に上がった者はその次の年の、小6になった者はその次の次の次の年の18歳人口候補ということになります。このように予測することができると思います。

さて、さきの1月、平成25年センター試験での志願者数の増加、これは18歳人口の一時的な増加、これが原因の一過性の現象です。現在は人口減少の踊り場、一時的な小康状態の中にあります。しかし、平成30年、2018年ごろからまた急減していきます。その減少の程度は地域によっても異なります。18歳人口推移の都道府県別のデータをもとにした分析の結果、4つの類型が得られました。人口があまり減らないタイプ1から、急峻な減少で小康状態も見られず待ったなしのタイプ4までが得られました。

こちらの推移予測の県別の累計を示します。こちら首都圏、愛知、滋賀、大阪、飛んで沖縄は比較的人口が維持されて減少の程度は軽微にとどまります。そして、それらのエリアから離れるに従って減少の度合いが強くなりまして、本州や九州の外縁部では急激に減少していくことがわかります。

なお、ここで福島が急峻減少型なのは、やはり若年層の人口構成比率が少なくなっていることが反映しているのかもしれませんが。なお、この結果は、今後の人口移動によって変化する可能性があります。しかし、全体の総数は基本的に変わることはありません。

「今後の18歳人口の推移と予測」についてまとめます。首都圏、愛知、滋賀、大阪、沖縄は微減で維持されます。一方、本州、九州の外縁部で急峻に減少が起きます。今後の人口移動によっては変化する可能性があります。移民を除けば全体数としてはふえません。なお、地域ごとに人口減少の程度が異なりますので、個別の対策が必要だと思われます。センター試験におきましてマジカル・ナンバー20万人、これが維持されるかどうかについては高校の統廃合、定員の削減、こういったものが予測のかぎになってくるのではないかと考えています。

センター試験について幾つかの観点から、都道府県ごとに切り分けて考えてきました。高校は大学と違って都道府県の行政区分を単位に運営されています。高校入試も県単位、教員の採用、異動の範囲も県単位、指導方針も県の教育委員会が主導する形です。ちょっと極端な言い方ですが、この都道府県単位の高校の仕組みから、全国区となる大学制度への一つの橋渡しの役割を担っているのがセンター試験と言えるのかもしれ

ません。ただ、首都圏は私立の学校が多く、そのため県境もボーダーレスなので、この辺の首都圏ではなかなか実感ができませんが、むしろそちらのほうに異端であること意識すべきかもしれません。

それでは、全体をまとめます。国公立大学に出願する中核層にとっては、センター試験は実質的に高大接続テストの役割を果たしていることがわかります。一方、新参入層では、入試としての役割や学習達成度を測る役目などが混在していて、多様な使われ方の変化が現在も続いています。また、センター試験は地域ごとに果たす役割が異なっていました。したがって利用大学側の個別の方策、地域特性や将来展望、それに即した対策が必要不可欠であることがわかります。センター試験は、現在、構造の複雑化が進み、改善すべき課題が多くあります。しかし、センター試験を利用する高校や生徒の立場からは、高校での学習活動がセンター試験の成績と結びつくという一点、学習に向けた努力は相応に報われるはずだというこの一点が、試験制度の枠組みへの信頼を支えています。これからの入試改革につきましては、このセンター試験が果たしている役割と利用の現状に即した議論、これが行われることを願う次第です。

今回の内容は、これまでの入研協の発表の場で、先生方から寄せられました声をもとにまとめてきたものです。今後さらに検

証すべき点があれば、ぜひご意見をお寄せください。

ところで、先ほどからの国公立大学志願者もセンター試験で私立大学に併願をしているのではないかと、そもそもセンター試験で幾つの学校に出願しているのかといった詳細につきましては、次の鈴木の方から説明をさせていただくことになります。

まずは、ここまでご静聴をどうもありがとうございました。

司 会（大津）

ありがとうございました。

若干時間がありますので、簡単な質問がもし用語等の定義とか、数値に関する簡単な質問があれば、今受けます。詳しい質問は次の、このセッションというか、セミナーの最後のほうに受けますけれども、もし何か質問があれば、今答えてもらいます。よろしいですか。

司 会（大津）

では、次の2件目の発表に移ります。

鈴木 規夫（大学入試センター

研究開発部 准教授）

鈴木と申します。

引き続き「センター試験による私立大学への出願動向」ということで話をさせていただきたいと思います。

先ほどの内田先生は時系列データのトレンドについて説明しましたが、私のほうは平成24年、昨年行われたデータをベースに

しながら話をさせていただきたいと思っています。

（P P 2：センター試験）

ご承知のとおりセンター試験は、全国一斉に実施される基礎的な学習の達成の程度を判定する。国公立大学がそれぞれの判断と創意工夫に基づき適切に利用し、大学教育を受けるにふさわしい能力、適性等を多面的に判定する。さらには、アラカルト方式による自由な科目選択が可能になっています。

そういった試験を受けた後に私立大学に出願することができるわけですが、その出願先につきましては、現状としては無制限、幾つでも私立大学に出願することができます。問題は制限のない中で、私立大学をセンター試験受験者はどのように利用しながら方略を立てているか、この辺についてお話をさせていただきたいと思います。

（P P 3、P P 4：入試環境の変化）

始めに、もう一度復習を兼ねながらセンター試験におけるさまざまな環境の変化について、若干説明を加えたいと思います。

まず、平成2年にセンター試験が導入されて、約23年が経過しました。その間に入試を取り巻く環境は大きく変化しております。例えば、平成2年に高校卒業者数は180万人でしたが、平成23年には106万人と、約80万人近くの減少が見られました。私立大学、あるいは多数公立大学の新設により

大学数の増加が見込まれました。例えば平成2年に132大学が参加していましたが、平成23年には674大学と大幅な増加しました。特に、公立大学は新設されたということもあり、37大学から79大学、また私立は16大学から513大学と、約30から40倍ぐらいの大幅な増加がありました。

さらに、短大から四大へ移行することにより短大が593大学から388大学、私大は372大学から596大学と、短大から四大へと大幅なシフトが生じました。

さらに、社会の変化に対応した学部の新設あるいは再編がさまざまな形で行われています。保健福祉系の大学・学部が多数設置され、マーケティング部あるいはバイオ環境部など、片仮名系の学部が新設されています。また、分類不能な学部、例えば21世紀アジア学部、あるいは地域発文学部といったような、従来になかったような学部が新設されています。

また、公立大学の再編や統合もありました。例えば、高知工科大学は私立から公立大学に変わりましたし、沖縄の名桜大学も私立から公立へ、あるいは鳥取環境大学も私立から公立という形で変化してきております。

（P P 5：セ受験者の出願行動を知る）

このような変化の中で、センター試験は一体どのような形で使われているのか、センターを受ける志願者はどのような形で

このセンター試験を利用し、あるいは国公立大学への出願を考え、あるいは私立大学への出願を考えているのでしょうか。この辺の話をこれからしていきます。これまでセンターで発表している私大の情報は、大学や学部の数のみでした。それ以外の情報についてはほとんど発表されておりません。多くは受験産業とかあるいはリクルート等で発信されている情報を参考にしながら、戦略を練られると思います。

例えば、発信された情報によって、地元志向がさらに強まったと言われておりますが、実は我々のデータから見る限り、地元出身の志願者数は、ほとんど変わらない。何か変わったかという、その県における志願者総数が減少し、地元志願率が高まったのです。地元志願者数はほとんど変わらないということは、よく記憶留めておいていただければと思います。

（P P 6：私大動向把握の必要性）

従来共通一次から引き継がれたような形で、国公立大学が研究の中心でした。私立大学に関する情報がセンター内においても十分に整備されていませんでした。しかし、私大がどのように利用されているかを正確に押さえることは、制度のあり方を検討する上で非常に欠かせないことでありますし、また、志願者確保の面からも非常に重要な支援情報になると考えられます。

（P P 7：分析対象）

今回発表する集団は、高校卒業見込み者、現役であり、センター試験を1教科以上を受験した者です。分析年度は、平成24年度です。必要に応じて7年間の時系列的な情報も若干加えます。それから、最も重要なことのひとつが、分析は個人単位で行います。一般に、個人が複数の大学・学部を受けるため延べ数を扱うことが多いのですが、今回は個人単位の情報に絞り、より実状に近い分析を行っています。

（P P 8：方法）

分析に当たり、まず第1に、国公立大学から1校、私立大学から1校に絞りました。

それから、大学への出願に関する出願方略を定義しました。また、センター試験の受験に関する受験方略を定義しました。出願方略については、国公私立の併願、「国公の専願」、「私立の専願」、それから、全く出願しなかった。「未利用者」、の4つのパターンに分類しました。

また、受験方略については、「全教科を受けた者」と「一部教科を受けた者」の2つのパターンに分類しました。

（P P 9：出願大学の特定化）

まず、出願大学の特定化ですが、国公立大学については、1校出願した場合には、その大学・学部、複数大学へ出願した場合には、ルール1に基づいて一つに絞り込みます。

同じような順位になった場合、ルール2

により大学を1本に絞ります。

次に、私立大学については、最初に大学へ提供した大学を選んだ大学・学部を絞りこみます。この方法は問題があるかも知れませんが、専門学部につきましてはほぼ似たような選択を行っているということから、大学の難易度等は別にしても、妥当と考えております。

(P P 1 0 : 出題方略の分類)

出願方略については、組み合わせは9通りあります。ここで利用します分類は右端に書いてあるように4つのパターンに絞りました。国公立を併願したパターン、国公立を専願したパターン、私立を専願したパターン、それから未出願。なお、未受験については対象外としました。平成24年度は2万3,000人が未受験でした。

(P P 1 1 : 受験方略の分類)

受験方略については、5教科全てを受けたか、あるいは一部の教科を受けたかの2つに分類しました。

(P P 1 2 : 結果)

きょう発表する内容は、初めに入試全般にかかわる状況を若干コメントし、続いて出願方略の特徴、それから受験方略の特徴と、この順序で報告したいと思います。

(P P 1 3 : 大学・短大志願率／セ志願率)

まず、「出願状況全般」ですけれども、図は学校基本調査に基づく平成23年度高校

の卒業見込み者数のうちセンター試験を示した図です。北海道から沖縄までの地域別の構成比率で並べています。

右側にはセンター試験の全国志願率41%、大学・短大の全国志願率61%が示されています。この全国平均値を基準に各都道府県の特徴を見ますと、センター試験の志願率の高い県は東京、富山、広島があります。、東京の志願者は私立大学が多いのですが、センター試験志願率も高いといった特徴を持っています。

これに対して、センター試験志願率が低い県は、北海道、青森、岩手といった県があります。また、大阪、京都もやや低いし、さらには九州や沖縄で低くなっています。

(P P 1 4 : セ参加私大数と私大現役出願者数)

この図は、平成7年からの18年間のセンター試験参加私立大学数と、私立大学へ、女子が一時急激に伸びておりましたが、今やもう既にフラットな状態に陥っています。大学数は増加傾向にありますが、私立大学への出願者数は頭打ち状態にあります。平成24年度は、24万人が私立大学へ受けています。この中で競争が行われるということです。

(P P 1 5 : 出願パターン (1))

具体的な出願パターンを示しています。左側の表は、平成24年における出願パターンの構成比です。全体で41万から42万人が

受けております。これが現役の集団です。これらの集団がいろんな形で分類されるわけですが、国公私併願26%、約11万人ぐらいいます。国公専願は22%、9万人です。この数は若干年々減ってきている状態にあります。

私立単願、構成比は28%約12万人です。さらに約10万近くが未利用です。この集団についての属性は後で説明しますので、若干理解を深めていただければと考えております。

問題は、この構成比が、過去7年間とほとんど変わりがなく続いているということです。言いかえると、上の2つ、国公私の併願と国公専願の2パターンをあわせると約20万人です。この20万人がほとんど変わらずに推移しています。他方、私立専願も未利用も、ほとんど変わらず推移しています。両パターン合わせて約20万人か21万人です。

言いかえると、41万人ぐらいの現役においての行動パターンは過去7年間ほとんど変わらないことになります。

(P P 1 6 : 出願パターン (2) - 性別)

それを属性で見えますと、女子は国公専願が少なくなり、未利用が多くなっています。

(P P 1 7 : 出願パターン (3) - 高校設置別)

それから、公立高校と私立高校で見ると、明らかに私立高校では私立専願型の構成比が高く、国公の専願型が減少しています。国公私併願型はほとんど余り変わりはありません。

(P P 1 8 : 出願パターン (4) - 高校学科別)

それから、学科で見えていきますと、理数科は国公立専願型が非常に多くなっています。普通科は全国の行動と同じです。専門学科は、センター試験は受けるが未出願、出願はしない集団が非常に多くなっています。また、出願先としては私立専願型が多くなっています。

(P P 1 9 : 出願パターン (5) - 地域別)

さらに、その構成比を地域別に見たものですが、首都圏の、埼玉、千葉、東京、神奈川は、私立専願型が5割以上占めてあり、他県とは異なる独特な特徴を持っています。他方、国公立専願型は、九州あるいは中国等で多くなっています。

また、未利用は岩手、山梨で多くなっています。高等学校の指導を通してセンター試験の受験料は払うのですが、そのまま終わってしまうケースが推測されます。

(P P 2 0 : 専門分野)

次は、私大の専門分野への出願状況です。人文社会系が全体の5割以上を占めて

おります。約12万人ぐらいが人文社会系、半数を超えているという状況にあります。次いで理工系が4万74人、それから保健系、保健看護・保健福祉系が2万4千人ぐらい。、大体この3つの学部系統で全体の、85%以上を占めています。また、人文系においてはと私立専願型が多く、逆に理工系では国公立併願型が多くなっています。

(P P 2 1 : 出願学部間の関係)

次の表は国公立併願型の集団の国公立学部と私立の学部間のクロス集計を表したものです。対角線上の比率をみると、人文系は90%で、ほとんどの者がいずれも人文系を受けています。理工系の場合、ほぼ7割、8割ぐらいが同一学部へ出願しています。教育系は、国公立で教育学部を志願している者が、私立大学では人文系に移るケースのほうが多いと多く、同じような傾向が保健系でも見られます。

(P P 2 2 : 出願学部間の関係 (私×私))

次は、私立大を2校以上受けた者の最初の2校間の関係をクロス表で表したものです。この表でおわかりのとおり、対角線上の比率は国公立併願型の場合とほぼ似たような状況にあります。

(P P 2 3 : 私大への出願回数)

次に、私立大学の出願回数です。国公立併願型と私立専願型に分けて平均出願回数を示しています。国公立併願型は

2.8回。私立専願型は3.3回です。若干私立専願型のほうが多くなっています。また、グラフを見ておわかりのとおり、出願回数1回という集団が最も多くなっています。また、最大値は、それぞれ142回、111回ということで、100回を超える出願者もいます。

図では平均出願回数の年次推移を表したものです。出願回数は年々増加傾向にあり、国公立併願型も私立請願型も同じ傾向を示しています。

(P P 2 4 : 受験パターン (1))

次に、受験方略です。5教科パターンと一部教科パターンに分類しました。5教科パターンは全体の60%ぐらい、それから一部教科パターンが40%、6、4ぐらいの割合で5教科を受けるケースが多い。年次的な推移を見てもほとんどその構成比は変わらない。若干5教科パターンがふえていくように思いますが、ほとんど変わらない状況にあります。

(P P 2 5 : 受験パターン (2) - 地域別)

地域別に見ると、一部教科パターンの比率が首都圏で非常に高くなっております。それに対して5教科パターンは、全体で60%強ですけれども、九州あるいは近畿の一部、東北で高くなっています。

(P P 2 6 : 出願パターンと受験パターンの関係)

次に、出願パターンと受験パターンの関係ですけれども、国公立併願型、あるいは国公立専願型は、いずれも90%以上の高い割合で5教科を受けているのに対して、私立専願型はその割合が20%と非常に低くなっています。

それから、未利用者については、約6割が一部教科パターンであり、私立専願型よりも5教科パターンが多いという特徴を持っています。

(P P 2 7 ~ P P 3 0 : 受験パターンー地域別)

地域別に見た場合、国公立併願型の構成比は、ほとんど変わらない。若干東京で低くなっております。同様に国公立専願型の場合も、ほとんど変わらないと言えます。これに対して、私立専願型の場合、特に首都圏においては8割から9割が一部教科パターンで占めている。また、関西地域でも同様の傾向が見られます。

未利用者の場合、私立専願型と同じように、首都圏において一部教科パターンの多く、逆に、九州では5教科パターンが多くなっています。今後さらに追跡していく必要があるような集団かなとは思っています。

(P P 3 1 : 受験科目数)

次に、受験科目数ですけれども、4つの出願パターンについて何科目ぐらい受けているかを、度数分布で表わしたものです。国公立併願型と国公立専願型は、ピーク

は7科目で、基本的には5教科7科目を受けている集団が中心になっています。これに対して私立専願型は、3科目と7科目にピークがあります。3科目受験者は人文系の出願者が多く、また7科目受験者は理工系へ出願する者が多くなっています。未利用者は私立専願型と同じように、3科目と7科目にピークがあります。

(P P 3 2 : 科目受験率)

次は、科目受験率です。出願パターンから全体を整理してみたわけですが、基本的には共通科目として国語と英語は共通に受験しています。それから、国公立併願型と、国公立専願型は、地理B、数学ⅠA、数学ⅡB、物理Ⅰ、生物Ⅰ、化学Ⅰを中心に受験しておりますし、私立単願型は世界史B、あるいは日本史Bを受験するという特徴を持っております。

(P P 3 3 : 科目受験率ー人文系・理工系)

これを代表的な人文系と理工系に分けたわけですが、人文系では3科目中心、理工系では7科目中心ですが、人文系では国・英に加えて数ⅠA、日本史B、生物Ⅰの1科目、理工系では国公立併願型と同一科目を受験する傾向にあります。

(P P 3 4 : 出願パターン構成比ー科目別)

今度は、同じデータですけれども、行と列を入れかえた比率にすると、全くまた

違った様相を見ることができます。図は、比率でソートした結果を示したものです。

結果を見て、まず重要なのは右側のほうに、グラフの右側に該当する未利用の構成比が高い部分ですけれども、この科目は少人数受験科目であります。数学Ⅰ、数学Ⅱ、日本史A、世界史A、地理A、工業数理、簿記・会計といった科目です。これらの科目は、国公立も私立へも出願しない、そういった集団が多く受験している科目と言えます。

(PP35～PP40：地域別出願パターン構成比)

最後になりますが、世界史あるいは日本史等の地域別の出願パターンを見てみます。この図は先ほどと同じように、科目受験がどういう地域でどういう特徴を持っているかを地域別に見ておこうということで作ったものです。図から明らかなように、世界史は主に首都圏で非常に高い構成比を示しております。日本史もそのような構成を示しております。これに対して地理Bは地域によらず満遍なく構成比を示しており、日本史Bと世界史Bとは違う様相を示した科目であるということが分かります。

物理の場合も、受験率は大体似ていますが、首都圏において私立単願型が非常に多くなっています。同じ様な特徴は化学でも言えます。それから、生物についてもほぼ言えるんですけれども、若干物理Ⅰと化学

Ⅰに比べて私立専願型の受験者の構成比が高くなっています。

(PP41～PP43：まとめ)

最後にまとめですけれども、まず第1が、頭打ちのセンター試験の志願者数です。参加私立大学数もフラットに近づき、全体として志願者数は頭打ちであり、男子は既に下降傾向にあります。それから、非常に大きな特徴ですけれども、二極化したセンター試験の出願者層。大学への出願は国公私併願型、国公専願型、私立専願型、未利用の4パターンに分類されるが、各パターンの人数はほぼ10万人前後で推移している。つまりがそれぞれのパターンの構成人数は等しいと考えていただければと思います。

それから、7科目中心は国公私併願型と国公専願型である。3科目と7科目の二山を持つのは、私立専願型と、未利用であると。私大出願者は、3科目受験者と7科目受験者が混在した形で存在していると。

人社系や都市部には私大専願者が多いのが特徴です。それから、ぶれの少ない専門分野の選択ということで、国公立と私大で選ぶときの学部の系統としては、同一の専門分野に出願している者が多いというのが特徴になっています。

それから、私大への出願回数は1校から4校であります。全体の約8割以上を示している。

未利用は地理Aあるいは数学Ⅰ等の少数

受験科目に占める割合が極めて高く専門学科生に多くなっています。

それから最後に、安定した入試統計量の推移ということで、受験生は毎年変わってくるのですが、多くの入試統計量は安定して推移している場合が多い。これが実際にさまざまな角度で分析した結果であるということです。

以上で報告を終わらせていただきます。

司 会（大津）

どうもありがとうございました。

5分間の休憩をします。今22分ですが、ちょっと半端ですが、27分に再開します。

（休 憩）

司 会（大津）

それでは、セッションを再開したいと思います。

今の2件の発表は大学入試センターサイドからのものでしたけれども、これについて国立大学と私立大学の両方で教えた経験のある、現中京大学現代社会学部教授の村上隆先生にコメントをしていただきます。よろしくお願いします。

村上 隆（中京大学現代社会学部教授

元国立大学入学者選抜研究連絡協議会会長）

皆さん、こんにちは。村上と申します。

今の2件のご講演はさすが入試センター研究開発部のお二人ですね。非常に緻密な統計分析の結果を発表されて、それについ

ては、私もなかなかこなし切れなかったという感じがするわけですが、私のほうは率直な感想というか、漫談というか、そんなところで責めをふさがさせていただきたいと思います。

一応自己紹介しておきますけれども、村上隆と申します。1975年でございますので、今から38年以上前でございますが、名古屋大学教育学部の助手として採用をされました。その後同じ大学の大学院教育発達科学研究科の教員として過ごしたわけですが、当時は教官というふうに言っておりました。それで、2002年から2006年まで研究科長をすることになりました。国立大学の方ご記憶と思いますけれども、ちょうど2004年の国立大学法人化の前後2年ずつを研究科長、学部長をさせてもらいました。

その時期にまたこの入研協で、これもまたその当時は今の全国大学入学者選抜研究連絡協議会ではなくて、国立大学入学者選抜研究連絡協議会ということで、国立大学だけの組織ということであったわけですがその会長をさせてもらいました。私の会長の間にいろいろなところとお話し合いをして、結局大学入試センターに最終的にはお引き受けいただいて、今の組織になったということです。そして、2006年の10月に名古屋大学を定年前にやめさせてもらいまして、今の中京大学現代社会学部に採用してもらい、私学の教員ということになって、

ほぼ7年たちました。ということで、一応国立と私立の両方を見ることができたということが言えます。

それから、センター試験に関して言いますと、実はこの1975年という年が、このセンター試験の前身と言っていいと思いますが、共通一次試験というものの試行試験の第1回目に当たっておりました。それで私は助手として一応教官の一人だったわけですが、初めて全学レベルで何か仕事をしたのがこの試行試験の監督でありまして、いわばセンター試験が始まる一番最初のところを目撃することが、できたということもあります。

それから、学部長、研究科長をしていた時代には、名古屋大学教育学部というのは附属学校を持っていたので、そこが格好の試験場になるということで、毎年試験監督としてではなくて建物管理者として朝から晩まで会場に詰めていました。もう冷や冷や、ドキドキしながらやっていたわけです。私学に勤めて、これも私立大学の参入がふえてきたせいで、恐らく国立大学の先生方の負担はちょっと減っているだろうと思いますけれども、久しぶりに、2010年だったと思いますが、試験監督もさせていただきました。リスニングの試験も経験したのですが、こんなに緊張するものだとは思わなかったとか。そんなようなわけで、いろいろな形でセンター試験とはかわらせ

てもらってきました。

さて、私立大学のことを少しお話ししたいと思うんですけども、まず、私立大学の多様性というのは、ちょっと国公立の比ではないんですね。これは先ほど分類が難しい学部があるというようなこともおっしゃっていました。つまり内容的にいろいろだということもありますけれども、設置形態と申しますか、経営形態と申しますか、あるいはもう少し言うと、いわば高等教育の中で占めている位置、ニッチみたいなものの違いが非常に大きいということでもあります。国立大学にいたころはどちらかというと、いや本当に自分の部局がつぶされるんじゃないかということの本気で心配しながら、いろいろ文科省の訪問などもさせてもらっていたわけですが、そのときの「敵」は、そういう官僚機構とか、日本国政府であって、大学がお互いに競争し合いながらも国立大学としての一体感みたいなものはあったように思っています。

他方、私学の場合には、相互の競争というのが非常に熾烈だと言ってよいと思います。ときには、同一大学内でも学部間の競争というのが起こってきます。そのときにはやはりそれぞれの学部の改革というようなことが問題になるわけですが、その際、学術の動向とか教育行政とかいったことよりも、やはり受験生の動向ということに非常に敏感にならざるを得ないので

すね。ともかく学生が来なければ存続は難しくなってくるということがありますので、例えばカリキュラムを変えようというようなことを考えたときに、国立大学の場合にはともかく学部の中で議論をして、それを文科省の担当部局のところへ持って行って相談をするというようなことになるのでしょうけれども、私立大学の場合には、これは驚かれるかと思いますが、入試センター、これはこの独立行政法人の大学入試センターさんではなくて、大学が持っている入試センター、通常入試課と呼ばれる部署があります。ここが膨大な予算を持っているところなわけですが、そこにお伺いを立てると。いわば入試センターというのはマーケティング部門です。そこがOKを出してくれないと、もう全然先へ進めなくて、文科省に行くも何もないというような状況になります。

ただもちろん、私が知っているのはやはりごく一部の大学であって、私学一般というのを語ることは到底できないわけですが、やはりちょっと国立大学で見ているのとは違う景色が見えているというふうにも思いますので、その辺のところをこの先も漫談ばく話したいと思います。

で、私大の学生ってどういうものかということなんですけれども、まず、私学は大体私のところでも文系の学部ですが、そこですら国立大学の2倍ぐらいの授業料を取

っています。しかし、これはもう研究を重ねられておりますのでご存じの方が多いと思いますけれども、現実には国立大学より経済的には恵まれない家庭の出身者が多いですね。つまり授業料の安い国立大学に恵まれた家庭の出身者が入っているというのが現状であるわけです。それなのに、教育環境は明らかに国公立大学より劣っていると言わざるを得ないと思います。これは考え方にもよりますが、教員と学生数の比率というようなものととると、これは物すごい違いになります。

私自身は今、2年生、3年生、4年生とゼミを持っているわけですが、それぞれ24人ずつのゼミ生がいます。実は留年生がいますので4年生はもうちょっと多いんですけど、24人。それで、この人数というのは、今1回目に表示されました内田先生は、実は名古屋大学教育学部に私勤めていたころの教育心理学科の定員マイナス1ですね、25人でしたから。実際は当時定員割れしていましたので、多分学生は十数人で、それで教員が16人いたのではないかと思います。16人分の教員の働きを私が一応一人でやっているというようなこと、これで同等の教育環境を提供できるはずはないのですね。ということで、たくさん授業料を払って、やっぱり教育環境はよくないんですが。ただ、一方で今の研究大学院重点化した国立大学の先生方のご苦勞は、

恐らく私よりももっと大きいだろうと思います。ということは学部生がどうなっているのかなというのは、ちょっと心配したりもしておりますけれども、基本的にはそういう状況であるということですね。

それで結果としては、やっぱり奨学金プラスアルバイト、特に接客のアルバイトをしているのが大抵私立大学の学生ですね。居酒屋などへ行かれて若い女の子が出てきたら、大体私大の学生だと思ってもらったらいいのではないかと思います。それがほとんど必須。それで、しかも奨学金が結構額はあるんですけれども、今はもう必ず返還、その上利子つきというような場合がありますね。したがって、大学を出るときに数百万の借金を背負ってしまっているというような状況になっているわけです。

それで、もう一つやはり国立大と決定的に違うと思いますのは、彼らには学術研究の後継者としての意識というものはほとんどない場合が多いと。もしそれをもつのであれば、超一流私立の場合はともかくとして、やっぱり国立の大学院に行ってもらいたいということで、なかなか大学院の定員が私立で埋まらないということがあります。この辺も一つ大きな問題だと思いますけれども。

そういうところから、結局国立大学と同じような授業内容で授業をやっていると、それはなかなか将来の人生で役立つような

気が学生としてしないということですね。

このあたりはたびたび学生にいろいろなことを聞いていますけれども、私自身もある時期から、「それじゃ大学の中でしか役に立たないようなことは君たち学ばなくていい」、ゼミなどではっきり言うように実はなっています。ただ、学ぶことの意味ということがわかれば、これは相当なパフォーマンスを示すという学生もいるわけで、このあたりはまたちょっと別の機会に具体的な話をさせていただくことができればとも思いますけれども。要するに、今の私立大学の学生ってどういう感じかということを、私のあくまでも直感的印象ですが、それを申し上げました。

入学者選抜の話をさせていただきます。ただし、ここからはいわば企業秘密に属する部分になりますので、詳しい数字などはお示しできないのですが、まず、私大の入学者選抜の特徴として、入口の数が大変多いこと、それらが、相当に長い期間にわたって順次行われていくということがあります。私も国立大学にいた頃は、入学定員の確保とともに、入学者数が定員を大幅に上回らないようにするためにそれ相当の苦労はしてきましたが、私学がどうやって定員前後の比較的狭い範囲に入学者数を抑えられるかといえば、この多様な入口の入学者と逐次的に決定していくというプロセスにあると思っています。

そうした多くの入口の中で、大学入試センター試験利用の部分からの入学者は結構な数を占めています。現在の私立大学のかなりの部分は、入学者選抜のために大学入試センター試験に依存していると言っていると思います。このあたりは、何とかして正確な統計資料が作られるといいと思うのですが……。まあ、一私学の一教員の立場を離れて客観的に言えばということですけれども。

受験生は、今、鈴木先生がおっしゃいましたように、国公立・私立型と私大専願型とあって、その両方が私立を受けてくるといふふうにおっしゃったわけですが、確かに国公立、あるいは国公立大学受験者層というのが20万人というのは、非常に底固いというふうに言われておりましたが、現実には国公立、国公立型と、私学型の3つにそう截然と分かれているわけではないだろうと思います。実際のところ、センター試験を受験をした上で、国公立を受験するつもりでいたんだけど、センター試験の点を見てみたら、これは無理ということであきらめたというケースがかなり多いだろうと思います。そのあたりはやっぱりダイナミクスがあって、20万という数はその受け皿の大きさということだけでは恐らく説明がつかない。これはやはり合格可能性ということ、さらに言えば、国公立大学の側の定員が一定数あって、そこにおける合

格可能性というようなものを考慮したときに、浮かび上がってくる20万人ということであって、そこでちょっとセンター試験敗退組に対して、言葉遣いは悪いかもしれませんが、私立が受け皿になってくるといふ面があることも否定できないと思うわけです。

それで、先ほど入学後の成績には差がないというふうに言いましたけれども、やはり何か非常にある種の敗者復活戦意識というようなものは持っている学生が多いのも事実です。世間では、中京大学という大学は実はスポーツの大学というふうに見られていますし、実際そうなんですけれども、もう一つ実は中部地域では、地方公務員をたくさん出している大学でもあるのです。実際公務員志望率というようなものが非常に高いのです。そこで、実際に公務員になった者を何年分カリストアップして調べたのを見たことがあるのですが、その中の非常に多くの割合が、センター試験型の入口から入っている学生であったのです。

ここで、センター試験というものがどういうものかということ、まあ、私の感想に近いですが、言わせていただくと、やはりまじめな学生に学習の積み上げを促しているということ、これは確かだろうと思います。これは以前、名古屋大教育学部にいたときに、附属学校の数学の先生と話していて、その先生がおっしゃったことな

んですけども、なかなか数学の受験勉強を一生懸命やっても、記述式の問題の得点というのは伸びてこない、ところがセンター試験の場合には大体学習した時間に比例して点数が上がっていくという意味で、その進歩が実感できる、この点はいいのではないかということでした。そういう意味でのまじめな積み上げを強化してくれるといえますか、それに対して応えてくれるような試験と言うことができるのではないかと思います。

そこから考えられることは、このセンター試験の受験を目指すということが、必ずしもセンター試験利用にはつながっていないだけども、学習習慣の涵養というようなものには役立っているのかもしれないとも思います。

それからもう一つ、先ほど受験をあきらめるケースがあると言いましたけれども、このクーリング効果とでもいいますか、つまり国公大学のほうへ行きたかったんだけど、やっぱりこの成績ではだめなんだというので、その受験をあきらめさせるような効果、これは一見悪い効果のようですが、受験生自身が自分の現在の能力について正しい認識をもつとか、いろいろな意味でプラスの面もあるのではないかと思います。

ただ、やはり一種暗記主義への傾斜というものも否定できないとは思います。も

う少し体系化した知識の枠組をつくって、そこのところへ個々の事項をはめ込んでいくような形で記憶をすればいいのにとというふうに思うんですが、何か非常に孤立的な、ディスクリートポイントなどと言いますが、ばらばらなものを暗記しようとするような傾向があつて、それはどうもセンター試験が助長しているのかもしれないという気がします。ただ、公務員試験であるとか、あるいは私の学部ではかなりの者が受けるのですが、社会福祉士の試験とかいったものが、本当にこの一種のディスクリートポイント主義ということになるので、その種の受験には結局有利になるという面もあるのかもしれません。センター試験の功罪相半ばする効果だと思いますけれども。

これほど多様な大学ができてしまったおかげで、入学者選抜を一つの試験でまかなえるのかということがやはり問題になると思います。まず一つは、学術研究の後継者選抜のためにこのセンター試験が邪魔になっているんじゃないかということ。それから、他方ではこれだけユニバーサル化した広い範囲の人たちを選抜するときに、選抜ではなくてもはや配置という時代になるのではないかということ。実は2002年私の、入研協会長就任のときのごあいさつでこの言い方をしたんですけども、何でもかんでもともかく一次元で序列化すればいいということでないとしたら、今のあり方はど

うなのかということという2点。これらはいわば正反対の方向で問題になるのではないかというふうに思います。ただこのことは、センター試験の責任とかいうことではなくて、つまり、作題とか実施体制とか、選抜の利用方法ということよりも、中等教育、高等教育の広い意味でのカリキュラムの問題として考えていかなければいけないと思います。

それにしても、本当にセンター試験的な学力が大事なのかということですが、やはりこの辺は大学教員の間でも意見が分かれるところです。そこには文系と理系の違い。特にやはり理系では、就職がよさそうだからとかいって入ってみてもなかなかついていけない、あるいはそういう意欲が続かないというようなことで、結構やはり中退率が高くなるということがあって、それはやはり基礎学力の不足ということになる。このあたりが一つポイントかもしれません。

他方で文系の方の問題はちょっと別のところにあるということで、実は社会に出る、就職という段階になってみると、あれほど偏差値的に差があったのに、実は本学などそう国立大学に見劣りしないどころか、むしろ上と見られるような企業に結構就職が決まっているかもしれないです。もっとも国立大学はそういうことを基本的に目指しておられないというふうに考えれば、そもそも同次元で競合すべきことでもないの

かもしれませんけれども。

そもそも一体企業の人事というのは何を見ているんだということですが、どうも知的なものよりも情意的なものが重視されているようです。これはある本¹⁾にあることですが、6つあると。地頭のよさ、これは入試で恐らくはかられている部分だと思いますが、なかなか意図的に向上させる、トレーニングで上がるということではないかもしれないですね。それから要領のよさ、これはある程度トレーニングのたまものかもしれません。3番目は持続力、第4が体力、第5がストレスに強いことだそうです。それから、他人に嫌われない、嫌わない。このあたりむしろ性格特性と言うべきもので、じゃそういうものってどういうところで得られるのだろうか。

最近、とにかく高校生は勉強しないということで、どうやったら勉強をさせられるかという話になるのですが、それと裏腹なのが実は運動部系部活、ほぼ60%男子学生は入っていると言われています。あるいは、私が学校評議員をしている愛知県内の進学校では、90%の男子学生は部活をやって、帰宅するのが8時過ぎとかそんな感じなんです。これって、まさかスポーツで一流になれると思っているわけではないわけでしょうし、これをやり続けて勉強時間のほうは余り多くないということが、一般の学生たちというのが、実は人生において本当

は何が必要なのかということが、わかっているのではないかという気もするのですね。

その一方で、恐らく国立大学が目指しておられるような、学術の後継者というほうで考えると、最近これはもう公然と言う人が出てきたのですが、研究者ならまともな人間はだめだと。いわゆる発達障害、人の心は読めない、空気が読めない、通常の社会組織では困ったタイプと言われる人なんですけれども、そういう度合いをもうちょっと高めてもらわないと彼は研究者にはなれないみたいなことを言う先生方が出てきたそうです。²⁾ そこら辺から先ほども申し上げた今後の方向である選抜から配置というところに、つながっていけばと思うものですから、最後にちょっと余計なことを申し上げました。

そう言えば時間もってしまいました。申しわけありません。漫談ということでお許しください。

どうもありがとうございました。

司 会（大津）

どうもありがとうございました。

ちょっと時間も押していますけれども、質疑に入りたいと思います。

質問者A

きょうは非常に膨大な情報をいただきまして、3人の先生方にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

それで、すみません、ちょっと質問とい

うか、確認させていただきたいのは、最初の内田先生のご発表の中のグラフで、これスライドの番号16だと思います。ちょっと数字が小さくて見づらいのですが、センター試験の新卒志願者の出願内訳で、国公立大・自県16.9%、国公立大・他県28.8%というこの円グラフなんですけれども、私立大学専願は26.7と、こう全体を丸められているんですけれども、この私立大学専願は自県・他県というのは何かわけがあれば教えていただければという点がお聞きしたいことです。

以上でございます。

内 田

私立大学専願の中での自県・他県の割合という話ですよ。今ちょっと数字にして持ち合わせておりませんけれども、とにかく私立大学のほうは個人が何校か、大体平均2もしくは3受けておりますので、もし自県・他県の話をする、自分が受けた大学数のうち、自県が何割いたのか、他県が何割いたのかという整理の仕方をしなければいけなくなります。それについてはきょう数字がぱっと出せませんけれども、2013年の入試研究ジャーナルのほうで、その比率をまとめたものがございまして、ちょっと見ていただけますでしょうか。

司 会（大津）

ほかにご質問ありましたら、どうぞ。

では、大体よろしいですか。

では、一応大体時間になりましたので、
それでは、これで大学入試センターセミナー
一を終わらせていただきます。

どうもご静聴ありがとうございました。

全国大学入学者選抜研究連絡協議会

平成25年度入研協大会（第8回）大会関連行事

『大学入試センターセミナー』

「人口減少期のセンター試験と受験出願動向の実相」

当日配布資料

内 田 照 久（大学入試センター研究開発部准教授）	161
鈴 木 規 夫（大学入試センター研究開発部准教授）	167

人口減少期のセンター試験と受験出願動向の実相

センター試験の受験出願状況の 地域特性と年次推移

大学入試センター 研究開発部
内田照久・鈴木規夫

2013年6月5日(水) 15:00-17:00 大学入試センター セミナー (大会関連行事)

はじめに

- ・ センター試験の受験者動向の情報の共有
- ・ 18歳人口の変化, 入試制度の影響を
全国規模で 歴史的に 俯瞰することで
地域性・時代性の特徴を 対比して表現
- ・ 高大接続の観点から 高校“新卒”者に焦点
- ・ セ試の歴史の中で何が変わってきたのか?
- ・ 安定的に変わらない特徴は何か?

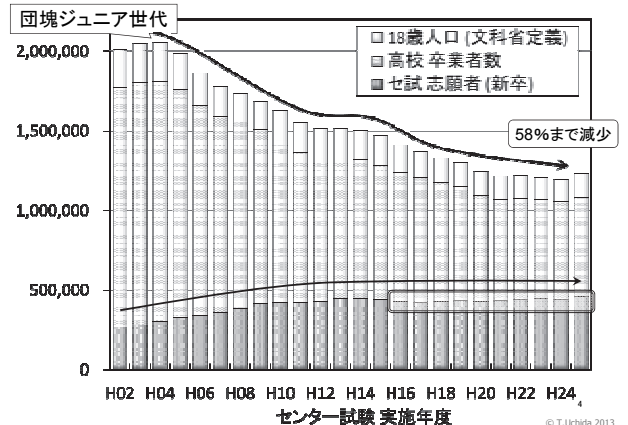
2
© T.Uchida 2013

あらまし

1. センター試験志願者の2層構造化
2. 高校卒業者の進学志望とセ試利用
3. セ試による出願状況の地域別の特徴
4. 今後の18歳人口の推移と予測
5. さらなる情報の共有のために

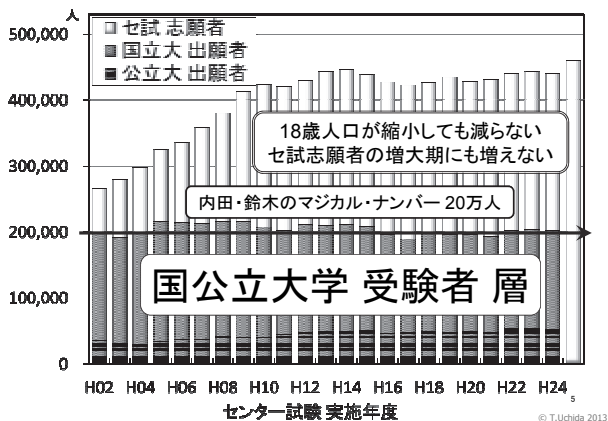
3
© T.Uchida 2013

1. 18歳人口とセンター試験志願者



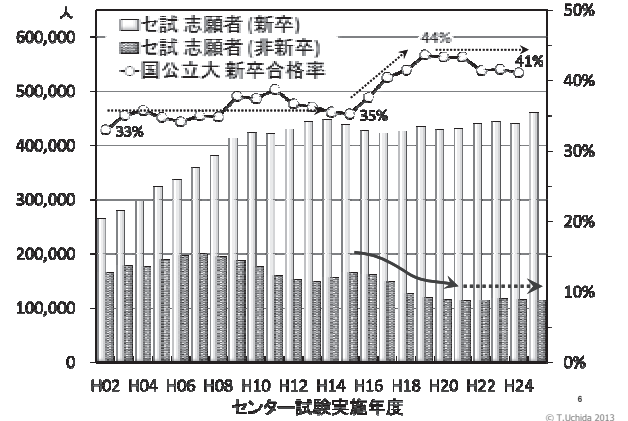
© T.Uchida 2013

1.1a センター試験の中核受験者層

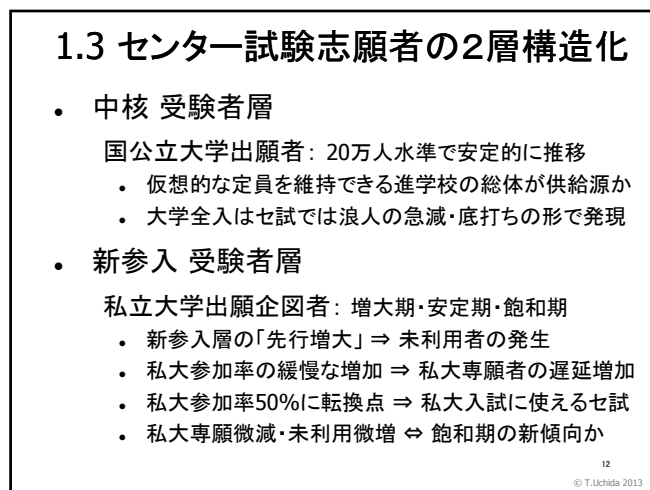
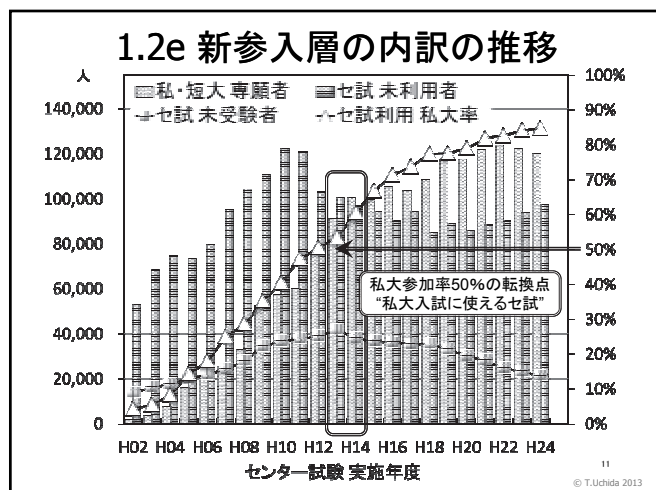
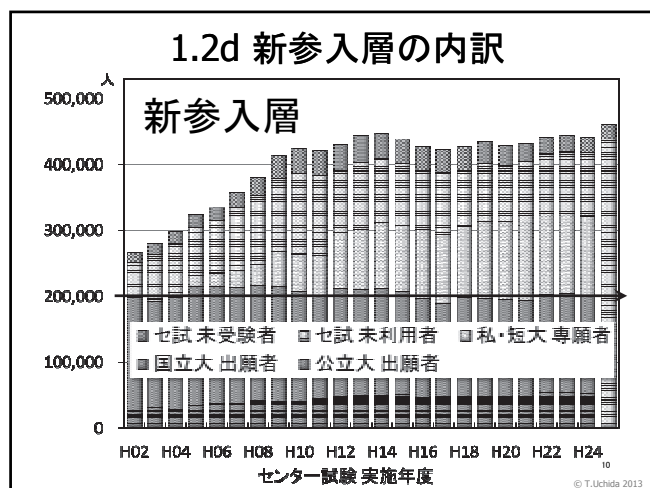
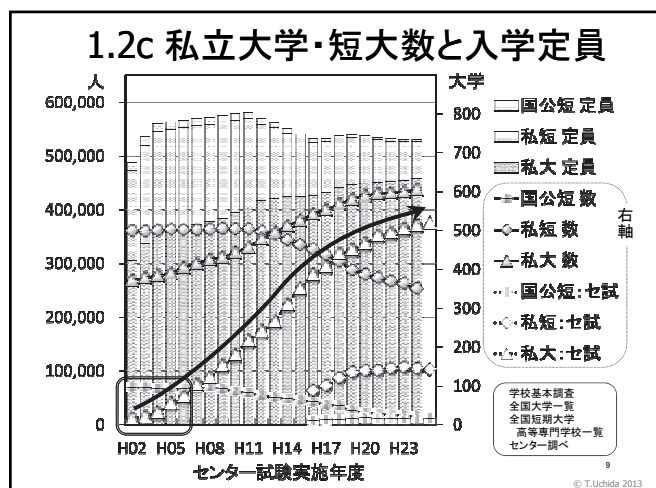
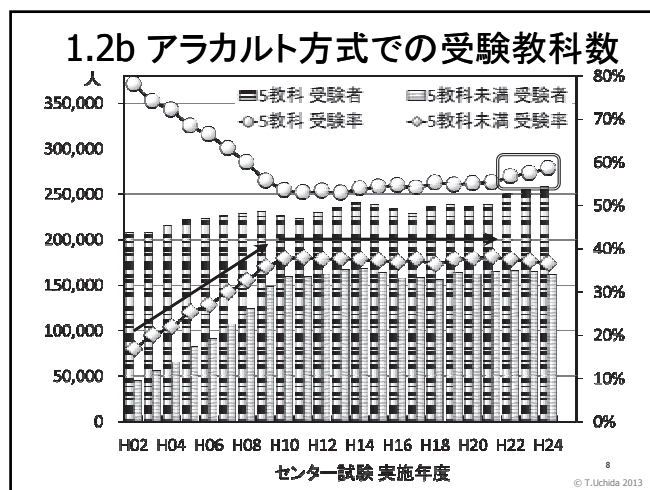
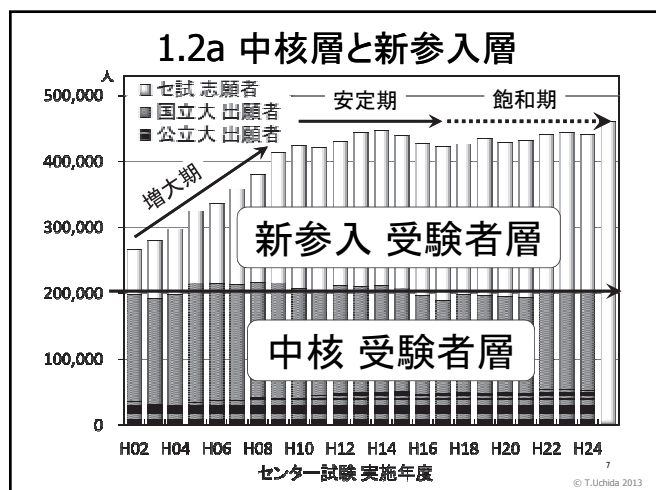


© T.Uchida 2013

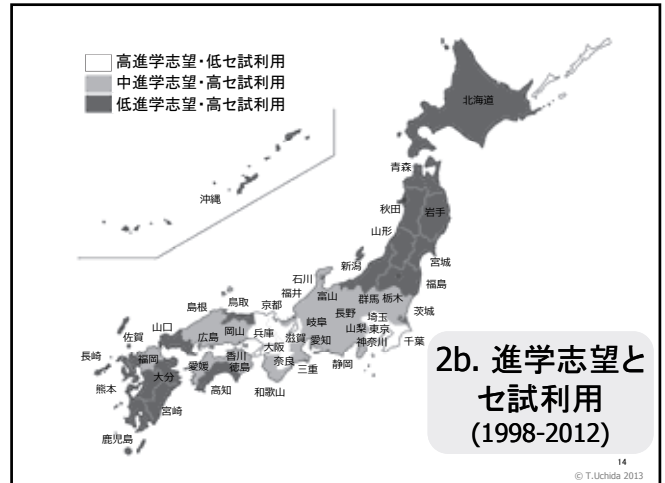
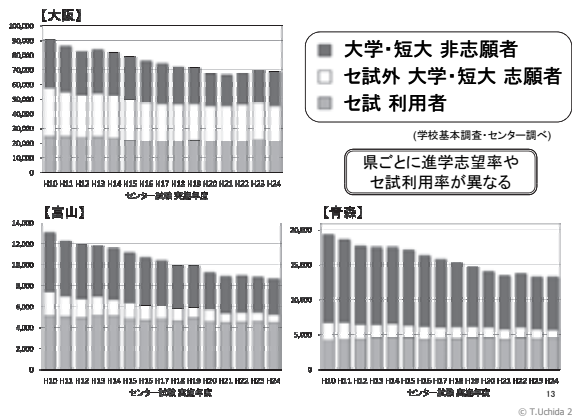
1.1b 新卒・《非新卒》志願者



© T.Uchida 2013



2a. 高卒者の進学志望率とセ試利用率

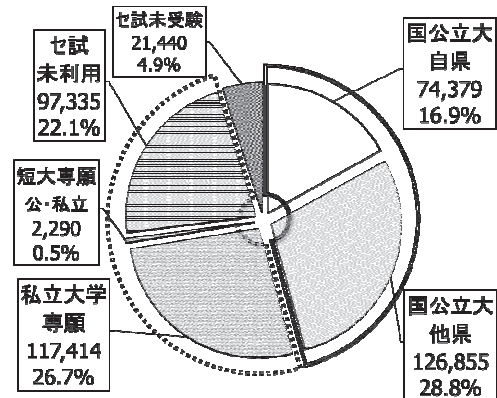


2c 進学志望とセ試利用の地域性

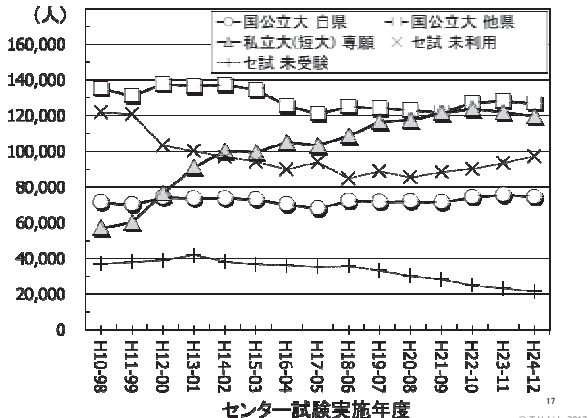
- 進学志望率とセ試利用率を県別に類型化
 - 高進学志望・低セ試利用: 首都圏・京阪神圏
 - 中進学志望・高セ試利用: 中間地域
 - 低進学志望・高セ試利用: 列島周縁部
- 地域によってセ試の使われ方が異なる
セ試での県別成績の比較はナンセンス
- セ試の利用内訳はさらに多様 ⇒ 次節へ
ex. 首都圏と京阪神では利用内訳は大きく異なる

15
© T.Uchida 2013

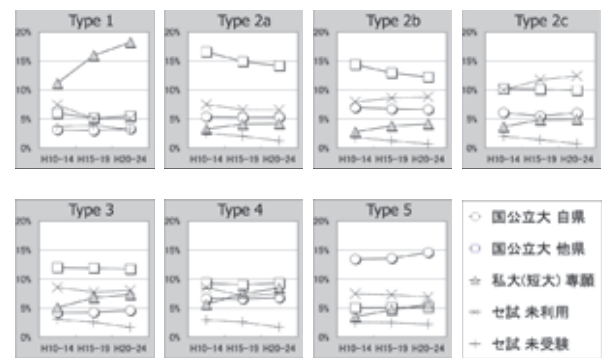
3.1a H24 セ試 新卒志願者 出願内訳



3.1b セ試・新卒者 出願内訳 推移



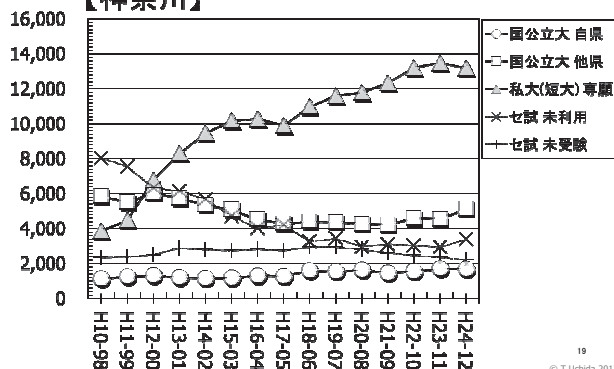
3.2 セ試・出願内訳 地域別 類型 (2013年版)



Type 1 私大単独 中心・増大 型

埼玉・千葉・東京・神奈川 (4)

【神奈川】

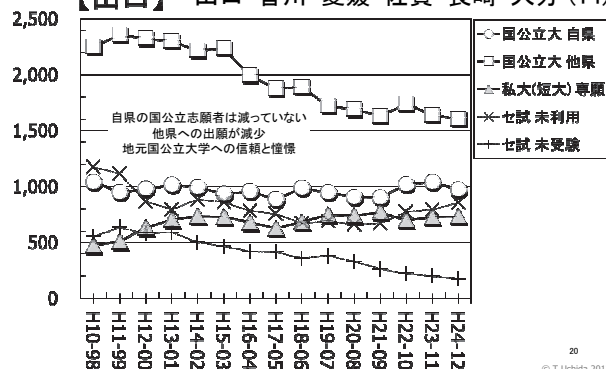


19
© T.Uchida 2013

Type 2a 他県 国公立大 中心(強)・減少 型

秋田・石川・福井・岐阜・奈良・和歌山・鳥取・岡山・山口・香川・愛媛・佐賀・長崎・大分 (14)

【山口】

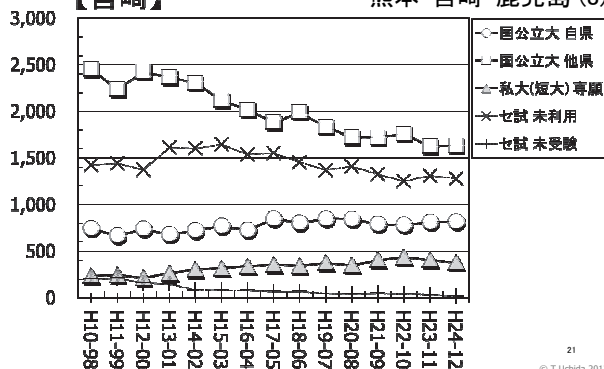


20
© T.Uchida 2013

Type 2b 他県 国公立大 中心(中)・減少 型

青森・山形・富山・島根・徳島・熊本・宮崎・鹿児島 (8)

【宮崎】

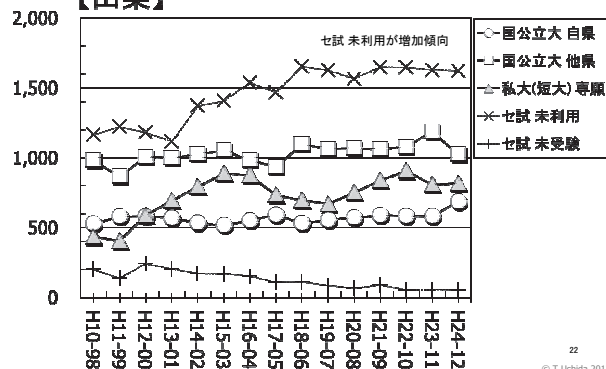


21
© T.Uchida 2013

Type 2c 他県 中心(弱) + 未利用 増加 型

岩手・山梨・高知 (3)

【山梨】

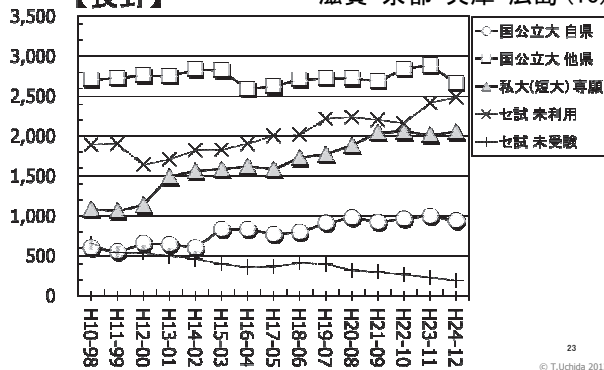


22
© T.Uchida 2013

Type 3 他県 国公立大 中心 + 私大 伸長 型

宮城・福島・栃木・長野・静岡・三重・滋賀・京都・兵庫・広島 (10)

【長野】

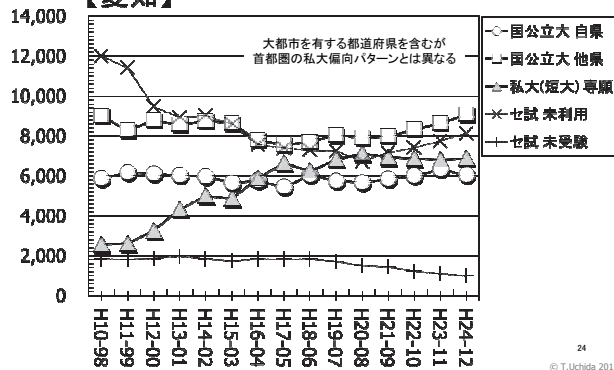


23
© T.Uchida 2013

Type 4 自・他県 国公立大 + 私大 接近 型

茨城・群馬・新潟・愛知・大阪・福岡 (6)

【愛知】

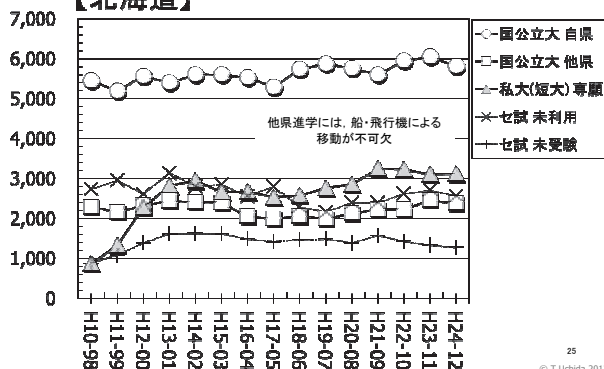


24
© T.Uchida 2013

Type 5 自県 国公立大 中心・安定 型

北海道・沖縄 (2)

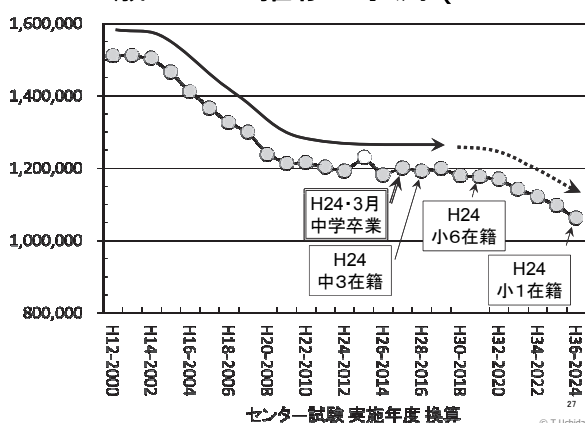
【北海道】



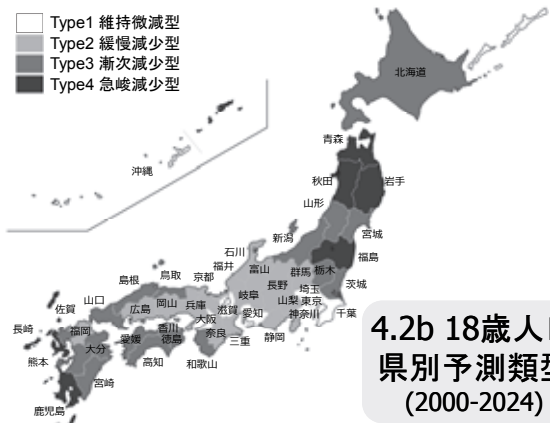
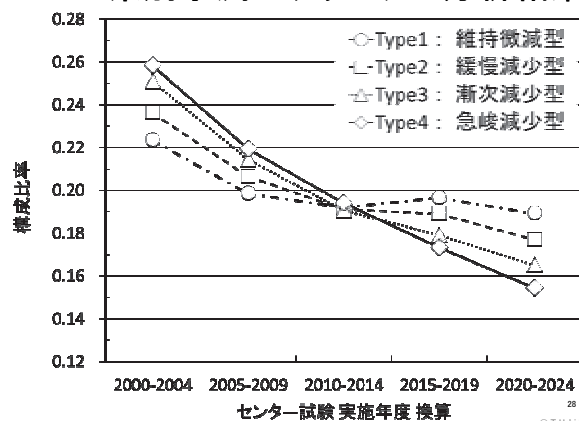
3.3 セ試による出願状況の地域別の特徴

- 都道府県ごとの出願状況には固有の特徴
地域の状況は全国総計のミニチュアではない
- 地域ごとの出願パターンには一定の傾向性
地域の事情・高校進路指導方針が定常的に影響
- 社会的な変化が年次推移の形で重畳
18才人口の減少・セ試利用の私大増加
- 年次推移は方向性を持って緩やかに生起
ニュース性を志向する報道と実状はやや異なる

4.1 18歳人口の推移と予測 (2000-2024)



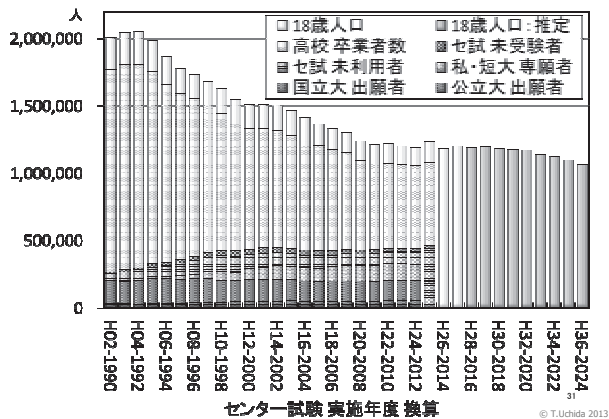
4.2a 県別予測のクラスター分析結果



4.3 今後の18歳人口の推移と予測

- 首都圏, 愛知, 滋賀, 大阪, 沖縄 は微減維持
- 本州・九州の外縁部で急峻減少
福島は若年層の県外移動を反映か
- 今後の人口移動によっては変化する可能性
しかし, 全体数は増えない (海外からの移民は除く)
- 高校の統廃合・定員削減数が予測の鍵か
地域ごとに人口減少の程度が異なる
マジカル・ナンバー20万人は維持されるか

5.1 18歳人口とセ試 1990-2024 (35年分)



5.2 さらなる情報の共有のために

- ・ 中核層：実質的に高大接続テストとして機能
- ・ 新参入層：多様な利用形態・流動的に変容
- ・ セ試：地域ごとに果たす役割が異なる
利用大学の個別方策が不可欠(地域特性・将来予測)
- ・ “高校での学習活動の成果を反映”の一点が‘要’
セ試が果たす機能と利用の現状に即した議論を
- ・ さらに検証すべき点について、ぜひご意見を
“新参入層”の用語の改善代替案も募集中

32
© T.Uchida 2013

ご清聴 どうもありがとうございました

参考文献

- 文教協会(2012).『平成24年度 全国大学 一覧』 文教協会
- 文教協会(2012).『平成24年度 短期大学 高等専門学校 一覧』 文教協会
- 文部科学省(1988-2013).『昭和62年度～平成24年度 学校基本調査報告書(高等教育機関編)』 文部科学省
- 文部科学省(1988-2013).『昭和62年度～平成24年度 学校基本調査報告書(初等中等教育機関 専修学校・各種学校 編)』 文部科学省
- 鈴木規夫・嶋野英彦・石岡恒憲(2003).「我が国における共通テスト・システムの構造(1)―共通テスト志願から次年度再志願までの時系列的行動分析―」『大学入試センター紀要』, 32, 13-38.
- 鈴木規夫・荒井克弘(2010).「大学入試センター試験制度における高校の階層構造の特徴」『大学入試センター紀要』, 39, 1-12.
- 内田照久・鈴木規夫(2011).「大学入試センター試験における中核受験者層の歴史的遷移」『大学入試研究ジャーナル』, 21, 83-90.
- 内田照久・鈴木規夫(2012).「大学入試センター試験における高校新卒志願者の地域別大学出願状況の年次推移」『大学入試研究ジャーナル』, 22, 105-118.
- 内田照久・鈴木規夫(2013).「大学入試センター試験の中核受験者層と私立大学への出願状況」『大学入試研究ジャーナル』, 23, 85-93.

34
© T.Uchida 2013

センター試験による 私立大学への出願動向

鈴木規夫
(大学入試センター研究開発部)



1

センター試験

- 全国一斉に実施される
- 基礎的な学習の達成の程度を判定
- 国公立大が、それぞれの判断と創意工夫に基づき適切に利用し、大学教育を受けるにふさわしい能力・適性等を多面的に判定する
- アラカルト方式による自由な科目選択
- 科目の多様な利活用
- 制限のない私大への出願

2

入試環境の変化(1)

- H2にセンター試験が導入されて23年が経過した。
その間、入試を取り巻く環境は大きく変化
- 高校卒業者数の大幅な減少(学校基本調査)
H2:180万人 → H23:106万人
- セ参加の公立・私立大学数の大幅増加
H2: 132大学(国:95、公:37、私:16)
↓
H23:674大学(国:82、公:79、私:513)

3

入試環境の変化(2)

- 短大から4大への移行に伴う私大数の急増
 - ・短大:593大学(H2) → 388大学(H23)
 - ・私大:372大学(H2) → 596大学(H23)
- 社会の変化に対応した学部の新設・再編
 - ・保健・福祉系(保健看護、健康福祉等)
 - ・カタカナ系(マーケティング、バイオ環境等)
 - ・分類が不能な学部(21世紀アジア、地域発展等)
- 公立大の再編と統合／私大の公立大化
 - ・愛知県立大+愛知県立看護大⇒愛知県立大、等
 - ・私立⇒公立(高知工科大、名桜大、鳥取環境大等)

4

セ受験者の出願行動を知る

- このような多様な変化の中で、セ志願者は
 - ・一体どのような行動をとっているのか？
 - ・国公立大では？ 私立大では？ 地域では？⇒公表資料だけでは、十分な状況を把握できない
⇒荒い情報で議論されることが多い(例:地元志向が強まった？→自県志願者変わらず、志願総数減少)
- 志願者の行動を知ることは
 - ・制度のあり方を検討する上で有用
 - ・大学にとっては、志願者確保に関する検討を行う上で有用

5

私大動向把握の必要性

- その中で、国公立大と私大が利用する試験でありながら、私大の利用状況については、ほとんど公表されていなかった(e.g. 大学数、学部数)
- 入試研究の現状
 - ・国公立大中心であった
 - ・私大に関するデータ整備が不十分等の理由から、分析結果が発表される機会が少なかった(椎名:2006、内田・鈴木:2011等)
- 私大がどのように利用されているかを正確におさえることは、制度のあり方を検討する上で欠かせない。また、志願者確保の面からの支援情報にもなる。

6

対象

- 高校卒業見込み者(現役)
- セ試験受験者(1教科以上受験した者)
- 単年度→H24を中心
時系列→H18～H24(7年間)
- 個人単位の分析

7

方法

- 意志決定の一場面として捉え、セ志願者がどのような方略に基づいて国公大と私大を選択し、そのためにセ試験をどのように利用するかを調べる
 - (1) 出願大学の特定化—大学の1本化
出願先として、**国公大1校**、**私大1校**に絞る
 - (2) 出願方略の分類
「国公私」「国公」「私」「未利用」の4パターン
 - (3) 受験方略の分類
「5教科受験」「一部教科受験」の2パターン

8

(1) 出願大学の特定化

- 国公大を1校に絞る
国公大へ1校出願した場合は、その大学
複数大学へ出願した場合は、以下のルールに従う
 - 【ルール1】 合否状況による順位付け
合格>辞退>不合格
 - 【ルール2】 同一順位の場合
前期>後期>中期
- 私大を1校に絞る
最初に成績提供を行った大学

9

(2) 出願方略の分類

出願パターン	国公大	私大	短大	出願パターン
(1) 国公私短	○	○	○	国公私
(2) 国公私	○	○	×	
(3) 国公短	○	×	×	
(4) 国公	○	×	×	国公
(5) 私短	×	○	○	
(6) 私	×	○	×	私
(7) 短	×	×	○	
(8) 未利用	×	×	×	未出願
(9) 未受験	×	×	×	
				⇒除外

10

(3) 受験方略の分類

教科	受験パターン	
	5教科	一部
国語	○	一部教科受験
地歴(公民)	○	
数学	○	
理科	○	
外国語	○	

11

結果

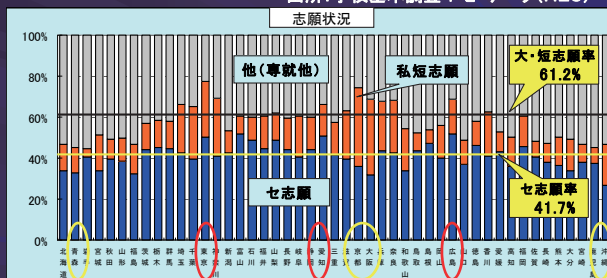
- 出願状況全般
 - ・大学・短大志願状況(学校基本調査)
 - ・私大参加数と私大出願者数
- 出願方略
 - ・出願パターン
 - ・国公大と私大の学部間関係
 - ・私大への出願回数
- 受験方略
 - ・受験パターン
 - ・出願パターンと受験パターンの関係
 - ・センター試験の受験科目数
 - ・センター試験の科目受験率

12

出願状況全般

大学・短大志願率／セ志願率

出所: 学校基本調査+セ・データ(H23)

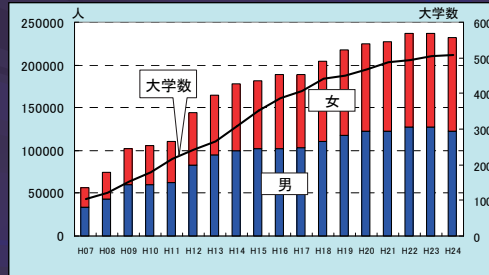


- セ志願率高→東京／愛知／広島
- セ志願率低→青森／大阪／京都／沖縄

13

出願状況全般

セ参加私大数と私大現役出願者数



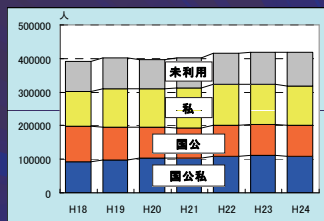
- 現役私大出願者数はH23で最大
- 男子はピークを過ぎやや下降。女子はフラット

14

出願方略

出願パターン(1) 出願パターン構成比

出願パターン	N	%
国公私	109602	26.2
国公	91579	21.9
私	117262	28.0
未利用	99830	23.9
計	418273	100.0

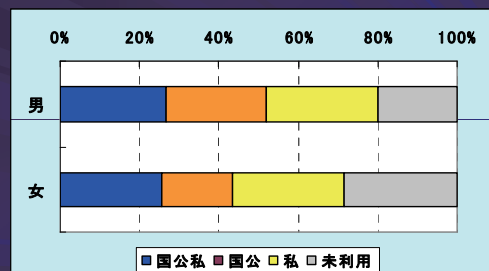


- 4つのパターンはほぼ等分
- 過去7年間は安定して推移

15

出願方略

出願パターン(2)ー性別・構成比

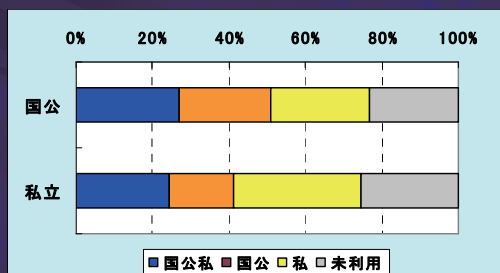


- 女子→「国公」少なく、「未利用」多い

16

出願方略

出願パターン(3)ー高校設置別・構成比

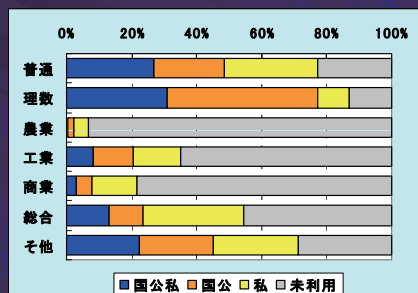


- 私立高校→「私」多い

17

出願方略

出願パターン(4)ー高校学科別・構成比

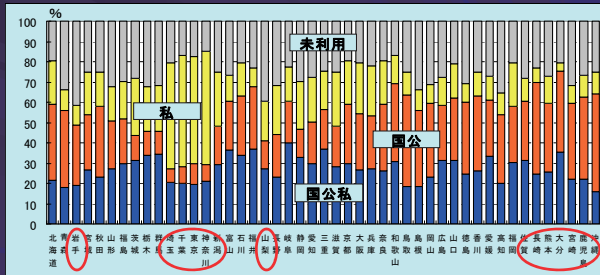


- 専門学科→「未利用」多い
- 理数科→「国公」多い

18

出願方略

出願パターン(5)ー地域別・構成比



- 国公立→九州
- 私→首都圏
- 未利用→岩手、山梨

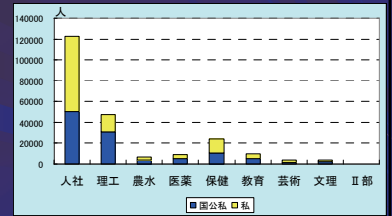
19

出願方略

出願パターン(6)ー私大・専門分野出願者数

専門分野	N	%
人社	122436	54.0
理工	47050	20.7
農水	6677	2.9
医薬	9177	4.0
保健	23920	10.5
教育	9867	4.3
芸術	3651	1.6
文理	3993	1.8
Ⅱ部	293	0.1
計	226864	100.0

出願者数(出願パターン)



- 全体→人社系、理工系、保健系で多い
- 比較→「私」は人社系、「国公立」は理工系

20

出願方略

出願学部間の関係(国公立 * 私)

「国公立」

同一分野: 67. 6%

専門分野	人社	理工	農水	医薬	保健	教育	芸術	文理	Ⅱ部	計
人社	90.1	2.5	0.2	0.2	2.7	1.9	0.2	2.1	0.1	100.0
理工	7.8	78.1	3.6	3.8	4.1	0.6	0.3	1.4	0.2	100.0
農水	9.7	30.6	41.4	5.5	9.5	0.4	0.1	2.7	0.1	100.0
医薬	7.3	11.2	1.3	49.3	29.7	0.7	0.0	0.4	0.0	100.0
保健	23.0	3.0	1.9	3.8	64.9	2.5	0.1	0.7	0.1	100.0
教育	51.4	8.0	0.9	0.9	10.3	24.7	1.6	2.1	0.1	100.0
芸術	18.9	5.3	0.2	0.1	3.0	0.5	71.1	0.9	0.0	100.0
文理	64.0	23.2	1.5	1.4	5.8	1.6	0.1	2.4	0.1	100.0
Ⅱ部	46.5	39.5	0.6	1.5	5.0	3.3	0.3	1.1	2.3	100.0
計	61.6	13.8	2.4	3.4	11.4	3.9	1.6	1.8	0.1	100.0

- 同一専門分野への出願傾向大

21

出願方略

出願学部間の関係(私 × 私)

* 私大2校以上出願者

同一分野: 83. 3%

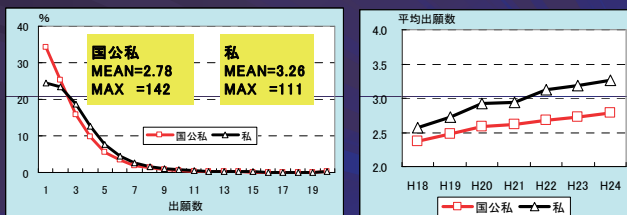
専門分野	人社	理工	農水	医薬	保健	教育	芸術	文理	Ⅱ部	計
人社	90.5	1.8	0.2	0.1	3.4	1.9	0.3	1.8	0.1	100.0
理工	3.4	87.0	3.1	1.2	2.2	0.4	0.5	2.0	0.3	100.0
農水	5.4	20.1	65.2	1.8	4.0	0.3	0.1	2.9	0.0	100.0
医薬	2.8	7.7	1.3	80.7	7.0	0.2	0.0	0.2	0.1	100.0
保健	17.3	4.7	2.9	1.8	67.9	4.4	0.4	0.5	0.0	100.0
教育	37.0	2.8	0.3	0.3	12.6	45.2	0.2	1.5	0.0	100.0
芸術	8.7	4.5	0.2	0.1	0.7	0.4	84.7	0.7	0.1	100.0
文理	52.1	18.2	3.9	0.8	4.3	1.5	0.7	18.4	0.1	100.0
Ⅱ部	38.1	27.8	0.0	0.8	0.8	0.0	0.0	5.6	27.0	100.0
計	56.2	20.8	3.1	3.5	9.5	3.5	1.4	2.0	0.1	100.0

- 私大同一専門分野への出願傾向は「国公立」より高い

22

出願方略

私大への出願回数



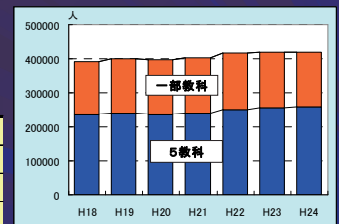
- 私 > 国公立、1~4回以内が8割
- 平均出願数は、年々増加

23

受験方略

受験パターン(1)

受験パターン	N	%
5教科	257559	61.6
一部教科	160714	38.4
計	418273	100.0

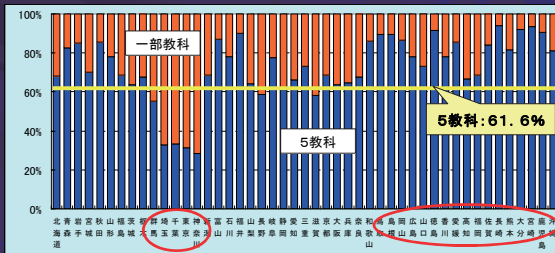


- 「5教科」→60%、「一部教科」→40%
- 安定推移

24

受験方略

受験パターン(2)ー地域別

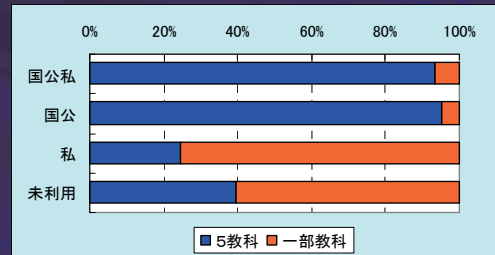


- 「一部教科」→首都圏で多い
- 「5教科」→中国・九州で多い

25

受験方略

出願パターンと受験パタンの関係

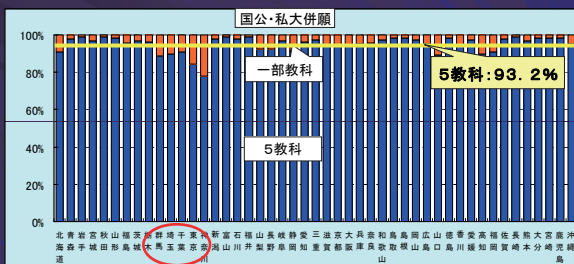


- 「国公私」「国公」→5教科
- 「私」「未利用」→一部教科

26

受験方略

「国公私」の受験パターン(地域別)

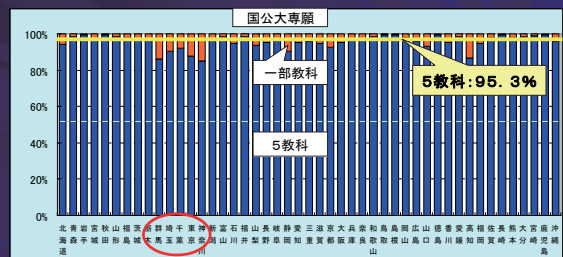


- 東京・神奈川→5教科受験者比率低い

27

受験方略

「国公」の受験パターン(地域別)

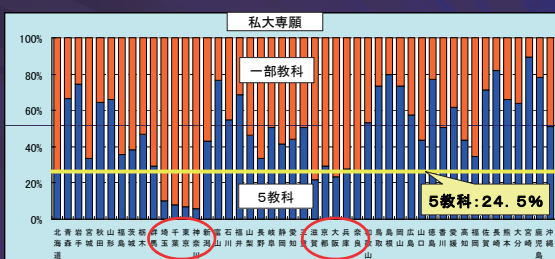


- 「5教科」は大都市圏で低い構成比

28

受験方略

「私」の受験パターン(地域別)

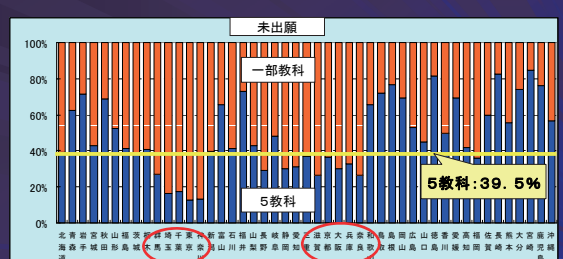


- 「5教科」は大都市圏で低い構成比

29

受験方略

「未利用」の受験パターン(地域別)

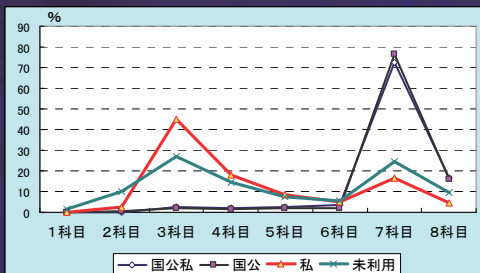


- 「未利用」→大都市周辺

30

受験方略

センター受験科目数(出願パターン)

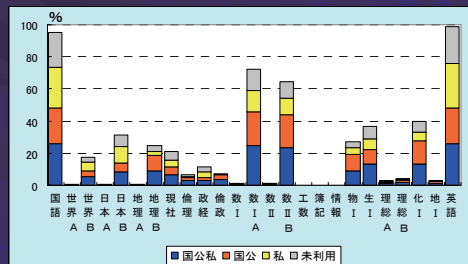


- 「国公私」「国公立」→7科目(国1/地公1.2/数2/理1.2/外)
- 「私」「未利用」→3科目(文系)/7科目(理工系)の二山

31

受験方略

科目受験率(出願パターン含む)



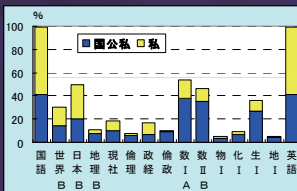
- 共通科目→国語/英語
- 国公立・国公立→地理B/数I A/数II B/物I/生I/化I
- 私 →世B/日B

32

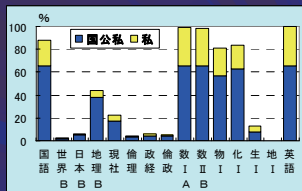
受験方略

科目受験率(私大・人社系/理工系)

人社系



理工系

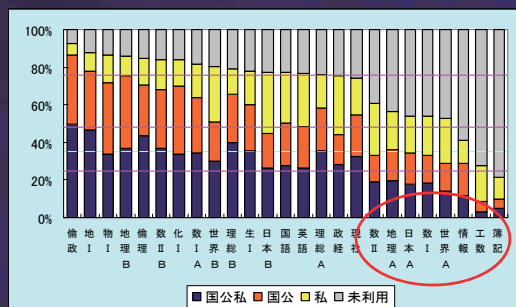


- 人社系→国・英+ (数/日B/生I)
- 理工系→数・英+ (国/理)

33

受験方略

出願パターン構成比(科目別)

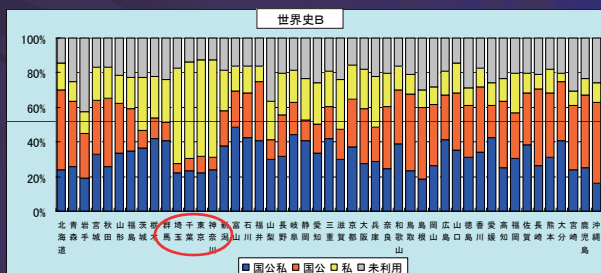


- 私 →日B
- 未利用→簿記/工数/情報/世・日・地A/数I/数II

34

受験方略

地域別・出願パターン構成比(世界史B)

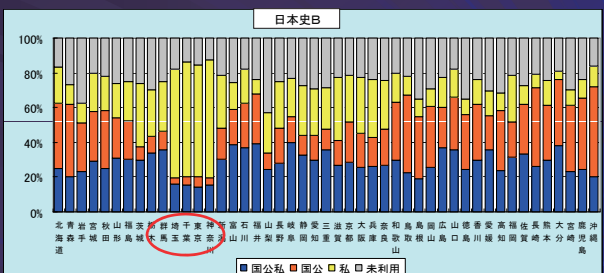


- 首都圏→「私」
- 中四国・九州→「国公立」

35

受験方略

地域別・出願パターン構成比(日本史B)

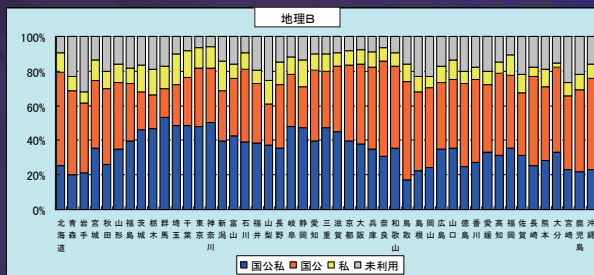


- 首都圏→「私」
- 中四国・九州→「国公立」

36

受験方略

地域別・出願パタン構成比(地理B)

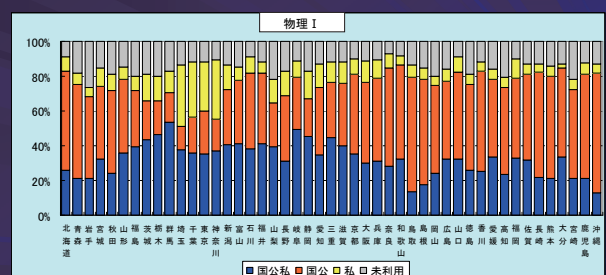


■ 全国的→「国公私」「国公」

37

受験方略

地域別・出願パタン構成比(物理I)

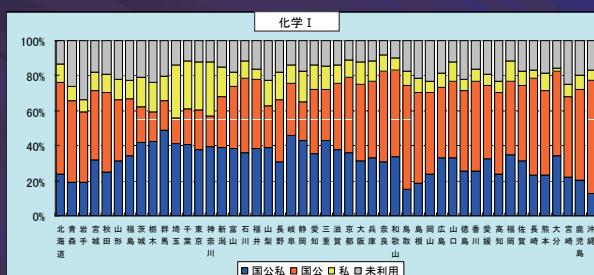


■ 首都圏→「私」
■ その他の県→「国公私」「国公」

38

受験方略

地域別・出願パタン構成比(化学I)

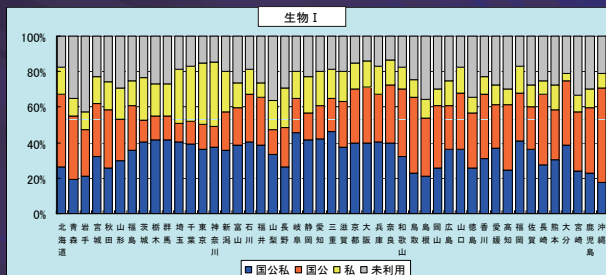


■ 首都圏→「私」
■ その他の県→「国公私」「国公」

39

受験方略

地域別・出願パタン構成比(生物I)



■ 首都圏→「私」構成比高め
■ 全国的→「未利用」構成比高め

40

データから見てくるセ入試の現状(1)

- (1) 頭打ちのセ志願者数
参加私大数もフラットに近付き、全体として志願者数は頭打ち。男子はすでに下降傾向
- (2) 2極化したセンター試験の出願者層
⇒ 大学への出願は、「国公私」「国公」「私」「未利用」の4パタンに分類されるが、各パタンの人数は概ね10万人前後で推移
⇒ 7科目中心の「国公私/国公」
3・7科目の2山をもつ「私/未利用」
⇒ 私大出願者は、それらの層が混在した形で存在

41

データから見てくるセ入試の現状(2)

- (3) 人社系や都市部に多い私大専願者
私大への出願は人社系中心、かつ首都圏中心
- (4) ぶれの少ない専門分野の選択
国公立と私大で同一の専門分野へ出願した者は約7割
- (5) 私大への出願は2~4校
私大への出願回数は1回~4回程度。全体の8割を占める。ピークは出願回数1回のL字カーブの分布

42

データから見てくるセ入試の現状(3)

- (6) 「未利用」者に多い少数受験科目・専門学科生
「未利用」者は、地歴A科目、数学Ⅰ等の少数受験科目に占める割合が極めて高い
- (7) 安定した入試統計量の推移
受験生は毎年変わってくるのに、多くの入試統計量は安定して推移している場合が多い。
出願に関する4つのパタンの構成比も年度間を通して安定して推移している。

43

ご清聴ありがとうございました

44

【編集委員】

委員長	宮 埜 壽 夫 (大学入試センター)
委員	寺 下 榮 (静岡大学)
	川 嶋 太津夫 (神戸大学)
	淵 田 吉 男 (九州大学)
	中 島 範 行 (富山県立大学)
	大 久 保 敦 (大阪市立大学)
	小 山 裕 徳 (東京電機大学)
	本 郷 真 紹 (立命館大学)
	広 野 修 一 (北里大学)
	岡 本 崇 宅 (岩手大学)
	大 塚 雄 作 (京都大学)
	村 上 隆 (中京大学)
	荒 井 克 弘 (大学入試センター)
	大 津 起 夫 (大学入試センター)
	山 村 滋 (大学入試センター)

大学入試研究の動向 第31号

平成26年3月 発行

全国大学入学者選抜研究連絡協議会
独立行政法人大学入試センター

〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23

独立行政法人大学入試センター総務企画部総務課
電話 (03) 5478-1216 (直通)